

繪本  
平家物語  
全

091346-000-2

特12-470

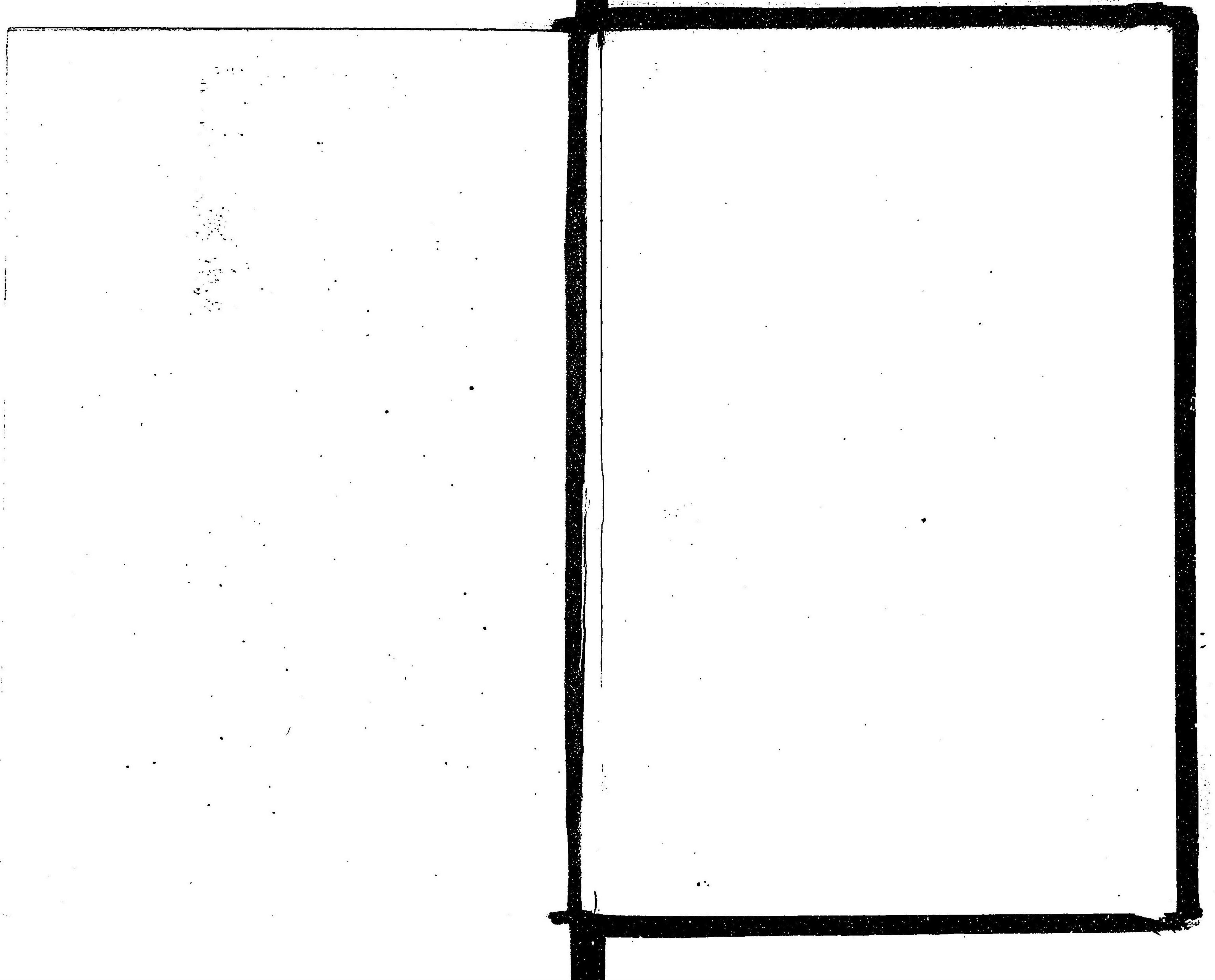
平家物語

高井 蘭山/編

M19

DBN-2240





平家物語自叙 明治十九年十一月十八日內務省發行

夫喜怒哀樂愛惡欲謂之七情。人無不有。只其發中節者。聖也。不中節者。凡也。神釋戀喪者。世態也。七情與世

能交而狂言綺語成焉。世有平家物語。其流布也。舊矣。

此作威權徒之手。故詭譎方便過半。雖然源平兩家

衰。自六條天皇仁安。至安德天皇壽永。

民之惱亂。如目擊然。抑平清盛公微也。

門。掃髮塵。拭羹污。童子戲。喚名高平太。

保元平治以降。僅識于世。其祖正盛藏人。仕五位家執。

諸國受領之鞭。後擢至正四位下。父忠盛自堂下武士。

昇漸交殿上其子。而立地究人臣位。官丞相。祿數邦。一。

門悉列公卿。食半日本。強爲帝王。外祖長失人臣。禮追捕權門勢家。損亡雲客殿上。沒倒其莊園。擅屬子孫。掠奪其資財。濫與所從。進退帝位。奉射親王。無怕容。焚失佛寺。屠斬僧侶。不酸色。刺遷法皇於城南離宮。流博陸於海西絕域。雖然。悚虎威。貴賤束手。緇素戴足。古來雖有叛臣。未有若斯。本邦王法。當此時將墜地。天下士庶欲嗽生其肉。存忠者不堪。而適雖有起兵者。或有反忠。或兵不足。不遂事。怒爲朝敵而亡。不痛哉。相國禪門偶免。水死而火薨者。僥倖耳。積不善餘殃。及宗族。平氏漂西海之波瀾也。沈浸月。潮汐深。憂危掩霜。蘆葦脆命。皇居行宮。唯扁舟。如龍頭鷁首。何。卿相入埴。生小屋。奈金

殿玉樓何。鳴銜噪洲渚。增曉怨。楫聲響磯間。傷夜魂。聽啼遼海野。鴈則愕。兵士竟夜漕艦。見簇遠松。白鷺則疑源氏味爽。舉旗翠帳紅閨。變兼簾露屋。銀爐薰烟化蛋。藻鹽火。暨緒方維義。逐平族於太宰府也。公卿徒步。女房素跣。破足鮮血。益紅裙色。踰嶮攀峻。裳衣寸裂。亂白袴裔。遣調度。捐筭簪墮寶。失珠其艱其難。不俟言。竟有天運循還之期。倏視盛者必衰之理。鎌倉右幕下起。東國岐蘇義仲發北國。岐蘇先入追平家。鎌倉範賴義經後及討岐蘇之非法。殫平氏於攝州一谷。讚州八島。長州壇浦。無有子遺焉。平盛源衰世。保元壽永。雄榮花榮耀。娛二十餘年。夢後白河法皇肇視白日晴天。宇宙億

兆安堵勉業。鎌倉家勳績。於是乎廣矣。大矣。人物之善。惡是非。將士之智思剛臆。列夫之義。貞女之操。祭乎明。于此今爲兒女子誌。平家物語十二冊。讀人冀弃怪異。說探眞面目。有溫故之一助云。

文政九年丙戌夏至

東武南郊芝伊血子隱士

高井蘭山叟題



源三位賴政入道





源九郎判官  
義経

新中納言  
源朝臣



能登守敏経

小松内大臣重盛公

薩摩守忠度

平家物語 總目錄

- 平家の起原清盛公繁榮。妓王妓女佛御前の榮枯
- 近衛院二條院二代の後。延曆頼打論攝政の供人資盛の無禮を咎む
- 新大納言成親卿謀叛。山門神興を振奉つて師高兄弟が濫行を訴訟す
- 多田行綱返忠。成親卿一身黨類被召捕。重盛公憐愍
- 重盛公新大納言の命乞。門脇教盛卿丹波少將の命乞。重盛公諫諍
- 新大納言配所よ卒去。藤藏人謀めて徳大寺殿昇進。鬼界島よて康頼卒都婆を流す
- 丹波少將成經。平判官康頼法師救免。中宮御産皇子御降誕
- 有王俊寛が専途を見。小松大臣病名醫を拒。同逝去
- 平家より關白殿を流罪し。公卿殿上人多くの官を削。法皇を鳥羽殿よ押籠奉る
- 主上を降し春宮を廢祚おし奉る。高倉宮御謀叛願れ御所を開せ給ふ
- 長谷部信連頼朝の勅。高倉宮園城寺入修衆徒よ頼給ふ
- 三位頼政入道父子自害。高倉宮御最期三井寺炎上
- 都を藤原へ遷す。頼朝卿東國よ旗よ揚る。文徳上人靈行
- 佐殿院宣を頂戴。平家より討手の勝士七萬餘騎富士川より逃生る

- 都を平家城よ還す。中將重衡薩摩守忠度を將として奈良を攻。新院崩御
- 小督殿を捕尼とす。木曾次郎冠者義仲信州よ旗を建
- 四國西國平家よ背。太政入道熱病よ薨去。城資永永茂が軍事
- 越前國火燧城軍。加賀國砥浪山軍。木曾殿妙策
- 加賀國篠原合戦實盛討死。山門の大衆木曾殿よ語れ平家よ背。
- 主上よ供奉し平家都を避。經盛卿の息經正御室の御所へ御暇乞
- 青山の琵琶傳來の説。平家福原を落纜を解て西海よ漂ふ
- 木曾義仲藏人行家都よ入。高倉院四の宮法皇へ召る
- 緒方經義九州の平家を追出す。前右兵衛佐殿將軍の院宣を賜ふ
- 播州室山軍藏人行家働。木曾法住寺殿を攻奉り根柢を成
- 範頼義経宇治勢多と破。石田爲久栗津原よ義仲と討
- 一谷軍熊谷平山先陣を薨ふ。生田杜軍梶原平三二度の魁
- 一谷落城平家諸將士討死。一門再び海上よ漂ふ
- 平家諸將の首大路を引渡す。法皇讃州の平氏へ院宣を下さる
- 重衡卿關東下向。小松三位經盛高野山よ剃髮す



○小松三位中將維盛入道入水。瀛海義氣。佐々木藤綱藤戸の海を渡す  
 ○讃州入島軍義経武功。瀛海水尾鏡引。義経誤て弓を流す  
 ○伊勢三郎智計源能を降す。境浦船軍平家滅亡

○梶原謙言鎌倉殿義経を勘氣せらる。平宗盛公父子島津

○土佐源正信源朝夜誅伏誅。義経都落難風吹戻さる

○頼朝源氏奉國總追捕使を賜ふ。文皇流罪。六代御前を斬しむ

○平家物語源氏奉國

○建禮門院源氏奉國田吉より山原へ移住。法皇小原御幸

○御任生

巳上

平家物語總目録終

持12  
470

平家物語

東武 高井蘭山翁述

平氏の起原清盛公繁榮妓王妓女佛御前の榮枯



...の響あり沙羅双樹の花の色盛者必衰の理を顯す者久しから  
 ...の夜の夢の如く...  
 ...の友康和の義親平治の信頼驍も健を思ひく...  
 ...の詩を及べれぬ其祖先と云へ人皇五十代桓武天皇第五の皇子一品式部  
 ...の時始て平の姓と賜り從五位下上總介叙爵ありしより忽ち王氏を  
 ...の將軍長望後常陸大掾國香と改め將門と戦ひて卒す其子鎮守府將軍  
 ...の門を討亡す其次男維衡より六代目を正四位下備前守忠盛といへり才  
 ...の受領ありし忠盛に至始めて具殿を聽され七十五代崇徳院の時仙  
 ...の執柄と道經昇られけり或時備前國より昇られし院より明石の浦へと仰られ

しか

有明の月を明石の浦風よ波どかきこそよると見へしが

と上たる故に威の餘り俊頼朝臣金葉集勅撰は此歌を入しめ給へり又永久の末年祇園女侍とて

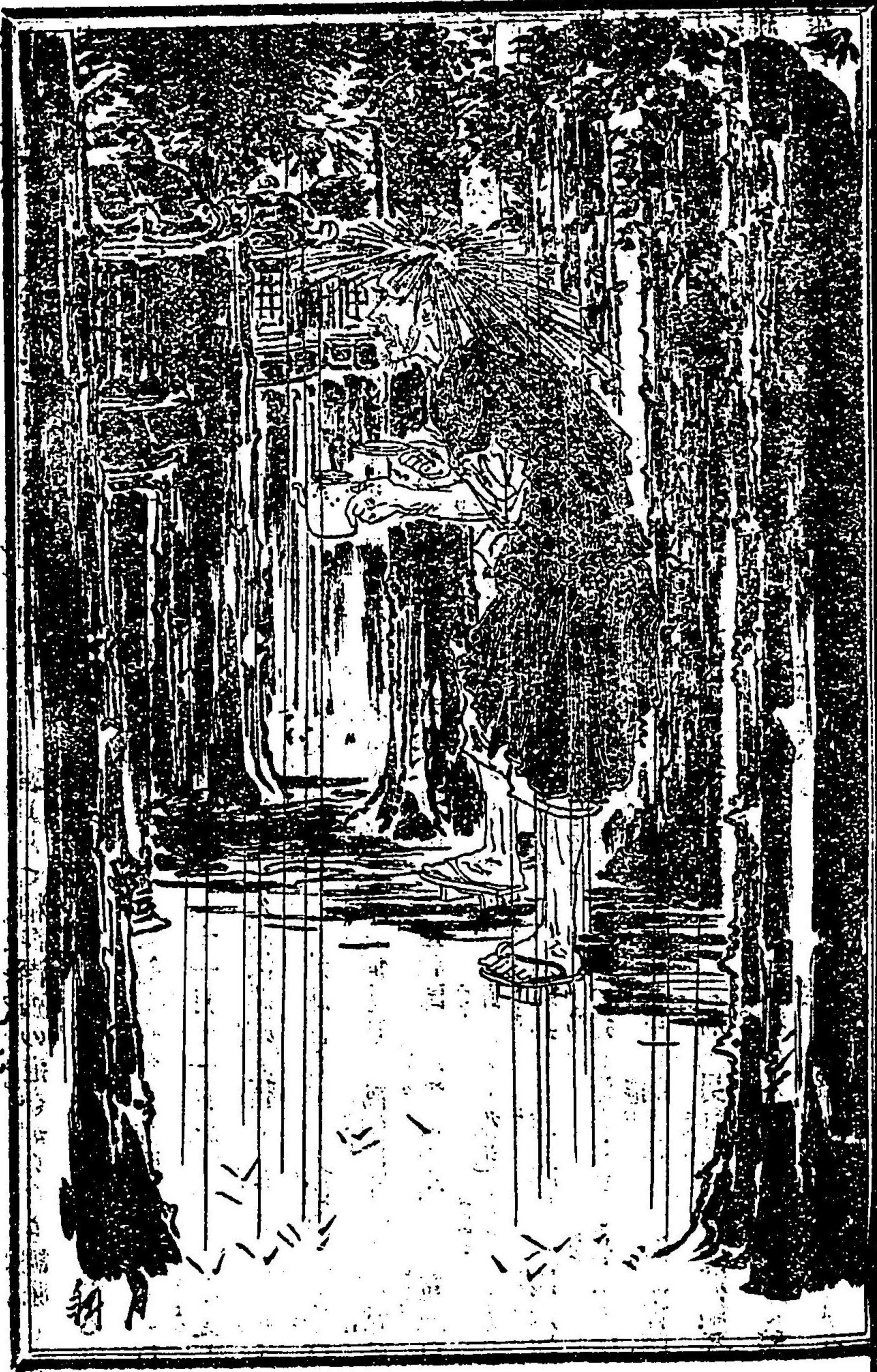
白河法皇(鳥羽院の皇祖七十二代の帝)の幸人あけしける東山の麓祇園邊は橋けり法皇毎度御忍びの御幸あり一夜殿上人一兩人北面少々具して忍ばせ給ふ比の早月廿日餘りまだ宵ながらかさくらし降五月雨よもの凄き折ふしかの栖近き御堂ありし傍邊よりあやしき光物出來る頭しるかねの針を磨立たる様よさらめき片手は桃の額片手は光る物を持とし是が奇怪よと君も臣も慄戦ひ給ら思盛其比のまた身殿をかき以てありしが北面よりまじり供奉せられしを御極へめしあのを斬とひ其射殺すともせよかしと仰ければ畏て歩向の内々思慮しけるハ狐狸の所爲よをあらんと白刃を振生捕よせんものと近よるゝ颯と光と思へば又の跡なく消しかとみれば又光るを頼て無手と組たるよこいいかよと噪とみれば變化のあらで人なり面々手々火を燃てみれば六十斗の法師御堂の承仕あるが佛の御燈を遣らせんとて手瓶よ油を盛て片手よ持土器よ火を貯て片手よ持雨よ濡じとて小麥の葉と引結て被りしよ土器の火よ輝ゆ銀の針ともみへし事の跡一々願の是を斬も射もせよいかよ念あからましを忠盛が舉動弓矢取の優しける物かちとてさしを修最愛と聞へし祇園女御を忠盛よ被下ぬ時よ女御の胎孕おのせしゆ産らん子女あらば朕が子よせん男あらば汝弓矢取よ成立よとぞ仰けるつひよ男を産り便宜を得べ此とを奏せんと待折から法皇熊野へ御幸よて紀州糸鹿坂某御興を居さ御暫く憩せ給ふ時忠盛數よわる零餘子と袖は盛御前よ参り畏てさしげあがらぬもが子の道ふほとよこ成よけれと申上た

此の朝ては心機ありてたゞ取り取てやしないよせよを附させ給ふまでこそ吾子とぞ思ふされける此若君餘かよ夜暗し給ひしかば法皇聞し召て一首の詠を下し給ふ  
夜あさすと忠盛たてよ末の代よ消く盛ることこそわれ

其より清盛といはなれける然ハ清盛公實の直人よのあらず白河法皇の落胤よおのせし也又忠盛仙洞の局よ申かひせし女房有て夜くかよひけるよ月を盡し扇を忘れ出たりし傍の女房建是の何國の月かけや出る所の覺束あさよと笑あへしかばかの女房

雲井よりたゞもりきたる月あはれをばるけよていよとぞ思ふ

と詠たりしいと淺から思れける忠盛の八男薩摩守忠度の俊成卿の高弟よて歌道もたけたる風流人ありしが此局の腹よてありし仁平三年正月十五日忠盛五十八よて失給ひしかば嫡男清盛跡を嗣保元元年七月宇治左大臣頼長新院(崇徳院)よ謀叛を勸め世を亂し給ひし時味方よて先を掛たりしうば勸賞行れよと安藝守ありしを播磨守よあされ同三年太宰大貳よなる又平治元年十二月藤原信賴源義朝が謀叛の時を修方よて賊徒を討平げしかば勳功一よあらずと翌年正三位つひて宰相衛府の督檢非違使別當納言を経て利承相の位よ至り内大臣を左右を經ず從一位太政大臣よ至り大將よのあらねども兵杖を給て隨身を召具し牛車輦車の宣旨を蒙り乘あがら宮中を出入す清盛公いまだ安藝守たりし時勢州安濃津より舟よて熊野へ参られける



十一

新



平忠盛朝臣  
御堂の法師と  
捕る圖

十一

大なる船へ躍入ぬいかさま是の權現の利生あらん爲として精進齋の道から自ら調味して其身即從へを食しめ玉ひしがそれより吉事連綿して其身即闕の官（太政大臣其母あたる人あければ闕ゆる闕の官共云）に至り子孫の官途を龍の雲より昇る等し九代の先蹤を越玉ふを目出度けれ却脱清盛公仁安三年十一月病は犯され存命の爲として十一月十一日五十一にて剃髮し佛門に入淨海と法諱す宿痼幸は愈六波羅又館を構られしゆゑ六波羅殿と稱し自ら隨ひ附人多く伊一家公達の花族も英雄も肩を比る者あり烏帽子衣紋以下六波羅様として一天四海是を學びの聖主賢王の政舞闕成敗を世の餘されし徒者あざり傍は寄合何となく誘傾けしこと常の風俗あれども此禪門の世盛の程の聊か忽せよ者あり其故に入道相國の策は十四五の童三百人を洗ひて髪を禿ふ切まひし赤き直垂を着せて召仕れけるが京中は路々して往返し自ら平家を惡ざます者あるを壹人を問出せば餘黨は觸廻し彼家へ亂入し資財雜具を追捕し當人を擽六波羅殿へ引到るされば目見心知れ共詞を顯すものなし此禿をみれば道を通る馬車を皆よぎて通しける禁門を出入すれども姓名を問ふ及ばそ京師の長吏これが爲目と側とみへの淨海禪門其身榮花を究るのみか嫡子重盛内大臣の左大將次男宗盛中納言の右大將三男知盛三位中將嫡孫維盛四位少將凡て一門の公卿十人殿上人三十餘人諸國の受領衛府諸司都合六十餘人もかゝる繁榮古今例も有べからず忠盛昇殿の時の殿上の交り快らずと諸卿は忌れ忠盛を問討ふさせよ

せありしが忠盛才力の人ゆゑ幸くも難と遇れしとをありけり是處からとありし其子孫禁色雜袍を免され綾羅錦繡を纏ひ惣領次男大臣の大將も成て左右は相並ぶを例少き次第也其外御息女八人一人は櫻町中納言重盛の嫡中三歳の時契約計て平治の亂後引違へ花山院左大臣殿の御臺所も成せ公達餘多ありしけり（櫻町と云こと常は吉野を懸つ、町は櫻をうへからべ其内は屋を建て住給ひしゆゑ也）一人は后また廿二にて皇子御誕生有建禮門院是他一人は六條攝政殿の北政所白河殿と稱せり高倉院御在位の時御母代とて准三后の宣旨あり一人は普賢寺基實公北政所也一人は冷泉大納言隆房贈藤中一人は七條修理太夫信隆卿は相具し給ふ藤州殿島の内侍が腹一人は後白河法皇へ獻せ偏は女御の様ありしける其外九條院の雜仕常盤が腹一人は是の花山院の上臈女房もて臈の御方と申ける日本六十六ヶ國も平家知行の國三十餘國其外庄園田畑幾等の數をしらす綺羅充滿し堂上花の如く軒騎群湊して門前市をなし揚州の金荆州の珠吳郡の綾蜀江の錦七珍寶萬寶一ツとして闕るとなし歌堂舞閣の基魚龍鬻馬の翫物恐らくは帝闕仙洞も是より過じとぞみへし禪門かく天下を掌り握し上の世の譏人の嘲を顧す京中へ聞へし白拍子の上手妓王妓女とて兄弟あり刀自と呼れし白拍子が娘也姉の妓王を淨海入道寵愛有ゆへ妓女も世の人をてなすと斜からず母刀自も能屋を造てとらせ毎月百石百貫を送られしゆゑ富貴を究世を經たが抑本朝白拍子の權興は昔鳥羽院の淳字は鴨の千歳和哥前の兩人

舞出せり水干立身帽子より白帯巻を指で舞ければ異様と云し中比より鳥帽子刀を除て水干ばかり  
 用るゆゑ白拍子と名付たり京中の白拍子妓王が幸の目出度を開或の猜或の羨み妓と云文字を名  
 一付てかく騙を得たるを我々も住てみると妓一妓二妓福妓徳多と呼ぶの多かりし三年の後  
 加賀國より佛御前とて十六歳ある高手の白拍子出たれば世の人もてあすこと大形ならず佛つく  
 一思ふやう當時めざましく舞へ玉ふ平家太政入道殿へ召れぬこそ本意なけれ遊者の習ひ何  
 か苦しかるべき推参して見やと或時西八條殿へ参ける人御前よ出て當時都も名を響し候佛御  
 前こそ参て候と上げる入道殿大に怒で左様の遊者の召よてこそ参るされ何條参推する様やある  
 其上神とも佛ともいへ妓王がわらん處へハ叶ふまじきと疾々罷出よと仰出されぬ佛はずげなく  
 も云放され既罷立んとせしを妓王入道殿もすけるの遊者の推参の常のからひよこそ候へ年  
 はもゆかて偶思ひ立舞ひをすげなく仰られ返し給ふに不便あるいかばかり辱ら存すらめ我立る  
 道されハ人の上とも覺へ侍らす縦舞歌ふの御覽なくとも御對面ばかりよて返し給ふ共有がたき  
 御情よこそと有けれハ入道殿さまでわ前がすよ對面して返さんとし使を立て召れけり佛ハ  
 車に乗て出んとしけるが吾も僕で歸り参しゆゑ入道殿やがて出合れいかも佛今日の見参ハ有ま  
 じかりけれ共妓王が何思ふらん切も中進るゆゑかやめ見参ハしゆゑの上いかで一覺をも聞  
 せぬらん今やうは舞うたへかじと宣へ佛御前長てさしいいよ今やう一つ謔ふたり君を給

てみる時ハ千代も舞へし嬌小極前前の池なる福圓も鶴こそ群なで遊ぶめれと推返し三返  
 ぐたけすまじたれば見聞人々皆耳目を駭す入道殿も面白きことなむ五ハ汝今やうの上手よ有  
 け舞も定能はんとして一番のぞみ舞打強て舞せらる佛の前ハ舞姿眉目容貌世は勝れ聲清朗も節  
 又上手ありしかハ心も及ず舞す進しぬ入道殿際なく愛佛よ心を移されけり佛の前本見らハ推参  
 の者よて既よ出されしを妓王御前の取成あるよ依て召返されしを早く暇玉で返しおらせよ  
 せよ入道殿すべて其儀ハ叶ふまじ但し妓王が手前を憐るよや其儀さらハ妓王をこそ出さめと  
 宣へハ佛御前いかでさるは事のいふまじとも召置れんだも恥かしういふ後迄も忘れ給すハ召れ  
 て又ハ参るしを今日ハ暇を給らんとぞやける入道殿今ハ左右なく妓王疾々罷出よと佛使重りて  
 三度まで立られける妓王はもとよ思ひ儲たる道か共さすが昨日今日とい思ひをよらず入道  
 相國いかよも叶ふまじきよし頻々宣ふ間佛使撫ひせ出べきよこそ定けれ一樹の陰も舍り同  
 じ流を掬ふだも離別の悲き習どかし况や是ハ三年が程栖馴し名残を惜れてかひなき涙ぞすいみ  
 ける妓王今ハ思出はるが無らん跡の形見もやとや思ひけん泣かを障子よ歌を書付けける  
 萌出るを枯るも同じ野邊の草いづれが秋もあつていつへさ

撥車に乗て宿所へ歸り障子の内よ倒れ臥流より外のことなき母嫌是を見ていかよやと問けれ共  
 妓王ハ左右の遊舞も及ず具したる女を誰れぞとさるむわかしも知てけれ去程ハ毎月送られ

し百石百貫も指進られ今の佛御前の由縁の者を擧て樂み榮へける浴中の上下傳へ聞て實は妓玉  
 芝を西八條腰より腰給つて出されしとやいざ見參して遊んと舞者を立るも或の文を遺す  
 もありされ共妓王今さら又他と對面し遊び戯べさかひとて文をだも取入ともなく使を獲待とも  
 赤かりけりかめて其年暮る春をさかひしかバ入道相國妓王が許へ使者を立ていかは妓王  
 其後の何とかある佛御前が餘り徒然げよ見ゆるよ參て今櫻歌舞ついかれを慰よと宣ひける妓王  
 鬼角の御返辭よも及ず涙を押しけり入道殿察て何とて妓王の左も右も返辭とバやさぬ参  
 るべきか參るまじく其様ませ淨海計は旨有とぞ宣ひける母乃自も是を承るよ悲くて泣々教  
 訓しける入道殿の御旨は違ひ命を召るべきありて我身うさ世もさがらふべくも思はず  
 我露の命を延も縮るもまたの心よありと強は難けるゆる妓王の參らじと思ひ定ま上なれども  
 母の命を背じと泣々又出立し心の中ぞ更りあける獨參らんを心うしとて妹妓女其外白拍子二人  
 總じて一ッ車も取乘西八條腰へ參しまは來召れつる所へ入られず遙下りて座敷しつらひ置れ  
 しかバ妓王この何とぞや我身過失となく出さるゝたよあるを座敷とさへさげらるゝ口惜さよ  
 と悲しさ胸も餘り人よしらせじと擧げ袖の關よりも餘りて涙流れけり佛御前是を見て餘り哀  
 れも覺へけれバ入道殿もかゆるのぬれぬかま妓王をよ見しへ日本召れし所も侍らばこそ  
 かくてはわらひ暇を給り出歸のなき言はれ共入道殿いかに世をさしと宣ふも力も置さる

けり入道殿やがて妓王は對面ししかは妓王其以來の遠かりつるはやく斷ひ舞して佛がつれ  
 を慰よと宣ひける妓王參る程なるともかくも仰り背くまじと涙の洩とかくしつゝ今様を歌ふた  
 る佛も昔の凡夫地我らをつひひの佛といづれを佛性具せ身隔るのみこそ悲けれ泣々を二  
 返歌ひたりけれバ其座は並居玉平家の一門公卿殿上人諸太夫待よいたるまで皆感涙を催され  
 ける入道殿げよと思ひ玉ひ時取ての神妙よをやりさてい舞を見度けれ共今日紛るゝと  
 出來たり此後の召すとも常は參り佛が心を慰めよとぞ宣ひける妓王の涙を押しつゝ出けるが召  
 とも參らじと思ひ定しを母のいさめを背くまじとつらさ道も過てふたゝひうは恥を見つる口惜  
 さ斯て世はあらバ又を愛目よ遇んづらん今も唯身を淵川へを沈果かんとすける妹妓女是を聞姉  
 かくあらバ我も俱よと并語る母の伏は難き悲しみ左迄とも思で教訓しつるうらめしさ今恨る  
 を理りよ若き娘共を先立齡ひ衰へし此身のみ生残りて何かせん此上の我を同じ道は伴んとて母  
 子三人歎き廻けるが妓王の様うさ辱の口惜さよ身を投んとい思ひ定候ひつれ死期も出ませぬ  
 母うへ迄身を投させバ五逆罪の疑さし今の只都の外へ出んものと思ひ直してはとて二十一よて  
 縁の黒髪ふつゝと掻剪けれバ妓女身を沈さへ同じ道よと契しを世を厭んよ誰か劣るべきと十九  
 はて姿を變けぬる母を又老が身は白髪をつけ何かせんとて四十五はて髪をそり眠睦の與な  
 る山里は三人一向専修は念佛して後世を願ふを哀ある秋の比葉の庵は念佛して居たるは黃昏過

て竹の桐戸をほとく打敷く者あり尼奇み畫だも人も問來ぬ山里も誰か音なうやらんと戸をひ  
 らけバ佛に前出來り妓王よままへ涙を押して中様是迄嘸かし怨給ひなん女の身なれば云がひまぐ  
 御恩を仇よのみあしつる日が身あがら残ましくいへ其方の出され給ひしを見るよつけいつか又  
 我身の止ならんと思ひつゝくれバ寵を婚しからず障子よいづれか秋あわて終べさと書貽し  
 給ひし筆の跡時の間も忘れぬいす今のかくさまをかへ念佛三昧し給ふと聞餘り羨しく暇を乞と  
 度々しけれ共更も多用ひもましまさず情物を案すれば娑婆の榮花の夢の夢人身の稟がたく佛教  
 むの遇がたし老少不定の出入息を待べからず蟬蛸稻妻より霜とかあし一旦の榮花よ誇りて後世  
 と泥梨よ沈果ん心憂とよことと今朝紛れ出かく成て参たりとて被たる衣打除ればとや尼よ  
 成て出來りけんかくさまも變じ上り日來の科をば敷し給へかしをろとを念佛し一ツ蓮の身と  
 ならん此上よを心ゆき給すべいつらへ迷ひ行いかあらん苦の鑑岩のはさま松が根よを倒ふし  
 命の消さる際念佛して往生の素懷を遂げへなんと顔へ袖おしあて雨々とかさ口説ければ妓王  
 も涙よくれさまで思ひ給んとい夢よをしらす浮世の中の嗟嘆あはれ身愛とこそかこちしこみ  
 づからこそ世を恨み身と敷きての姿と變るを理あり身恨をかく敷もかく今年は十七よ  
 てそれほとよを穢土をいと浄土を願ひ給ふ大蓮の婚しかりける大善知識かさい諸共後  
 世に管んと四人一所を觀り居て佛前よ花香を備他念をなく行ひせましけるが遇速くと有けれ各

養生の志願を果せしとを聞へしされバ後白河法皇長講堂の過去帳よを妓王妓女佛刀自等が亡靈  
 と四人一所を觀れし有がたかりしとよことわれ

近衛院工條院二代の後延曆興福願打除攝政家の供人資盛の不禮を答

昔より源氏平氏朝家よ立て王位は随ず朝權を輕んずる者よ互又戒を加しかば代の亂をか  
 かりし保元は爲義斬れ平治は義朝誅せられし後の末々の源氏或の失れ又の流され今や平家の  
 一類の繁昌む末の代まで何事かあらぬとがみへしされども七十四代鳥羽院晏駕の後兵革  
 うち續て強罪流刑國官停任毎も行れ海内を離あらず就中永曆應保の比より院の近習者をば  
 内より戒わり内の近習者の院より戒らるゝ問上下怖て安さ心せず主上上皇(後白河と二條院  
 也)は皇子の母間何事の御隔か有んあれ共思ひの外の事共多かりし主上の院の仰を常も替  
 せ給ふ中よ人耳目を駭かし世以て大に傾け中と有けり故近衛院の後大皇太后宮の大炊門右大  
 臣公能公の娘待賢門院也先帝は後れさせ給ふ後の九重の外近衛河原の所よ移住給ひ前の后  
 の宮よて幽ある形勢として渡らせ給ひしが永曆の比の多年廿二三も成せられは盛りも少し過  
 させましませとて天下第一美人の聞へましゝければ主上色よのみ染るは心よて竊も高力士よ  
 罷せて外宮よ引取もむるよ及でこの大宮の所へ密に娑婆書あり大宮敢て聞召も入給すされば  
 一向は専種は願れも后は入内有べきよし右大臣家よ宣旨を下さる(高力士とい唐の玄宗腹心の

内官楊貴妃其外美人を多くす、めしゆゑこれをかりていへる也。此こと天下に於て異なる勝事されば公卿僉議有て各異見を演先異朝の先蹤に則天皇皇后太宗の后高宗の繼母之太宗崩後尼となりしを飯俗せしめ高宗の后は立給ふそれの殊廷の先規我朝の神武天皇以降七十餘代いまだ二代の後の例あしと諸卿一同は訴へやされたり上皇も然るべからざるよしやさせ給へども主上仰けるの天子は父母なし我十善の戒功も因て今萬乘の寶位を保り是ほどのとあぞか慮慮も任せざるべきとてやがて入内の日を宣下せられける上の上皇を力及べせ給ふ大宮かくと聞も召は涙み沈み先帝は後れ盡らせし久壽の秋同と野原の露とを消家をも出世をも遣れたりせば争かゝる憂を耳を聞まよと多敷きありける父の大宮こしらへやさせ給ふの世は隨ざるを狂人どすと見へたり詔命を下さる上子細をうさん所あし速に参り給ふべし若皇子は誕生たりて君も國母といわれ愚老も外祖と仰るべき瑞相もやひらん是を一ツの愚老への孝行よいと色々賺しやさせ給へ其は返事あかしが大宮何となき手習の次よ

うきふしよしづみをやらで川竹の世ためしあき名をや流さん

世よいかよとて親けるやら五哀は優しき例と入々や合せける既も御入内の日よをありしかば父の大宮供奉の上建部出車の儀式とりく劇せらる大宮懶り出立なれば遙夜更涉車も助乗され給ひけ入内の後の屋敷殿は座けるされば一向朝政を勤めさせ給ふゆさまは彼業

寶殿の皇居よの寶聖の障子を建られ伊尹鄭伍倫虞世南太公望百里先生李勣馬周手長脚長馬形の障子鬼の問李將軍が姿をさながら摸せる障子をあり小野道風が七回賢聖の障子と書るを理とぞみへし清涼殿菫園の障子よの昔金岡が書たりし遠山の有明月を有とかや故院にまだ幼主よておとせしそのかみ何となき手すさみよかきくもらせ給ひたりしが有しかがらよ少しも違はせ給ひぬを伊覽じて先帝の昔もや戀しう思召れけん

思ひきや憂身あがらよ廻り来て同じ雲井の月を見んとり

其間の事ながらひ云しらす哀よやさしき事のみ去程も永萬元年春の比より主上は不豫よて夏の始よいとよ重らせ給ふ因て大藏太輔紀兼盛が娘の順よ今上一の宮二歳は渡らせ給ふを太子よ立給ひんと六月廿五日急に親王宣下其夜直に受禪ありしかば天下何となく周章たる禰之本朝皇帝の例に清和天皇九歳周公旦成王も替り一日萬機を治給ひしよ准へて外祖忠仁公幼主を禰佐し給ふ鳥羽院五歳近衛院三歳此度の二歳の幼主よて先規をあらねば物騒しきを宜にけり此七月廿七日つひに崩御聖算二十二番の花の散るがぶとし玉簾錦帳の内曾川は咽せ給ふやがて廣隆寺の良蓮臺野の奥舟岡山よ非奉る其夜延曆興福兩寺の大衆頼打論よて互に狼藉よ及びけり一笑の君御葬送の時南北二京の大衆悉く供奉し御墓所の廻り我寺々の願を打とあり先聖武天皇あは願東大寺の願を打次は淡海公の願興福寺の願北京よの興福寺よ向へて延曆寺の願次よ夫



西帝の御願教待和尚智證大師の草創して園城寺の額を打た然るをいかん思ひけん先例を背東大  
 寺の次は興福寺の上は延暦寺の額を打問南都の大衆鬼やせまし角やせましと僉議する處は興福  
 寺西金堂衆觀音房勢至房とて聞へたる大惡僧二人ありけり觀音房の黒糸威の腹巻は白柄の長刀  
 短刀取勢至房の萌黃威の甲は黒漆の大太刀を持つと走り出延暦寺の額を切て落し散々やう  
 ち破りうれしや鳴の瀧の水日の照とも絶すと歌ひ囃つゝ南都の衆徒の中へぞ入まける山門の大  
 衆狼藉せば手向へすべきを心深う思ふ方をや有けん一言葉も出さず帝かくれさせ給ひて後の心  
 なき草木迄を愁たる色まこそ有べきは此騒動の淺穢さは高さを卑さを肝魂を失つて四方へ皆  
 逃散す同廿九日午の刻計山門の大衆夥しく下落すと聞へしかば武士檢非違使西坂本は行向ひ  
 防はれ共事共せず押破て亂入す又何者か中出しけん一院(後白河法皇の御事)山門の大衆は仰せ  
 て平家を追討せらるるに附へしかば軍兵内裏へ參じ四方の陣頭を堅め平氏の一類は皆六波羅へ馳  
 集る一院もいとぎ六波羅へ御幸ある清盛公其時のいまだ大納言の右大將までおひしけるが大  
 恐れ發れけり小松殿何れ依て唯今去御事いへきと静めさせしかば兵ども騒動するを夥し  
 まれども山門の大衆六波羅へ寄寄して清水寺は推寄佛圓僧房一守を殘さず燒拂ふ是の額打論  
 の怨恨と聞へし清水寺の興福寺の末寺たるに依て之其焼じつまりし朝觀音來杭變成池の如何と  
 實て大隅の前より連次の日曆刻不思議力不及と罵の札を打たけり衆徒歸り上りければ一

院六波羅より還御する重盛卿討つ送りよ歸られける父の卿の參られず猶用心の爲かとぞみへし  
 重盛卿御送より歸られたかければ父の卿宣ひけるの扱も一院の御幸を恐れ覺ゆれ兼てを思  
 召御らるる旨をのればこそかくの聞ゆぢめそれより猶打解給ふまじと宣へば重盛卿此事の努  
 々所詞も多氣色も出させ給ふべからず人の心付がはる中へ悪きはとこ是は附ても能々敢  
 慮は背せ給ひて人の爲は多情を施し給ひし神明三寶加護有べしは身の恐れもいまじと立けれ  
 れば父の卿も重盛のゆゑしう大標ある者かかと宣ひける一院還御の後御前疎からぬ近習者達餘  
 多候いれけるよさても不思議あるとを申出したるものかを露も思召寄ぬと仰ければ院中され  
 ものよ西光法師と云わり進み出天の口を以て云せよと申す平家以外の外過分は間天の傍  
 計ひよやとぞ申ける人々此事由を壁に耳あり怖しくと各私語あひれける去程は其年の諒  
 閣のゆる多禰大嘗會を行れず建春門院其時の未東の傍方と申ける其傍腹は一院の宮の五才もあ  
 らせ給ふが坐しけるを御位は即給んと聞へし程は同十二月廿四日俄は親王の宣旨を蒙せ給ふ明  
 徳は改元有て仁安と号す同十月八日去年親王宣下皇子東三條まで春宮は立せ給ふ春宮の傍伯父  
 六才主上の傍甥まで三才何れも昭穆は相叶す但し寛和二年は一院院七才まで傍即位あり三條院  
 十一才まで東宮は立せ給ふ先規さきもあらず主上の二才まで御讓を受させ給ひつづか五才まで  
 三月十九日御位を實べり新院とぞ申ける春元服もなきて太上天皇の尊号あり漢家本朝これや御

大らん仁安三年三月廿日新帝太極殿にて御即位あり此君の位は即せ給ひぬるの彌平家の榮花と  
 云へし國母建春門院とやの入道相國の北の方入條三位段の御妹と又平大納言時忠卿とすも此  
 女院の御兄ある上内の御外戚あり内外は付て執權の臣とぞみぬし其北の叙位除目とやを偏は此  
 時忠卿のまゝにけり楊貴妃が幸ある時揚國忠が榮たるは異ならず世の覺時のきらめたりき入  
 道相國天下大小の事を宣ひ合せられければ時の人平關白とすけるさて又嘉應元年七月十六日  
 一院御出家あり法諱を行眞と稱し奉るされ共萬機の政と知し召るゝゆゑ院と内と分かつたを  
 院中と近く召るゝ公卿殿上人上下の北面迄官祿身は餘れり人心の習ひ猶厭足で分郊の望をか  
 るも多かりし法皇も内々仰けるは昔より朝敵を平たる者多しといへ共貞盛秀郷が將門を伐願  
 義の貞任宗任を伐義家の武衛家衡を責たりしを勸賞行れて繼受領より過ざりき今清盛心のまゝ  
 振舞こそ然るべからぬこれを世澆季は成て王法の盡ぬるゆゑ也とい仰なりけれ共次でなけれ  
 ば御戒をさし平家も又別して朝家を恨奉ることをあかりし世の亂初ける根本は去し嘉應二年  
 十月十六日小松殿の次男新三位中將資盛其時の未越前守として生年十二はなられけるが雪降て枯  
 野の氣色は面白かりけるまゝ若き侍共三十騎斗召具し連盛野紫重右近馬場は打出て鷹餘多居  
 せを鴉告天子と遣立し終日狩喜し薄暮は及て六波羅へ歸れける其時御接縁は松殿(關白基房  
 妻)もまじしける東洞院の御所より春内都芳門より入御あつんと大炊御門を北へ御出あるは

資盛朝臣大炊御門権兼はてはしちる慶合御供の人御出あるは乗打の根柢を下しへくとして制  
 む律外共餘り重盛方勇誇り元來世を世とせざる上召具したる侍共二十内の若者共されば禮  
 儀骨法差へたる者一人をなし殿下の御出とも云す一切下馬の禮儀も及す只愚破て通らんとす  
 る間暗にくらしつやく太政入道の孫とをしらす又少々は知れ共虛不知して資盛朝臣を始と  
 ちて侍共皆馬より取て引おろし頗る耻辱を覺けり資盛はうく六波羅へ歸りかひして祖父の相  
 國禪門は此よし訴やされければ入道殿大は怒て壁下ありとを淨海が邊をば憐給ふべきと左  
 右多く少き者は耻辱を與られけること遺憾されかゝるとよりして人より欺るゝぞ此事殿下と思  
 ひ知せでい得こそわらじと宣へば重盛卿はされけるは時の少も苦からず是は頼政光基あどや源  
 氏共は嘲られてもいひ一門の耻辱をいへし重盛が子として殿の御出は參逢下乗をせざるは  
 處りも尾籠はいへどて事は遇たる侍共みち召寄て自今以後汝等能々心得べし誤て殿下へ無禮  
 の由を申さばやと覺て歸されける其後清盛禪門小松殿の沙汰せで片田舎の侍の窮て剛強を  
 る入道殿御の外世は又恐ろしきとあしと思ふ者共難波瀬尾を始として都合六十餘人召寄て來る  
 廿一日殿下御出有べし何方よてを待受奉り前驅涉隨身共が聲を斷て資盛が耻雪げどころ宣ひ  
 けれ共共身とて罷出殿下これ程を夢も知し召れま主上明年御元服御加冠拜官の御定の爲  
 斷く涉直座は有べきよて常の御出より引繕せ玉ひ扱今度の待賢門より入御あるべきと中御門を

西へ出なるは猪熊加川の邊まで六波羅の兵共混背三百餘騎待受奉り殿下を中へ取籠らせ前  
 後より一度は鬨を喧と作りける前驅は隨身共が今日を曠と裝束したるをあそて爰へ追懸追詰散  
 らるは陵礫し一々鬢を剪削隨身十人の内右の府生武基が鬢をを断られけり其中は藤藏人大夫隆政  
 が鬢を剪とて是は汝が鬢と思ふべからず主人の鬢と思ふべしと云合て切ける其後の涉車の内  
 へも弓の弦つさ入さとして籠かき入り格し涉牛の當胸鞆切放ちかく散々狼藉して歡びの鬨を  
 作り六波羅へ歸参りたれば入道殿神妙と宣ひけるされ共涉車添よの因幡のさい使鳥羽の國久  
 丸と云男下臈赤れ共さがくしき者よては車を修補乘せ奉つて中涉門の涉所へ還御おし奉る東  
 帯の袖よの涙を押させ給ひつゝ還御の儀式あさまさを中々おろかへ大織冠淡海公の涉事  
 の事てすよ及す忠仁公昭宣公より以來攝政關白のかゝる難遇せ給ふこと未承り及すこれ  
 そ平家悪行の肇あれ小松殿此由を聞給ひて大は恐れ騒れけり其時行向ふたる侍共皆勘當せらる  
 縦ひ入道殿いがある不思議を下知し給ふ共あど重盛は夢ばかり知せざりけるぞ凡の資盛奇怪  
 梅種の二葉より香しとこそ中せ既十三三三三成ん者禮儀を存知て振舞べきよかやうの尾籠を現  
 をせ入道殿の悪名をたつ不孝の至汝獨よあけけりて暫く伊勢國へ追下さるされば此大將を  
 ば君も臣も御慮あかしと聞へし

新大納言成親卿藤原山門神興を振奉て師高兄弟が濫行を訴訟す

至上御元服の儀定其具々備され同廿五日院の願主よて御奉り有ける攝政殿同十一月九日兼宣旨  
 を兼せ給ひて同十四日太政大臣よ其せ給ひ同十七日慶事の有しかども世の中は猶苦々敷ぞとへ  
 し去程今年も猶苦々敷三年も成ふけり正月五日主上は元服有て十三日朝觀の行幸あり法皇女  
 院待受参らせ初冠の傍粧ひいかにがりのめでたうおとしけん入道相國の傍娘を女御よ進せ給ふは  
 年十五法皇は猶子の儀あり妙音院殿其比の未だ内大臣の左大將よてましくけるが大将を辭し  
 給ふとあり時徳大寺大納言實定卿其任に當らるべき仁也けり花山院中納言兼雅卿故中御門藤  
 中納言家成卿の三男新大納言成親卿を達て大将と望れ法皇の御前も殊よ宜しかりし故是非も相  
 叶へんとて様々の所禱立願のつて夜々忍て置茂の上の社へ歩行よて参られけり此比の叙位除目  
 とすは法皇内の御言ひよの御言ひは成敗よを叶す一向平家の儀されば入道相國の嫡男小  
 極大納言右大將よを移り次男宗盛卿中納言より數輩の上臈を越右大將よ成給ふ中よも徳  
 太寺殿の一の大納言よて花族の家嫡才學雄長英名高かりしは平家の次男よ加階を越られ給ふと  
 遺傳の衣第定ては出家をあらんかど入々私語おはれしが暫く世の成ん様を見とて大納言を辭し  
 籠居し給へは新大納言成親卿宣ひけるは徳大寺花山よ越られんは如何せん宗盛よ越れしこそ  
 易於ぬ此上の友は難しきものにして平家を亡し恥辱を雪んと俄に北面又は諸武士を誦ちひ  
 東山鹿嶋は後平井寺よ續く風強火城地なりし此後京都の山庄よを合しは會合し内蔵を談じ

其具を納入對等をあらべられぬ父の卿の此仁の齡の比値中納言之其末子にて正二位大納言に至り大國を賜り家族所從朝思は誇りから何不足有てかゝる心附れけん其上平治の亂より越後の中將とて信賴卿同心の間其節誅せらるべかりしを小松殿色々中宥られ頼を接給へり其恩儀を忘れ此度の企の天魔の所爲とをすべし肇のはと人の目耳を恐れしがいつしか慎をゆるみ高聲大義を論議あり或夜鹿谷へ法皇を御幸ある故少納言入道信西の子息淨憲法印をお供よて其夜の酒宴よを彼一事の口披せられし時法印墻より耳ありと申とい人餘多承りぬ今も洩聞へ天下大事よを及ゆんとすを大納言氣色替つてさつと立れけるが傍前より立らしれ瓶子を狩衣の袖よかけ引倒されけるを法皇戲覽有ておれいにかよと仰われバ大納言立歸りて平氏倒れぬとすさるゝ法皇笑盡よ入せ給ひ者共參て猿樂仕れと仰ければ平判官康頼つと參てあゝ餘り平氏の多ういよ酔ていどや俊寛僧都さてそれいいか仕るべきやらん西光唯頼を取よいえかじとて瓶子の頸を取て入よける法印餘りの淺猿さよつやゝ物をすされず返くも危かりし事共之扱成親卿とられたる與力の輩離く近江中將入道蓮淨俗名成正法勝寺の執行俊寛僧都山城守基兼式部大納言平判官康頼宗判官信房新平判官資行武士よ多田藏人行綱と始とじて北面の者共多く一隊じけり俊寛僧都の源大納言雅俊卿の孫木寺法印寛雅よの子之祖父大納言のさして事失取家よのあはれ其腹あじき人よて三條坊門京極の宿所中門より立歸を切書ておはするゆ

人をも容易通されずかく怖しき人の孫ゆあまや俊寛僧ながら心を猛く奢れる氣質ゆるよしあま謀叛よ興せし成親卿多田行綱を召て今度御邊をば一方の大將よ頼ん仕謀をせの國をも庄とを所望よ任すべし先弓養の料よとて白布五十端贈られたり安元三年三月五日妙音院殿太政大臣よ轉じ給へる替よ小松殿源大納言定房卿を越て内大臣よ成給ふ頼て大變を行る大臣大將の尊者よの大炊御門右大臣經宗公とぞ聞へし扱また北面の白河院の御時始て置れ鳥羽院の御時迄の身のほどを舉動てありしが後白河法皇よ至て北面より殿上の交りを免さるゝ者多く奢の心より謀叛よ組するよ至れり又院中の切ものと呼れし西光法師の子よ檢非違使五位尉加賀守師高とて成上りの人有國務を行ふよ非禮非義多く安元二年の夏師高が弟近藤判官師經を加賀の國目代よ補せられし時加賀へ下着間をさく國府の邊鶴川と云山寺よ亂妨の所行ありて諍闘よ及びけるが目代僧徒よ追立られしゆゑ當國の在應等千餘人を催し集め鶴川よ押寄坊舎残らず燒拂ふ鶴川の白山の末寺ゆゑ此を訴んとて老僧ら先達て進みけるよ白山三社八院の大衆悉く集合し其勢二千餘人七月九日の暮方目代師經が館へ寄聖朝より合戦始り露所結ぶ秋風の射向の袖を翻し雲井を照す稻妻の兜の星を輝し法師ばらの戰強く目代叶すして夜逃よ京へ上りしゆゑ大衆の直よ山門へ訴んとて白山中宮の神輿を飾り比叡山へ振揚同八月十二日東坂本よ着輿ゆゑ客人の宮へ入奉る此宮の白山妙利權現よてまじませば父子の御中也無神心覺せ給いんと七社の神人

補をぬかれ由龍新念取、山門の大衆よりの國司加賀守師高、流罪近藤判官經高を禁獄せら  
 轉給るべき旨、御聞度なきは疑ひしが御裁許、決着なし加茂川の水雙六の賽山法師是を朕が心な  
 野免もの、白川院を仰め、昔より山門の訴訟、他も異あり大藏卿爲房、太宰權帥季仲卿さ  
 をも朝家の重臣、山門の訴訟、流罪せられ給へば師高如き事の數、やの有べきまかる  
 を延々の御沙汰ゆゑ、吉の祭禮を打留め、安元三年四月十三日辰の一點、十禪師權現客人八王子  
 三社の神輿を飾陣頭へ振擧奉る下り、松され堤加茂の川原河、梅た、柳原東北院の邊、神人宮仕  
 として大衆專營、神輿の二條を西へ入せ給へ、神寶夫、輝き日月地、隕給ふかと愕然、つて源  
 平兩家の大將軍、命て四方の陣頭を固警、天衆、防ぐべきよし仰ぐ、たさる平家より小松内大臣左  
 大將重盛公、其勢三千餘騎、大宮面の陽明寺、寶都芳三の御門を固め給ひ、弟宗盛公、知盛卿重衡卿  
 伯父頼盛卿、教盛卿、經盛卿、西南の御門を術護、源氏より大内守護源三位兵庫頭頼政卿等より、渡邊  
 省同授を先として、僅三百餘騎、北の御門、總殿の陣を固給ふ所、廣勢の少し扶疎、みへし大衆是を  
 幸ひ北の御門より神輿を昇込んとす、頼政卿急ぎ馬より飛下、背を御漱、手水して神輿を拜し奉つる  
 從兵皆かくの如し、渡邊長七唱よしかり、と中合られしゆ、唱ひ小櫻を黄返したる重鎧着て赤  
 銅作の太刀を帶二十四差たる白羽の矢と、搦御の弓を脇袂兜の脱て高紐、掛神輿の前より平伏し  
 響く聲、せいに源三位殿より、衆徒のの中へ、せよ、山門の、訴訟、理運の條、勿論、存じ、い、は、裁

陣運、これを餘所、ても遺恨、覺侍れ、神輿入奉らん、子細、及、い、い、ず、但し、頼政無勢、い、て、開て、入  
 奉らん、陣より入らせ給ひ、あ、山門大衆、後、日、京、童部、の、口、號、と、成、中、さん、か、左、右、ち、く、開、き、入、奉、る、を  
 宣旨を背く、似たり、又、防ぎ、拒んとす、れ、年、來、醫、王、山、王、は、瀧、仰、せ、し、身、が、今、日、より、長、く、弓、矢、の、道、は  
 別れ、い、ひ、あ、ん、彼、とい、い、是、とい、い、難、治、の、至、極、と、覺、り、東、の、陣、頭、の、小、松、殿、大、勢、よ、て、固、め、ら、れ、て、い、其、陣  
 より入せらるべく、も、や、と、述、若、大、衆、惡、僧、共、い、今、更、何、條、猶、像、べき、唯、此、陣、より、入、奉、れ、や、と、闘、さ、し、が  
 老僧の中、三塔一の、僉、議、者、と、聞、へ、し、攝、津、の、堅、者、(じ、ゆ、し、や、と、云、べ、さ、を、從、來、天、台、よ、誤、來、れ、り、寮、運  
 す、み、出、尤、の、口、上、之、我、等、神、輿、を、先、よ、立、訴、詔、上、り、堅、陣、を、打、破、て、こ、と、山、門、の、威、と、後、世、よ、を、示、す、べ  
 し、頼、政、卿、の、六、孫、王、以、來、源、氏、嫡、々、の、正、統、弓、矢、を、取、て、い、ま、だ、不、覺、を、聞、ず、凡、武、道、よ、を、限、ず、歌、道、よ、も、傑  
 けし、丈夫、よ、て、近、衛、院、の、御、時、當、座、の、御、會、よ、深、山、花、と、云、御、題、を、皆、々、詠、舊、し、た、る、題、ゆ、る、却、て、沈、思、よ、及  
 れ、る、は、頼、政、卿

深山木の、その梢、とも、み、へ、さ、り、さ、櫻、の、花、あ、ら、い、れ、け、り、  
 此、秀、逸、よ、て、御、威、よ、預、り、ま、優、男、なる、を、今、此、時、は、臨、で、い、か、ん、ず、恥、辱、を、與、ふ、べき、唯、神、輿、を、昇、戻、せ、や、と  
 申、けれ、ば、先、陣、より、後、陣、迄、大、衆、尤、々、を、同、じ、東、の、陣、頭、待、賢、門、より、入、奉、ら、ん、と、す、る、は、忽、ち、合、戰、出、來、て  
 武士、共、散、々、射、奉、る、ゆ、る、千、禪、師、の、佛、輿、よ、も、失、共、數、多、射、立、神、人、宮、仕、衆、徒、或、の、射、殺、さ、れ、疾、を、蒙、り、喚  
 呼、女、聲、梵、天、の、帝、釋、地、軸、の、堅、奉、神、の、聲、給、ふ、ら、ん、と、乾、坤、を、響、き、聞、へ、たり、大、衆、神、輿、を、陣、頭、よ、振、捨、泣、々

本山へ飯り登りけりよつて法皇の殿坐よて諸卿食儀と懸水久より令治承延(當安元三年治承と  
 改元有)神興入浴のと六箇度もつとも毎度武士は仰せ防せらるゝと云共神興を討奉りし此度  
 始之神人ハ矢を拔取せ保延四年七月の例ハ依て神興ハ祇園の社へ入奉る靈神怒を爲ば災害衝よ  
 充と云り恐しくとやあへり同さ十四日夜半許山門の大衆又夥しく下山せしと聞かば主上の夜中  
 腰興よめし院の御所法住寺殿へ行幸中宮宮々の御車よて佗所へ行啓有けり關白殿太政大臣殿下  
 卿相雲客曾供奉せらる小松の大臣ハ直衣ハ矢を負て隨ひ奉り嫡子權亮少將維盛ハ束帶ハ平條撥  
 てぞ參られぬ京中貴賤騒ぎ喧しされども山門ハ神興ハ矢もたち神人射殺され衆徒も多く手負  
 たれば大宮二宮講堂中堂都て諸堂悉く焼拂て山野ハ交るべきよし三千の衆徒一同ハ僉謀す依て  
 大衆の中所法皇より計ひあるべしと聞へしはどは山門の上綱等子細を衆徒ハ觸んとて登山す  
 と承り大衆四坂本より下り皆返返す平大言納時忠卿其比未左衛門督よておひしけるが上卿またつ  
 大講堂の庭ハ三塔會合し上卿の冠を打落し其身を繩巻よし湖水ハ沈めよあせやて既ハかうとみ  
 へし時時忠卿大衆へ使者を立暫く静りいへ衆徒のハ中へアベさ事のハとて懷より小視疊紙取出  
 し一筆書て大衆の中へ送らるゝ是を披さみるゝ衆徒之致濫惡者魔縁之所行也明王之被加制止者  
 善逝之加護也とこそ書れたれ是を見て大衆尤くゝと服し谷々の各坊へ下り飯りぬ一紙二句を以  
 て三塔三千の憤を思ひ公私の恥をも漏れ給ふやゆゝしけれ山門の大衆ハ獲向の積しハ斗かと思

へは理を存じけり人と人々合れける同廿日花山院樹中納言忠親卿を上卿よて國司加賀守師  
 高と調官せられ尾張の井戸田へ流され弟近藤判官師經を禁獄せらる又去る十三日神興を射奉り  
 し武士六人ハ獄よ下さる小松殿の侍共ハ同廿八日戌刻斗堀口宮小路より火出しハ折節異の風烈  
 しく吹ければ車輪のおとくある炎三町五町を隔て乾の方へ飛越々々て焼行程ハ具平親王の千種  
 殿北野天神の紅梅殿橘逸勢の蠅松殿鬼殿高松殿鴨居殿東三條冬嗣大臣の閑院殿昭宣公の堀河殿  
 を削て昔今の各所三十餘所公卿の家十六軒其外殿上人諸大夫の家々註し盡すべからずハてハ大  
 内ハ吹付朱雀門より應天門會昌門大極殿豐樂院諸司八省朝所一時の内ハ灰燼と成ければ家々の  
 日記代々の文書七珍萬寶殿を竭して土塵と交へる人の老少牛馬犬猫まで死すると若干ハ是全く  
 山玉の砂谷と怖れあへり大極殿ハ清和天皇貞觀十八年ハ始て焼たりしかハ同十九年正月二日陽  
 成院の御即位ハ豐樂院よて有ける元慶元年四月九日事始有て同二年十月八日落慶の處後冷泉院  
 天壽五年二月廿六日ハ按ずるゝ此年翌年康平元年とす此二月廿六日あるべし平家物語のまゝハ  
 出ず)又燒り治曆四年八月十四日ハ事始ありけれ共成就なき間ハ後冷泉院崩御也後三條院延久  
 四年四月十五日造り出されて文人詩をたてまつり伶人樂を奏し遷幸なし奉る今ハ世を季ハ成て  
 國の方習衰へたれハ其後ハ幾ハ造られず  
 多田行綱運忠成朝神一珠黨類被擄捕重盛公憐愍

治承元年五月五日天台座主明雲大僧正公請を傳止の上彌人を以て使よて如意輪の本尊を召返  
 して持像を改易せらる即使應の使を付て今度神興内裏振奉りし衆徒の張本を召れけり加賀國  
 座主の坊領あり國司師高これを停廢の間其宿意は依て大衆を語らひ訴訟を致さるゆゑ已  
 朝家は大事及べきよし西光法師父子が議奏は依て法皇大逆鱗あり殊も重科は行るべしと聞  
 ゆ明雲の院の氣色悪かりければ印鑰を返し奉つて座主を辭しすされけり同十一日鳥羽院七の  
 宮覺快法親王天台座主は成せ給ふ是は青蓮院の大僧正行玄の弟子と明る十二日先座主所職を  
 没収せらる上檢非違使二人を付て井蓋し火水をかけて水火の責は行るべきよし聞ゆこれ  
 は依て大衆猶泰洛すと聞へければ京中又騒ぎあへり同十八日太政大臣以下の公卿十三人參内し  
 て陣の座は若先の座主異科の議定あり八條中納言長方卿いまだ左大弁宰相よていこれしが進出  
 せらるゝ法家の勘狀に任せ死罪一等を減じ流罪せらるべうい得共明雲の顯密兼覺して淨行持  
 律の上大乘妙經と公家も授菩薩淨戒を法皇に保せ奉るは經の師御戒の師を重科は行られんも  
 さらよわら末遠俗遺流を宥らるべきかと憚る所ありさるゝよ當座の公卿此儀を同せらる然  
 るは法皇御價深く遺流は決定す太政入道も此とをゆさんと院參せられしが法皇御風氣迎御前  
 へ召れず本意なく罷出給ふ僧を罪する習とて度縁を召返し還俗せしめ大納言大輔藤井の松枝  
 と云僧名を付られける此明雲とて村上天皇第七の皇子具平親王玉代の御裔久我大納言顯道卿

の御子也無双の碩徳天下第一の高僧たれば君も臣も尊み給ひ天王寺六勝寺の別當をもかけ給へ  
 りされども陰陽頭安倍泰親やせしはばかりの智者が明雲と名乗給ふこそ心得ね上は日月の光  
 を並べ下は雲ありとぞ難じける仁安元年二月廿日天台の座主あり同じき三月十五日御拜堂  
 り中堂の寶藏を開かれける種々重寶共の中より方一尺の箱有白布にて裹れけり一生不犯の座主  
 彼箱を開て見給ふは黃紙に書る文一卷あり傳教大師未來の座主の名字を豫て注置れたり我名の  
 有所迄の見てそれより奥をば見給ふ本の如く巻返して置る習也されば左こそいかにまけめか  
 りる貴さ人され共先世の宿業の免れ給ふ哀ありし次第也同廿一日配所伊豆國と定めらる人々さ  
 ましくよゆさおけれども西光法師が議奏は依てかやうな行れける也今日都の内を追るべしと  
 追立の官人白河の御坊は行向て追奉る僧正泣々出給ひ粟田口の邊一切經の別所へ入せおひし  
 ます山門の詮する所我等が敵は西光法師父子は過たる者おしとて彼等父子が名字を書て根本  
 中堂の十二神將の内金毘羅大將の左の御足の下に踏せ十二神將七十夜又時刻を回さず西光父子  
 は命を召取給へやと呪咀しける同廿三日一切經の別所より配所へ趣き給ひけり大津の打出の濱  
 にも成ぬれば文珠樓の軒端白々とみへけるを二目とも見給ひて袖を顔へ押當て涙は咽ひ給ひけ  
 り山門の宿老碩徳さまといへ共澄憲法印真時未僧都よておいせしが餘は名残を惜み奉り粟  
 田送進らせ殿をきて歸らんとせし僧正志の切あるを感當年來孤心秘せられし一心

西國の血脈相承を授かる此法の釋尊の附屬波羅奈國の馬鳴比丘南天竺の龍樹菩薩より次第に  
 相傳に來れるを今日の情に授けられける流石末世の云ながら澄憲此附屬を請法衣の袂を絞つゝ  
 都へ歸り上られし心の中こそ推量らる又山門の大眾起て會議するやう義興和尚以來天台座主  
 始て五十五世に至る迄流罪の例を聞すつらく案するに延曆の比はひ皇帝の帝都を建大師の當  
 山は鑿上り四明の教法を此所弘め給ひしより以降五障の女人跡絶て三千の淨侶居を占たり嶺  
 まり一乘讀誦年齋て齋の七社の靈驗日新之彼月氏の靈山の王城の東北大聖の幽窟之此日域の  
 敬岳帝都の鬼門は時て護國の靈地之代々の賢王智臣此處の檀場を占末代の爲よを争か當山は環  
 をつくべきさいさ跡を遺て馳着たらん所より奪ひ取留め奉れやと云程こそわれ雲霞大眾山をふ  
 るつて發向し或の志賀唐崎の濱路を歩み續るをあり又山田矢橋の湖上を船押出すもあり是を  
 見てさしも緊しげありし追立の總使兩送使故々皆逝去ぬ大眾國分寺へ参り向ふ先座主の何事  
 沙と宣ふよまかしの沙汰なるよし上しかば大驚き給ひ凡勅勘の者ハ日月の光また當  
 らずと承る況や時刻を廻らす配所へ退下さるべしとの院宣旨たり少を徘徊べからず大衆  
 疾々歸り上らるべしと端近く出て廻道ハ我身犯せる科聊もあく無實の罪にて重科は沈ハ山  
 止の兩所定て照覽し給ふ然ば神佛の御惡みを有ての故と思へハ神佛をも人を怨べき所を  
 心遣は是迄勸らぬ殊り給ふ衆徒の劣志の忘るべき期歎しとて香染の御衣の袖を濡し給へハ大衆

を鏡の袖に浸さるやあじ己は御興さしよせ疾々召るべしとや先座主普こ三千の衆徒の貫主  
 たり今ハ斯る勅勘流人の身にて修學者達ハ昇捧らるべきやと中へ乘興し給はずこハ四塔の  
 戒淨坊阿闍梨祐慶と云ふ惡僧身の丈七尺あまり黒皮威の鎧大荒目ハ金交たるを草摺長ハ着あし  
 胃ハ法師ハらハ特せ白柄の薙刀杖ハ突大衆の中を押分く御前ハ怒り大の眼を見瞋し先座主ハ  
 暫し睨へ其ハ心よてまそりハる御目よも合せ給候ハやハ召るべしと先座主餘り怖しよ急  
 き乗給ふ大衆取奉るとの嬉しさハ歴々の修學者共ハ昇捧上るほどハ人ハ替れ共祐慶ハ替すさし  
 も峻ら東坂平地を行がよとくよて終ハ大講堂の庭ハ昇居て再び會議する様ハ貫首ハ首尾克奪ハ  
 留ぬ但し勅勘遠流の方を貫首ハ用ひずさんハ如何あらんと時祐慶又進み出先座主ハ勅勘遠流  
 せらるべき罪ハ智惠高貴よして三千の衆徒の貫首たり德行深重よして一山の和尚たり此とき  
 我等顯密の主を失て數輩の學侶永く塗雪の勤を怠んとハ心憂かるべし祐慶張本ハ稱せられ禁獄  
 流罪若ハ首を刎らるゝとも今生の面目冥途の思出あるべしと涙をうかべけれハ大衆皆尤と同じ  
 先座主を東塔の南谷妙光坊ハ入奉りぬ時の横災ハ權化の人ハ免さる例ハ昔唐の一行阿闍梨ハ大  
 德聞へて玄宗皇帝の御持僧ありしかども玄宗の妃楊貴妃ハ名を立其疑みて果羅國へ流され給  
 ふ其道ハ跡絶江浦ハ前途迷ハ深山ハ夜猿懸ハ無實ハ大犯の人と唱へられ苦のぬれ衣曝ハぬを  
 天遣憐み給ふや九曜の象現ハ阿闍梨を護給とて虎狼豹豺の難ををかかりし一行みづから指を食斷



其血よて左の股に九曜の形を寫されし和漢兩朝密宗の本尊たる九曜の曼陀羅とすは是に去程より山門の大衆先座主取留め奉りたると法皇聞し召ていと安からず思し召ける處より西光法師すけるは昔より山門の大衆我儘ある傲訴今も驛すといやあがら今度の以の外過分よはよくは計ひしべし等閑の沙汰よては此後世の世よをいませじと唯今我身亡び失んをしらで辨舌を震ひ宸襟を惱し奉る發蘭茂からんとすれば秋の風これを破り王者明らかあらんとすれ共謀臣これを聞すとい宜なるかな新大納言成親卿以下近習の人々よ仰て法皇山攻せらるべしと聞へしかば山門の大衆のさのみ王地は妊れて詔命を對捍せんも恐れことて内々院宣は隨ひ奉る衆徒を有など聞へしかば先座主の東塔の南谷妙光坊よおのしけるが大衆二心ありと聞へ給へば又如何なる愛目よいあふべきこととあふ心細げよどのたまひけるされ共流罪の沙汰のあかりけり又新大納言の山門の騒動よて私の宿意をば暫く押へられあがらも内義支度のさまくありしかども義勢のよて此謀叛叶ふべしどもみへざりしゆへ右の片腕共思れし多田藏人行綱所詮此事無益也と思ふ心付弓袋の料は贈られし布共の直垂帷子よ裁縫せ家子郎等共よ着せつゝ目瞬て居たりけるが情平家繁山の有さまと見るよ當時容易傾けがたし若此事洩ぬる程ならば行綱まづ失はれかん他より漏ぬうち返り忠して命を保んものと同廿九日の夜深入道殿四八條の亭よ參て行綱こそすべしよ有て推盡いと案内を通じければ入道殿常よ參らぬ者の何事す次第承れとて主馬判官盛國を

出されたり全く人傳よハヤ間敷事也と云ゆへ入道殿さらばとて自ら中門の廊よ出られ夜の遙闌ぬらん向事と宣へい晝ハ人目繁く夜よ紛れて參り此程院中の人々兵具を調へ軍兵催さるゝを何とか聞し召れいやらん入道殿いざと法皇の山を攻給んは結構とて聞と事をあげ宜ひける行綱近う寄小聲よ成て其儀よいひハヤ一向當家のほ上とて承りいへ入道殿さてぞれをば法皇も知し召れたるか仔細よや及びハ執事の別當成親卿の軍兵催されいひしよを院宣とて召れしが康賴俊寛西光みお腹心よて其外誰々かくハ合候など有の儘よ指過て云散し我身の暇よとて出ければ其時入道殿大聲よ侍共を呼留り給と駈し行綱をまじひ成事す出證人よも引れんかと怖しく人も追ぬよ取袴し大野よ火を放らたる心地し門外へぞ逃出ける其夜入道殿筑後守貞能と召て當家を傾けんとする謀叛人都是満々たるぞ急ぎ一門へを觸せ侍ひ共催せと宣ふよぞ馳廻つて披露す右大將宗盛公三位中將知盛卿頭中將重衡左馬頭行盛以下一門の人々甲冑弓箭を帶して指渡ふ其外侍共雲霞の如く馳集て其夜の内西八條の亭よハ六七千騎も寄たらんとみへし翌六月朔日いまだ闇りしよ入道安倍資成を存て院の御所へ集り大膳太夫信成を呼出し急度すべきの新大納言成親以下は近習の人々此一門を亡し天下を亂さん謀叛の企あり一を擲捕尋ね沙汰仕いべしそれをば君も知し召るまじくいとすいへどを宣ひける資成急ぎ院の御所よ馳參り信成を招て此事すよ色と失ふやがて御前へ奏請すよ法皇嗚呼いやは是らが内謀漏聞ゆるよこそを何事ぞと

斗仰て分明の返事をあかりけり資成急ぎ走歸り此よしやければ入道殿さればこそ行綱の實を  
 中たれ渠告知らせずの淨海安穩よやは有べきとて筑後守貞能飛彈守景家を召て當家を傾とす  
 輩一々召捕べしと下知せらるよつて二百騎三百騎こゝかしこ押寄て擲捕入道殿先雜式を以て  
 中御門鳥丸の新大納言へ中合すべき事のひ早々参り給へと申送られければ身の上の露しらす  
 法皇山攻の汚結搦を中宥んとのことあるべしは憤深けおればいかまを叶ひしをのぞき清げな  
 る布衣たをやかま着あし鮮ある車に乗侍三四人召具し雜色牛飼まで常より猶引繕たり西八  
 條近う参りてみ給へ四五町軍兵充滿たりあや影し何事よやと胸打噪れ車より下り門入見  
 給へ内よを兵共はさまもあく並居たり中門の口よの恐しげある者共數多待受大納言を取て引  
 張戒ひべくやとやけれバ入道殿簾中より見出し給ひて有べうもなしと宣ふよぞ侍十四人前後左  
 右立圍み大納言の手を取て縁の上へ引上一問ある處へ押籠けり大納言の夢の心地して物をを覺  
 給す供の侍の大勢は隔られ雜色牛飼色を失ひ牛車を捨て散々皆逃去ぬ近江中將入道遠淨法勝  
 寺の執行俊寛僧都山城守基兼式部太輔正綱平判官康頼宗判官信房新平判官資行も囚れてこそ  
 出來りたり西光法師此よしを聞我身の上とや思ひけん鞭を打て急ぎ院の御所へ参る六波羅の兵  
 とも道よて行あひ西八條殿より召さるよぞ急度参れと云ければ奏すべき事有て院の御所へ参る  
 あり頼て参らめと云ければ悪き法師めが何事をか奏とせよとて馬より取て引落し中よ縁て西八

條殿へ提參る始より根元親力の者おれバ懸り緊く戒めて御坪の内よ引居たり入道相國大床よ立  
 て臨と白眼當家を傾んとする謀叛の奴が成る姿よしやゆてへ引寄よとて縁際へ引付物履あが  
 ら天突より顔をむづくと踏踏固より致おとさ下臈の果を君召仕せ給ひ分外の官職を給父子共  
 過當の舉動するよと見しと誤らで天台の座主を流罪よ申行ひ刺當家を傾んとする謀叛の輩  
 與するよも始終有のまよ申べし陳せバ水火の責よ骨身を挫すべしと聲あらか又宣ひける西  
 光元來勝れたる大剛の者よて色をも變ずわるびれたる氣色あく居直りて莞爾と笑ひ院中近く召  
 仕るよ身執事の別當成親卿軍兵を催されし事與せずといやべき様あし一身同心脚を相違なし  
 但し耳よ當るとを仰有ものかあ他人の前よの免もわれ西光が聞ん所よの左様のとをば宣ふまじ  
 抑傍邊の故刑部卿忠盛の嫡子よて十四五迄出仕もあく故中御門藤中納言家成卿の邊よ立入ら  
 れしを京童部の高年太とこそ申然るよ保延の比海賊の張本三十餘人擲進せられし賞とて四位  
 の兵衛佐とすさへ替人過分とすたりさ忠盛の殿下の交さへ嫌れし人の子として今太政大臣迄  
 成揚つたる分外とやいん法外とやうさん本より侍の受領檢非違使よ至ると先規類例あきよ  
 辨す何か過分とすべき向後嗜れ口を利過し玉ふあし憚る處なく十分よ恥しめければ相國入道  
 殿餘餘は腹を居難て暫し物も申されず良有て奴めが頸の左右なく切を能々糺問と加へ其後河  
 原入引出の桑首せよと宣ふ松浦太郎重俊承り手足を挟み様々痛問ふ西光更よ争ひす拷問とよ

獄々白狀の次第四五枚は記たり其後口を裂迎口と裂れ五條西の朱雀にて終る首を刎られたり縞子加賀守御高の尾張の井戸田は流され居たるを同國の住人小胡麻の群司維季は仰て討せ次男近藤判官師經は頼より引出して誅し其弟左衛門尉師平と郎等三人を首を刎られけり是ら云が以ち者秀て立障るまじきとをのみ綺過さ天台の座主を流罪より沈果報や替けん山王善逝大師の神罰冥罰立地は蒙てかゝる憂目も遇けるよや

重盛公新大納言の命乞門脇教盛卿丹波少將の命乞重盛公諫諍

新大納言の一間は推籠られ是日來の荒増洩問へたるあらん誰か漏しぬらん北面の輩の中よを有らんかと案じ續け坐ける處より後より足音高らかも聞へければ我命失んとて武士共の參るやと思の外入道殿板敷荒く踏鳴し障子を堀と引明け出られたり紫絹の衣の短きよ白き大口踏披き聖柄の刀推窓以の外怒る氣色よて大納言を暫しねめつめ抑は邊の平治よ誅すべきを内府が身は替て中膳首を纏れしり覺を忘れられしや然るよ何の恨いて當家を亡さんとせらるゝや恩をも知らぬをバ畜生とやがや當家の運命場ざるゆへ此處小迎へたり日來の荒増共直も承んと宣へバ大納言全くさるといひず人々の讒言よてぞいひん能やば尋ひべしと入道殿言せを果す人やあると召れければ貞能つと參りたり西光めが白狀取て參れとあれは是よいとし出すを入道殿是を取て推返し二三返高らかも讀聞せ此上の何と陳せられんとあれバ大納言泥の如くよて物を

とを得やさで居られしはあも悪やとて書面を大納言の顔よさつと投掛障子を確と引闔て退れしが猶腹居兼經兼康を召ける難波次郎瀬尾太郎參りければあの男取て庭へ引落せと宣へ共是等左右きうをし奉らす小松殿の氣色いかいひんと申ける入道殿彌怒汝等の内府が命を重んじ我が所懸んするよ此上の力及すと宣ふてははしかりあんと思ひけん立上り大納言の左右の手と取底へ引落し奉りける其時入道殿心地よげよ取て臥喚かせよと宣ふ二人の者共大納言の左右の耳よ口をぬて私語引臥ければ三聲三聲苦しげよ喚かれける其肺阿防羅罪人を呵責する冥途の形勢是より過じと思へる新大納言の我身かくあるよつけても子息丹波少將成經以下稚き者共いかなる憂目よか達らん思ひやるよも覺束あくるばかり熱き六月よ裝束も穿られず熱さを堪がたけれバ胸をせさ上る心地して汗と涙と争ひ流れけるさりとを小松殿の思し召放たじをのをとの思れけれ共難をしてすべし共覺玉いす小松大臣の例の善惡極玉のぬ方あれバ遙よ日たけて後嫡子権亮少將維盛を車の後よ乗せ衛府四五人隨身二三人を具して軍兵の一人を具せられす大様氣よて坐たれば入道殿はじめ一門の人々皆思すげよみへ給ふ大臣中門よて御車より下給ふ所へ貞能つと參てなと是ほどの御大事よ軍兵一人も召具せられぬやらんと申けるを大臣殿大事よ天下の事をこそいへがやらの私事を大事と云やうやあると宣へり兵杖を帶したりける兵共嚙口を閉たりける其後大納言の何國よ置しやと此彼引あけ見給ふよある障子のうちよ蛛

手結たる處のりやらんとして開られたれば大納言おのし涙は咽びう伏て目を見奉給すいか  
 よやと宣へば其時見着るを嬉しげと思はるゝさま地獄の罪人が地藏菩薩を見奉らんもかくやと  
 變て哀成さてやさるゝ何事よひやらん今朝よりかゝる憂めは逢ひ平治よを御恩を以て頸を繼  
 以上かく位官昇進し歳四十餘りい思ひ生々世々報し誓しがたういへ何卒此度とを御憐愍  
 のは救ひ下さらんよ佛門に入りかある片山里も籠一筋は後世の營仕らんとやさるゝ大臣殿  
 さいへばとては命失ひ奉る迄のといよもいひに縦ひ左に共重盛命は代りいべし心易かれと  
 ちて父禪門のひ前小坐しおの大納言失あわんの能々思慮いべし其ゆるゝ先祖修理大夫顯季白  
 河院に召仕のれし以來家々例なき大官に經上り剩當時君無双の傍最惜たれば唯都の外へ出され  
 ば事濟いん北野天神の時平の讒奏は憂名を西海の波小流し西宮大臣(左府高明公)の多田満仲  
 の讒言よて恨と山陽の雲よす各々無實ありしかども是みお延喜の聖代(六十代醍醐帝)安和の  
 御門(六十三代冷泉帝)の御傳事とぞ傳へいづ上古猶かくの如し况や末代は於てをや賢王を  
 認むり況や凡人は於てをや既召置るゝ上の急ぎ失れず其何か恐れいべき刑の疑しき輕くせ  
 よ功の疑いしき重くせよをいへばへ重盛彼大納言の妹は相具し維盛又婿かかやうは親しう  
 成いへばやと思存いん一向其義いんす唯國の爲世の爲家の爲を思つてやい一とせ故少納  
 言入道信西が執權の時我朝よい嵯峨皇帝の朝は在兵衛藤原仲成が誅せられてより以來保元道

君二十五代の間行れざりし死罪を始て取行ひ宇治の幕左府の死骸を掘起して賞檢せられたりし  
 など餘りある御政は存いされば古の人の言ひ死罪を行は海内謀叛の輩絶すとす此詞を存れば平  
 治も又世亂れ信西が埋れたりしを掘發し首を刎て大路を渡されいさ保元もや行しと幾ほとあ  
 はや身の上は報れよきとをいへば怖しうい思はさせる朝敵もいひすかたゝゝ恐れあるべしは  
 榮花のこる所をいれれば思召るゝとあるまじけれ共子々孫々まで繁昌あらまほしく存い父祖の善  
 惡の必ず子孫も及ぶよし經書は明白は侍りいかも今夜首を刎られんこと然るべからず覺い  
 と理を盡しやされければ入道殿を實もとや思されけん死刑の思ひ止れけり其後大臣殿中門は出  
 侍共よたどへ仰われればとておの大納言を失んと有べからず入道殿腹立のまゝお物騒しき事し給  
 以後よい必ず悔給いん餅と仕て我を恨むと宣へば兵杖を帯したる兵ども皆恐慄て領掌し奉る扱  
 も今朝經遠兼康がおの大納言は情あう當奉りし返りも奇怪也と重盛聞り聞んづる所を憚  
 らざりし片田舎の侍の皆かゝるぞと宣へば兩人甚恐入ぬ大臣殿加様心を配て小松殿へ歸れけり  
 扱又大納言の侍共の烏丸の宿所は歸てしかんゝとすければ北方始て女房達聲々喚叫び給ひけ  
 り少將殿始め稚ら迄皆取れんよし承りい急ぎ何方へを忍ませ給へかしと申ければ北の方今い是  
 程は成に殘り留る身とても安穩よて何かかせん唯同じ一夜の露ども消んこそ本意され今朝を限  
 と知ざりし悲しき事とて引かつひて予願給ふは武士共近づくよも聞へしかばかくて恥おまし

も芳見目をみんを流石なればとて十は成給ふ女子八才の男子一ツ車小取乗て何地をさすともな  
 ずやう出す扱しを有べきあらねば大宮を上り小北山邊雲林院へて坐ける共邊の僧坊下し置  
 て退の者共と身々の捨がたさ暇中て歸りけり今の幼き人々ばかり殘居て又事問ふ人をさくは  
 坐ける北の方の心の中推量られて哀々暮行影を見給ふにけりても大納言の露の命此夕限ありと  
 思はかるよを消ぬべし宿所より女房侍共多かりけれ共物をだも取した、めず門をだも推もたて  
 ず麻よの馬共多く並立たれ共草飼の一人をなし夜わくれれば馬車門より立賓客座より列て遊戯れ  
 舞躍世と世共し給ひ近き傍の者共の物をだも高く云す怖恐昨日までありしを夜の間に替る形  
 勢盛者必衰の理目の前よこそ顯れたれ樂盡て哀來ると書れし江相公の筆の跡今ぞ思ひしら  
 れける丹波少將成経の其夜法皇の御所法住寺殿より上願して未出られざりけるよ大納言の侍共急  
 き御所より馳参少將殿と叫出し此よし申ければこれ程のとちや宰相の許より知せざるらんと宣  
 ひもとてぬ宰相殿よりとて御使あり(宰相とい相國入道の第六波羅の惣門の脇より座しけれ  
 ば門脇宰相と申ける丹波少將より眞なり)何事よていやらん今朝西八條の亭より急度具し参れ  
 と申越ゆと云遣されければ少將此よし心得て近習の女房連を呼出し夜邊何となう物騒しう候ひ  
 しを例の山法師の下るよをやと餘所も思ていへばとや身の上も成てい夕去大納言斬るべういさ  
 れば成経迎も同罪よて候いん今一度御前へ参り君を拜し度候へどもかゝる身と成て憚り存候と

ゆされしかば女房連急ぎ此旨奏問せらる法皇よの今朝禪門より使よて淨心得おのすゆ疾々と  
 仰よ依て少將御前へ参られたり法皇仰下さる旨も早く唯涙を押し玉へば少將又涙咽て上  
 ん詞さし良有て少將罷出られし後を遙々覽と送り是限よて又も覽する期に有まじく思し召し聲  
 を立て歎かせ玉へり直よ少將退出われ院中の人々局の女房連各殘を惜袖を濡さぬ方をなし男  
 宰相の許へ出られたれば北の方の近う産すべき人よて座けるが今朝より此歎きを打添既命を  
 消入心地ぞせられける少將御所を罷られしより涙盡せぬよ今又北の方の有様を見玉ひいとせ  
 ん方あげよみへられぬ少將の乳母ふ六條と云女あり我御乳ふ參君を血の中より懷揚おはしたて  
 参らせし以來月日の重なるよ従ひ年の積るに歎かず偏よ君の成人しうあらせ玉ふとをのみ悦び  
 白地とい思へども今年二十一年片時を離れ奉らず院内へ参らせ遅ふ罷出玉ふさへ心苦しう覺  
 しよ今いかなる憂めよか合せ玉ふらんと泣沈けるを少將看を賺して宰相殿おのすれば命にか  
 りの乞請玉いらんををさばかり歎さくれちと慰せ玉へども六條の人目を厭ず泣悶へけり時よ  
 西八條殿より使敷並なれば宰相今の出向て左も右も成めと少將を車の後よ乗て出られたり保元  
 平治以來平家の面々の樂榮へ愁歎さなかりしよこの宰相こそ媚ゆゑかゝる歎きよあひ玉へり六  
 波羅近くなれば少將の門内へ無用の旨申断る、問其邊ある侍の許よ降置宰相ばかり通られけ  
 りいづしか少將の武士共四方を取圍み緊密守護す宰相中門よ居玉ひしが入道殿出も逢れざるゆ

源大夫判官季貞を以てやさるゝの教盛由き者も親しう成て返すしを悔いへどもかひをい  
 はず相具し候者此は甚惱と候が今朝より此款を打添て命を既も終候ひかんと教盛かうて候へば  
 儼事させ候ひし少將の暫教盛も預け下されかしと季貞此よしを申入道殿哀宰相か例の物も心得  
 ぬよとて頼も返辭をあく良有てやさるゝの新大納言成親以下迄習の面々此一門を亡はして天下  
 を亂るゝ企あり少將の既も成親の嫡子ならずやをし此謀叛と遂んぬの御邊とても穩からじを婿  
 舅の好身ありとて預け遣すべさやとやせと有ゆる季貞宰相殿へ申述世も本意あげて重ねて  
 やされけるの保元以來度々の合戦も御命も代んと存せしの度々入道殿を申し召れつらん此  
 後とても荒き風の先防ぎやさんたとひ教盛こそ年老て候共若き子共餘多候へば一方の堅よあ  
 らで候べきやそれと暫く少將を申預らんぬ赦さるゝ一向教盛貳者と思さるゝよこそ左やで審  
 思されば世も有と何かせん身の暇玉つて出家入道し高野粉河も籠候とん由さき浮世の交へ世  
 もあれば望も有望叶ぬの怨もあれうき世を厭ひ眞の道も入んぬまかす覺へ候と宣ひける季貞又  
 涉前も出宰相殿のはや思召切て見へさせぬまかすことやもぞ入道殿出家と迄のけしからず其  
 儀ありば少將をば暫く申邊へ預るとすべしと宣ふ此旨又申出ればわのれ人の子の持まじさとか  
 な我子の縁も結締すばかく心を摧じとて出られか少將待請いかいしらんとす時入道殿餘りよ  
 腹立れ對面をあらば邊の身を顧むも叶まじと頼も宣ふは出家入道を迄やたる上然も暫し預る

をい宣へ其始終尋るべし其覺すとすさるゝ少將さでの御恩を以て暫しの命の延びぬこと父大  
 納言がどの何とが聞し召れぬや宰相御邊のとい漸もやたれぬ造の思をよらずと其時少將涙を  
 はらりと流し命惜きの父を今一たび見ばやと思ふ爲之夕去大納見斬れぬぬ成経命生て何よ  
 かせん只一處ぬいがかよも成やうやで給せぬのでと悲歎ければ宰相世も苦しげも不知邊の  
 とを種々やたれ其儀申出ん躰もあらず但し今朝内の大臣色々させつればそれも暫の能儀も聞  
 つると宣ふ少將聞もあはず泣き手を合せて悦れける子もあらず誰か今身の上を指置てかく迄悦  
 ぶべき實の契の親子の間も有ける子を人の持べきものかなと思返されし夫より又同車して  
 歸られければ宿所も女房侍さし凄死たる人の甦たる思ひもて悦び泣をせられける太政入道此  
 上も心行すや思れけん赤地の錦の袴垂も黒糸威の腹巻白金物打たる胸板せめ先年安藝守たりし  
 時神拜の次も靈夢を蒙り嚴島大明神より現も給し銀の經巻したる小長刀常も枕を放で立られし  
 を掖中門の廊も出貞能と召筑後守貞能の木蘭地の直垂も緋威の鎧着て涉前も畏るゝかよ貞能保  
 元も平右馬助を始一門半も過て新院(七十五代崇徳院の御事)の御味方も参りさ一の宮の故刑部  
 卿(清盛公の父忠盛あり)の養君もて坐しかば傍見放し参らせ難かりしを故院の御遺儀も任せ  
 御方もて先を辨たりは一ツの奉公次も平治元年十二月信賴義朝が謀叛の時院内を取奉り大内も  
 精進り天下間と成たりしよも身を捨て凶徒を追落し經宗惟方を召禁るゝ至るまで君の御爲も命

を失はんとせしと毎度也然ハ人の何ぞヤ共命カ此一門をバ七代迄の思召捨らる可とれ又成親  
 を云無用の徒者西光と下下殿の不當人が才事ヲ附せ給ひ動かれバ此一門を滅さるべきは結構  
 を奇しけれ此後を讒奏する者あらバ當家追討の院宣を下されんハ必定せり朝敵と成て悔る共益  
 かし暫く世の静らん程法皇をバ鳥羽の北殿へ移し参らするカこれへ希有御幸をかし奉らんと思  
 ふハいかハ其儀ならば北面の者共が中より箭一筋も射んと思へバ用意せよ侍共へ觸知せよ入  
 道院方の奉公思ひ切ぬ馬ヲ鞍置せよ著背ヲ取來れと宜ひける主馬判官盛國急ぎ小松殿へ馳參世  
 ハとや斯いと告けれバ大臣殿聞を取ず嗚呼とや成親の首刎られしよと宣へば其儀よてハいハ  
 侍共迄打立て院の御所法住寺殿へ押寄取奉りまれ御幸なし参らすとて内實ハ鎮西の方へ流し給  
 んと擬せられしと大臣殿何ゆゑ唯今さるハとわいさんとの思れけれ共今朝禪門の物狂しき氣  
 色よてハをしさるともやとて急ぎ車を飛せ西八條殿へ到り門ヲ入て見給へば入道殿腹巻を着給  
 ハ一門の卿相數十輩各々色々の直垂ヲ思ひく鎧着て中門の廊ハ二行ヲ着せられ其外諸國の受  
 領衛府諸士縁ハ居溢れ庭ハもひしと並居たる旗竿共引とバめ馬の腹帯を堅め兜の緒を縮令よ  
 打立ん氣色あるよ小松殿鳥帽子直衣大紋の奴捨のとは取て悠然として入給ふハ事の外よどみへ  
 給ふ入道ふじ目成て例の内府が振舞よ大折櫃せバやと思われしが流石子ながら内ハ五  
 戒を保ち慈悲を旨とし外ハ五常を亂す殊ハ禮正しき人なれば其姿ハ腹巻して對んと耻しう

や思れけん子少し引立腹巻の上ハ素絹の衣を周章着よ着給ひしが勝板の金物少し廻てみへた  
 るを激さんと頻衣の胸を引違くうし給ひける大臣殿ハ宗盛公の座上ハ着しが父子互ハ何を  
 言で見合されしが漸入道殿サさるハ成親の謀叛ハ事の數ハいハず一向法皇の結搦ハいぞや  
 暫世を鎮んほど法皇をバ鳥羽の北殿へ移し参らするカ是へ希御幸を成參らせんと扱斯支度よ及  
 べりと大臣殿聞もあへずはらくと泣れける入道殿扱如何まやと忙然玉へバ大臣殿涙を押へ此  
 仰承りハハ御運のこや末ハ成ぬと覺へハ人運命の傾んとてハ必ず悪事を思ひ立ハかり又形勢  
 を見參らするハ更ハ現と覺ハはすさすが我朝ハ天照太神の孫國の主として天兒屋根尊の  
 ハ未朝の政を司せ玉ハしより以降太政大臣の官ハ至る人甲冑を鎧ふと禮儀ハ背さるとハ出家の  
 ハ身ハ三世の諸佛解脱同相法衣と脱捨忽ち身甲し弓箭刀鎗を帶し玉ハ内破戒無慚の罪を招き  
 外仁義禮智信ハ背けり恐あるハ條亦がら心の底ハ旨趣を殘すべきハあらず世ハ四恩あつて天地  
 の恩王ハ恩父母の恩衆生の恩其中ハ最朝恩重ハ普天の下王地ハあらざるハあしされバ頼川ハ  
 耳を洗ハ首陽山ハ賊を折し殊庭古の賢人も勅命をひさがたさを存ずと承るハいハ先祖も聞  
 ざる太政大臣を窮られ重盛が無才愚暗の身よて蓮府槐門(大臣のと)の位ハ至り加レ之國々郡々  
 半ハ一門の所領と成て田園悉く一家の進止たり是後代の朝恩ハいハずや今莫太の皇恩を忘玉ハ  
 て猥ハ法皇を傾け玉ハんハ天照太神正八幡の神慮ハも背せハん但し父の思召立るハ處道理半

無き非ず此一門の代々朝敵と平げ四海の逆浪を静し無双の忠なれ共其賞又誇らば傍若無人とすべし聖徳太子十七个條の憲法よ人皆心わり心各執あり彼を是し我を非し我を是し彼を非す是非の理誰か能定むべき相とも賢愚之環の如く又して端を以て縦入怒ると云を却て我咎を懼よとみへて依然共當家の運命未盡ざるは依て謀叛已顯れいひぬ其上仰合さる成親を召置る上いたとへ君いかある不思議を思召立るゝとも何の怖いべき所當の罪科行れぬる上の退て事の由を陳じやさせ給ひ君の爲よ彌奉公の忠勤を盡され民の爲よ益撫育の哀憐を施したまひ神明の加護預り佛陀の冥慮よを協べし君を思召直すとはいへし君と臣とを比るよ親疎別方よし道理と僻事とを双べんよ争か道理よ付ざるべき此度の尤君の修理と存る旨もいへば叶ざらん迄も院中を守護し參らせいべし其故の重盛いじめ叙爵より今大官よ昇るまで君の恩よわらざるいあし此恩の重きを思へば千顆萬顆の珠よを越其恩の深を思ば一入再入の紅よを過ぬ此皇恩を一命よて償いべし其儀よ至らば重盛が身よ代り命よ代んと契たる侍共も少々いひめ是らを引具し法住寺殿を守護致し流石以外の御大事よいひあん悲か奇君へ奉公の忠を致んとすれば蘇迷盧八萬の頂より高き父の恩を立地よ忘過し保元よ左典廐義朝其父六條尉爲義を誅したる先規を踏よ似たり痛しいかあ不孝の罪を遁んとすれば君よ不忠の逆臣とありて青史を未代よ汚す進退已究ぬ是非今更辨かたし詮ずる處唯重盛が頸を召れいへかし然る院中の

守護を仕す院參の御供も仕す異國の蕭何の功傍よ越ければ漢高の太相國よ至劍を帶し香を履きながら殿上へ昇ることを許されしを慮慮よ背とありしり高祖重く警深く罪せられしと前漢書よ顯然之此先蹤を思へば富貴と榮花と重職と朝恩と相兼て突め玉へば御運の聲と難かるべきよあらず富貴の家よ祿位重疊し再實ある樹の其根必傷とすせば心細くこそいへいつ迄か命生て乱ん世をも見いん唯末代よ生を稟てかゝる憂目よ逢い重盛が果報の程こそ拙らひへ唯今を侍一人よ仰付られ御盡の内へ引出され重盛か首を刎られんいと易き程の御事よいひめとて直衣の袖よ涙よ浸てかき口説玉へり一列の方々曾袖を濡されける入道殿頼切たる内府のかわやう宣ふ世よも哀しげよていやゝそれ迄のことの思寄いはず惡黨共よとよ君の附せ玉ひ又もいかなる僻事よと出来んかと思ふばかりよいと宣ふ大臣殿縦いかなる僻事出来いとて君を何とにか仕玉ふべきとてつひ立て中門よ出侍共よ宣ひける唯今是よいにてつる事共をば汝ら能承すや今朝よりかやうのと共中辭んと存扣在たれ共混騒よ見へつる間先歸つる院參の御供よ於て重盛が首の刎られたらんを見て仕れさらば人參れとて小松殿へ歸られける其後主馬判官盛國を召て重盛こそ今朝別して天下の大事を聞出したり我を我と思ん者よ物具して急ぎ參れと催せと宣へば馳廻つて披露すをばるけよの騒ぎ給いぬ人のかわやうよ披露あるうへの誠よ別の子細有らんとて我もくんと馳參る程よ淀羽東瀬宇治岡屋日野勤修寺醐醍小栗栖梅津桂大原志津原芹生の里よ溢居



兵共或の鎧着ていまだ冑を着ぬもありあるひの矢負をも未だ弓を持ぬもあり片鎧踏や踏ざるも  
 周章騒て馳参るほどは小松殿の騒ことありと聞へしかば西八條は數千騎ありける兵共入道殿  
 より右ともやさでさやめきつれ皆小松殿へ馳たる程は弓箭携る程の者一人も殘らず筑後守貞  
 能唯一人ひひけるを召て内府の何と思ひて是らと皆かくまで呼取やらん今朝是まで云つる  
 機は淨海が許へ討手をも向るよやと宣へば貞能涙をうかべ人も人こそよらの争か唯今さるは  
 事のいべき今朝の事共早皆後悔がゆいんとやけるが入道殿いやく内府は中違ふて世の  
 人の思ひ付をわしく却て一家騒乱せんとを恐れ玉ひけん法皇を迎奉らんと心の心も和ぎ急ぎ腹巻  
 を脱素絹の衣は袈裟打掛て心よを起ぬ念誦してこそ坐ける小松殿の盛國承つて着到付けるが  
 馳参る侍矢庭より一万余騎を注しける着到披見の後大臣殿中門より出て侍共宣ふ日本の契約を  
 違す皆々早速の参着神妙々今朝別して天下の大事を聞出せし故召つるこされども此事聞直しつ  
 るが僻事までありし之然る上の疾々歸るべし自今以後を召とあらばかくの通り速は馳湊ふべし  
 とて各歸されけり全くさせる用のさかりしかども今朝父を諫すさるる詞は隨て我身は勢の付  
 か付ざるかの程を告知又父子軍をせんとはいあらね共入道殿謀叛の心を柔き玉ふかとの謀あり  
 し入道殿かく速は勢の集りしを聞れ小松殿と人心版降ると感歎し玉ひしと君君たらずとい  
 ふとを臣以て臣たらずんば有べからず父父たらずといへども子以て子たらずんば有べからず君

の爲より忠有て父の爲より孝あれと孔子の宣しは違はず法皇後此由を聞し召今も始ぬとなれ共  
 内府が心の中こそ辱しけれ怨をば恩を以て報じたりと被仰し國は諫る臣われは君道よくとも天  
 下を失す家も諫る子われは命令を失はずと云先言も相叶ひ上代も末代も又あるまじき大  
 臣

論者いわく平家物語流布の本は周の幽王愛妃褒姒の生質常々笑ふときし烽火臺は火を揚げ  
 れば諸軍勢相圖を違す馳來て寇も備しとあり褒姒見て始て笑り幽王是を歡て寇をなきは烽  
 火を擧ぐる諸侯の軍勢到着すれば更は寇を後し諸侯怒后實は寇あつて烽火を揚れ共一  
 卒も到らず犬戎といへるゆびす竟は周を亡せりと此事を揚て書りされ共重盛公の不用は兵を  
 召たるのすは法皇の御所を固めかくの如しと父入道を恐れしめ法皇へ對し父の不忠亦から  
 ん爲天下と家の爲もせられしは諸軍を欺も似て幽王の兵を召たると同日の談もあらず此時  
 の後最明寺時頼諸國を巡られしは佐野源左衛門常世と云浪士鎌倉は事あらんよの妻よ  
 口を取せ瘦馬は策て一番は馳参らんとやし虚實を搜んと急は兵を召ければ諸國の軍勢馳集  
 りしが果して常世其中に在時頼感じ三箇庄を領知すべき墨附を玉りしとあるは諸曲の作り  
 ものより出たれば論するは足す

新大納言配所は平去藤藏人謀めて徳大寺殿昇進鬼界島よて康頼卒都婆を流す

去程は六月二日新大納言成親卿を公卿の座より出し物進せられども胸塞では箸をさへ立られず預りの武士難波次郎経遠は車を寄て疾々とゆければ大納言心ならずも乗玉ふ哀いかよをして今一度小松殿よまみへ度思れければ共叶はず重科にて遠國へ行も譜代家子一人二人の身は副るも打圍たる軍兵とも我方様の者絶てあければいよ／＼涙は沈れぬ西の朱雀を南へ行ハ大内山を今の餘所見玉ひける都も残り玉ふ北の方少き人々の心まで推量れて哀也鳥羽殿を過玉ふを此御所へ御幸ありしより一度も供養をせざりしをとして我山庄洲濱殿とありしをも餘所よみてこそ通られければ鳥羽の南の門出て船通しとぞ急せける近う副奉りたる武士を誰ぞと問玉へハ預りの武士難波次郎経遠と名乗たり若此邊は我方様の者やある一人尋て参らせよ舟も乗ぬ先云置べきとわりと宣ふまど経遠走廻て尋ねければ共我こそ大納言殿の方とす者一人をなし卿の涙を流し我世は在し時の隨ひ付たりし者二千を有つらん今餘所よだは此有さまと見送る者のあかりける悲さよとて泣れしかば猛き武夫共を鎧の袖を濡しけり此卿死罪を流罪は宥られし小松殿種々ゆされけるも依てあり其日の攝津國大物の浦も着玉ふ明る三日京より使者とて聞くゆゑこゝよて失ひるゝかやと聞玉へハ備前の兒島へ流すべしとのは使へ小松殿よりは文ありいかよをして都近き片山里ももと色くすつれ共叶はざりし去ながら命ばかりの乞請ては侈心易く思召れいへとて難波が許へ能く官致せ相搦て御心よバシ差ふと仰越れ旅の装細く沙汰し贈られぬ新大納言の厚く忝う思されけりされ共君よの離れ参せよかの間を去かたく思れし北の方少き人々よを別れ果いかある土地へ行とぞ雲と道とつらあるのみよて再び故郷へ歸り妻子を相見んことをありがたしとせ山門の訴訟よて流されしを君惜せ玉ひ四の七條より召歸されぬされば是の君の禁よをわらすいかある艱難を経よと歸る期を有てこそ今いた首を刎らるこそ増るらめと涙は咽泣悲めどをかひどあき流石よ露の命消やらで跡の白波隔れば都ハ次第遠ざかり日數累れば遠國既よ近づきて備前の兒島よ漕寄民の家のいふせきよ入奉る島の習後の山前の海蔵の松風波の音いづれ哀ハ彌増ける此卿のみよわらす營らるゝ輩多かりし近江中將入道遠浄ハ佐渡國山城守基兼ハ伯耆國式部太輔正綱ハ播磨國宗判官信房ハ阿波國新平判官資行ハ美作國と聞へける折節入道相國福原の別業よ座けるが同廿日は攝津左衛門盛澄を使者よて門脇殿の許へ夫よ預置し丹波少將を急ぎ是へ給はりいぞんずる旨有ともうしつかりされける宰相さらば有し時左を右をかりたりせば如何せんふたゝび物思のせん悲しさよとて此事告らるしかば少將泣々出立れけり北の方女房達磨を宰相の能よささせ玉へかしと歎かれければ宰相存る程のとい替すつ今の世を捨んより外又何事をかすべき何國の浦よをふとせよ我命のあらん限ハ訪ひすべしと宣ひける少將ハ今年三ツも成玉ふ少き人のいしけれ共日來ハ若き人よて公達などのことを細やかよを坐ざりしか共今ハの時も成ぬれば流石懐しうや少き者を今一度み

ばやと宣ふゆへ乳母抱て参りたり少將膝の上へ置髪挿撫涙を波落くと流し哀汝七歳みちら  
 ば男も成して君へ進せんと思ひしよ今の云がいちし若不思議な命生て成長たらば法印も成て我  
 後世を吊へよと宣へば未幼きは心は何事かを聞別玉ふべきされ共打頭頭玉へば少將を乳母上乳  
 母の女房其座は在合人々心あるも憐あさも皆袂を絞ける福原の使今夜鳥羽迄は出有べきよし  
 少將いく程も延ざらんを今宵斗の都の内よて明さばやと宣へをいかよを叶ふまじごと  
 頻ふゆけれバ力及ず其夜鳥羽へ出られける宰相餘りの物憂ふ今度の乗を具し玉の少將ばかり  
 を乗玉ふ同廿二日少將福原へ下り着玉ふ入道相國備中國の住人瀬尾太郎兼康も仰て備中國へ流  
 されけり兼康の宰相の聞玉んを恐れ緊しう當り申さず道すがらをさまく痛り進せけれ共少將  
 の慰み玉ふと無晝夜唯佛名を唱へ偏父の事を祈られける新大納言成親卿の備前の兒島も御座  
 けるを是の舟着也とて備前備中の境庭瀬の吉備の中山の有木の別所と云山寺も置けり少將の  
 座ける備中瀬尾と有木の別所の間い僅五十町も足ぬ所されば少將より其方の風を懐しう思れ  
 或時兼康と召て是より大納言のおりする處へいか程あるぞと問給へば直し知せば悪かりあんと  
 や思けん片道十二三日いと答少將涙をたらくと流し日本の昔二十三ヶ國よて有りしを中葉六  
 十六國も分れたり備前備中備後も本の一國よて有しと東も聞る出羽陸奥も六十六郡一國よて十  
 二郡を割て出羽國を立られぬされば實方中將奥州へ流されし時陸奥の阿古屋の松も樹隠れて出

べき月の出もやらぬかと詠し古歌を思ひ出其松を見んとすれ共あかりしかば古老の告今や其所  
 の割れて出羽の内はありしと聞出羽の國も越て阿古屋の松をば見たりしとかや筑紫より都へ腹  
 赤の使の上る歩路十五日の定之汝がや如くすでも十二三日行は殆ど銀四へ下りあん備前中後の  
 間の兩三日もいよも過じ遠うやの父の渡渡り有處ゆる成経も知せしとてのとからめも其後の想  
 じけれども問給す扱又法勝寺の執行俊寛僧都平判官康頼外も丹波少將成経の備中國の配所を替  
 以上三人薩摩方鬼界が島へ流されける是の波路邊も凌つゝ行所よて人稀ゆる船の道ひをさし適  
 人あれ共衣裳あければ人よを似ず言詞の聞知れと身も毛生色黒く牛の如し男の烏帽子を着て女  
 の髪を下す結食する物あければ唯殺生を業とす賤か山田を返さねば米穀の類さらみさく園も  
 桑を植ざれば絹綿の類もさし島の中も高さ山有鐵火燃て硫黄充滿たれば硫黄が島と名付たり  
 雷鳴上り鳴降籠の雨しげし一日片時人の命を保つべき手術をさし新大納言の少し甘く事もやと  
 思れけるが近き程も座と思れし子息丹波少將成経共三八鬼界へ流されぬと聞今はいつとか期  
 すべきとて出家の願便も付て小松殿へやされしかば法皇へ伺は免あり榮花の袂引變て浮世を餘  
 所も墨染の袖もそ蓋し給ひける去はさよ大納言の北の方の都の北山も忍びおひせしが任嗣給ひ  
 處所の物うさよ彼を是も忍びれて通行月日も暮し煩ひ給ふ女房侍を多かりしが或の世を恐れ人  
 目を裏み問訪ふ者もさし中も源左衛門信俊と云侍備ありて常々訪ひ參せし或時北の方信俊を召

誠や殿の備前の兒島よりいせしが今の有木の別所とかや御座と聞いかよもして墓なき筆の  
 跡をも進せ御返事を今一たび見やと思へともすがさへたしと宣へ信俊涙を浮某し幼少  
 より御憐を蒙り片時去す召ける涉聲耳も忘がたく中国へ御下りの供願しが六波羅殿取上  
 をあしたといひかあるうさめ逢ひ共は文給り参りいんとすける北の方斜からす悦び頼て文  
 と認波され若君姫君面々は文あり信俊取集て懐中し遙々備前國有木の別所へ尋下り先預りの  
 武士難波遠が方へ云入れれば其志を感じ見参を免けり大納言入道唯今しも都のものをみ  
 云出て歎き沈みせし處へ信俊か参しと聞れ其の誠かど起揚いかよいか夢かや現かや是へ  
 くどすされける信俊傍近う参ては有様を伺ふは栖居所の物變はさると墨染の御袖を見  
 るよ目をくれ心を消果涙の漣を塗離けり北の方仰の次第濃は語中は文取出し奉る開て見給ふは  
 水蓮の跡の泪は書かれてそこかとの見ぬ共少き人々餘りも慈悲み給ふ有さま我身を盡ぬ襟よ  
 堪忍べくもあらずと書れたれば日來の戀し事の數あらずと歎き給ひけるかくて四五日を過  
 しかば信俊これよて御最期の有さまも見参せんとすけるを預りの武士其儀の叶ふまじとす  
 間大納言幾ほども延ざらん唯疾歸れと宣ひける我は近う失せれんと覺るぞ此世よきと開後  
 世をも吊ひたべよと宣ひつゝ御返事給りければ信俊の又こを参りめとて暇すて出ければ汝が  
 又來ん度を待付べしとも覺ぬぞ餘り名殘惜けれ暫々と宣ひて度々呼を戻されけるさてしも在べ

さとちならぬ信俊は泪を押へ都へ歸り上げり北の方へ参り返事を奉る開てみ給へば御さまかへ  
 させ給ふと覺しく多々の奥は髪の一房わりけるを二目共見給ひて紀念こそ今の中へ仇なれ  
 と引被て予風給ふ若君姫君を聲々喚叫び給ひけり去はど同八月十九日中山有木の別所よて  
 終よ失ひ奉る御最期の有さま始の酒は毒を交て進らせしが叶ざりけるよぞ二丈餘りの岸の下よ  
 鐵蒺藜を植て突落しければ藜は貫れて予失られける無下見方みへ給ふ北の方此よし傳聞給ひ  
 いかよをして今一度見もし見へばやと思ひてこそ今日まで姿も替ざりし今の何かいせんとして菩  
 提院と云寺まわし尼もあり佛事作善の營他事あかりし此北の方の山城守教方の女後白河法皇  
 の御思ひ人双き美人ありしを大納言有がたき御寵愛の人ゆゑ下し給りしを若君姫君花を手折  
 關伽拘父の後世を吊ひ給ふぞ哀ある眼前天人の五衰も異ならず爰は徳大寺大納言實定卿の平家  
 の次男宗盛卿も大將を越れ暫く世のさまを見んとて大納言を辞し籠居しておのしけるが今の  
 出家せばやと仰けるを御内の上下皆歎き悲しみける中よ藤藏人大夫重兼と云諸大夫有諸事よ心  
 得たる者よて或夜月と弄ひ嘘おとする處へ参り君よの出家の思召いよし左いで上下の内  
 迷者と成いはん今平家の体よみるは嫡子重盛と次男宗盛卿左右の大將んやがて三男知盛嫡孫維  
 盛と次第進れば他家の人々のいつ大將も當つくべきそれよつさ珍しき旨を案じ出し安藝の  
 嚴島の平家崇敬淺からず是へは参籠有て兎して角し給へと手術濃は語やければ徳大寺殿思す横



源左衛門信俊大納言  
 入道の御返事を  
 北の方へ奉る圖

手を打て汝が工夫曾て思ひよらざりきとて能く納得し俄に精進を始め嚴島參籠ありける優なる舞姫共多く立出て柳當社への我等が主の平家の公達こそ参り侍ふは珍しき参りて宗徒の内侍十餘人夜書付副さまく款待奉るさて内侍共何事の修祈禱やらんと尋侍れば大將を人越れて其所の爲と宣へり一七日參籠の間神樂を奏し風俗催馬樂歌の其間舞樂を三個度迄有けり此下向の時宗徒の内侍十餘人船推立一日路送奉る徳大寺殿餘り名殘おしきと今日路今二日路と宣ひて都まで召具させ給ひ徳大寺殿の亭へ入させおのしきと今日路今二日路物賜て歸されたり内侍共の遙く是迄上りたる争か我等が主の平家へ参らで有べきとて西八條殿へ参ける入道殿やがて對面し給ひ内侍共の唯今何事の列參ぞやと宣へば徳大寺殿の嚴島へ修參籠ゆへ我く船を仕立て一日路送り参らせ暇をせしと徳大寺殿名殘惜とて今日今二日と仰られつひしか是迄召具せられぬ京へ出て當家をよろゝ賑はるべさやとかく参じたりとや入道殿重ねて其徳大寺の何事の祈誓と參詣ありつるやさんい大將を人超られ其所の爲と仰られぬいさと其時入道殿打點頭王城よさしと靈社靈佛多く座をさし置淨海が崇め申嚴嶋へ遙く参るゝとの最愛さよ夫迄切あらんいとして嫡子重盛公内大臣左大將よて座けるを辞させ次男宗盛卿大納言右大將たるを起させて徳大寺殿を左大將よなされけるわはれ賢き計ひかお皆是實定卿の忠臣藤藏人大夫重兼主人を思ふ方寸よ出たり徳大寺殿重兼を重く賞し給へり新大納言かく

を計らひて謀叛を企其身は流されて亡び子息の鬼界島の辛苦をかけられしこそ是非おけれ扱又法皇の三井寺の公顯僧正を師範として眞言の秘法大日給金剛頂經蘇悉地經の秘經を受させ給ひ九月三井寺よて御灌頂有べきと聞ゆ山門の大衆大に憤り昔より受戒の當山よ遂させ給ふ先規あるを今三井寺よ遂給ひ當山を燒拂んと沙汰するゆへ法皇は加行料修結願有て修灌頂の思召留給へりされども公顯僧正を召具し天王寺へ幸有て五智光院を建進井の水を五瓶の智水と定め佛法最初の靈地よて傳法灌頂の修本意を遂させ給ふ山門の騷動を静給ひん爲三井寺よての修灌頂なかりしか共山門の堂衆(學生所從の童法師も成たるや中間の法師原也)學生不快の事出来合戦度々及諸國の強賊山賊海賊等堂衆も合鉢し大合戦と成故山門より公家へ奏聞し武家も觸訴るゆゑ入道相國院宣を承て紀伊國の住人湯淺權守宗重は畿内の兵二千餘人大衆も添て堂衆を攻けれども幾度も官軍敗軍せり其後の山門荒とて止住の僧侶稀なり十二禪衆のみあれは行法退轉し修學の窓を閉四敷五時の春の花を匂す三諦即是の秋の月を蔭れり三百餘歳の法燈を挑る人もかく六時不斷の香の煙を絶る如し堂舎高く聳三重の櫓を青漢の内よ挿み棟梁遙より秀て四面の椽を白露の間よ掛たりしも今や供佛の嶺の嵐も任せ金容を紅漚も濡し夜の月檐の間より洩て燈を挑げ曉の露蓮座も珠を垂末世の例をありや遠く天竺の佛跡を吊ふ昔佛法を説き玉ひし竹林精舍孤獨園の日來の狐狼野干の栖と成て礎のみ残り白鷺池の水絶て叢蕃り

進梵下乘率都姿を傾て若茂の震旦よも天台山五臺山白馬寺玉泉寺を今住侶も亦く荒果大小乗の法門を箱の底よや朽ぬべし我朝よも南都の七大寺荒果八宗九宗を兼學よ名のみとゞめ愛宕高雄も昔の堂塔軒を双べたりしが一夜の中よ荒て天狗の栖と成ぬさればよやさしも止ごとなく貴さ天台の佛法も治承の今よ及で亡果ん時來しやと歎さし之何者か離山せし僧坊の柱よ一首の歌を書付たり

祈こし我立柳の引替て人なき嶺とあれやはてあん

昔傳教大師當山草創の時阿耨多羅三藐三菩提の佛達よ祈伽藍落慶の上我立柳とすされしより今も叡山の一稱の如し彼是思出て詠たるこそいと優しけれ八日の藥師の日あれ共南無と唱る聲もせず卯月の垂跡の月あれ共幣帛捧る人もあし朱の玉籬神久て注進繩のみぞ残ける其比信州善光寺炎上せり此如來の中天笠舍衛國月蓋長者閻浮檀金を得て佛目運長者心を一として鑄造し給へる一着手半の彌陀の三尊三國無双の靈像之佛滅度の後天笑よ止り給ふと五百餘歲佛法東漸の理よて百濟國よ移一千歳の後彼國齋明王我朝欽明天皇の御宇よ日本よ渡され難波の堀江よ星霜を經ぬ信州水内郡よ移まして五百八十餘歲されども炎上の懸を柳ともどかや去程よ鬼界が島の流人共露の命草葉が末よかゝれり丹波少將の舅平宰相教益の領地肥前國鹿瀬の庄より常よ衣食を送られしゆゑ俊寛康頼まで命生て過しける中よも康頼の流されし時周防の室積よて出家し法

名性照と付たり出家の元來望なりければかくこそ思ひつゝけられ

終まかくとむきはてける世の中をとく捨ざりしことを悔しき  
丹波少將康頼入道の熊野信仰の人よていかよもして此島の内よ熊野三所を勸請し歸洛を祈らんと似たる所もやと求るよ或の林塘の妙なる有紅錦繡の粧品々よ或の雲嶺の柱あり碧羅綾の色一ツよあらす山の氣色樹立のさま尤他よ勝南の漫々たる洋海雲煙の浪深く北之岫たる山岳百尺の瀑布級落松風の音寂實として飛瀧權現の在那智の御山よ髣髴たれば是と仮よ名付て此嶺の新宮彼嶽の本宮其他何の王子某の王子と名をすて兩人毎日熊野詣の眞似して澤邊の水を掬離よかきての岩田河の清き流と思ひ高きよ上ての發心門と觀じける或夜兩人して通夜しける夢よ沖より來る風よ木の葉二ツ兩人が袂よ吹かけたり是を取てみれば御熊野の梅の葉二葉ともよ一首の歌を蟲よみたり

千葉やふる神よいのりのしげければとどか都へ飯らざるべし

康頼入道餘り故郷の戀しきまよせめての 謀よや千本の卒都婆を造り阿字の梵字年月日仮名實名二首の歌をぞ書付ける

薩摩がた沖の小島よ我ありと親よりのつげよ八重の汐風

思ひやれしバしと思ふ旅だよも猶古里の戀しきものを

是を浦へ持出南無飯命頂禮梵天帝釋四天王堅韌地神王城の鎮守諸大明神別して熊野大權  
 現安藝の嚴島大明神せめて一本ありと都へ傳賜是神の白波の寄ての飯す度ぶと卒都婆一  
 本波の海を浮ける卒都婆の造り出すは隨て海を流しけるより數つをれば其數を積り物思ふ心  
 や儂の風を成たりけん又神明佛陀の送せ給ひしや千本の内一本慈州嚴島神前の渚へ打上たり  
 こゝに康頼入道が所縁ありし僧もし然るべき便をあらば彼島を渡り其行術も尋んと西國修行よ  
 出けるが先嚴島へ參心静は法施して立出んとしけるが満くる潮は沖よりそこのかどきく打寄  
 る鷹盾の中へ卒都婆の形みへけるを何心なく取てみれば歌を姓名を彫入刻付たれば波を洗ひ  
 れず鮮明よみへたり殆不思議の事として笈の傍に差て都へ歸上り康頼が老母尼公妻子共の一  
 の北紫野を忍び居たるは是をみせければ一たびの其無事あるを悦び此卒都婆高麗唐土の方へも  
 流れずして是迄獲へ今更物と思すらんと悲しみけるが遙の嚴島及て法皇嚴覽ありあき無慚こ  
 の者共が命未だ生とあるよとと涙を流させ玉ふが忝あさは是を小松大臣の許へ遣さりしかば父  
 の神門不見せ奉らる柿本人丸の島が以れ行船を思ひ山邊赤人の蘆邊の田鶴を詠玉ひ住吉の明神  
 の舟削の想ひをなし三輪明神の杉立の門をさす昔紫雲鳴尊三十一守の和歌を詠始玉ひしより以  
 來諸の神明佛陀を彼詠吟を以て百千萬端の思ひを述玉ふ入道殿を岩木ありねば流石哀げは宣ひ  
 ける入道殿かたは玉法上の京中の上下老若鬼界が島の流人の歌として口ずさまぬいかりけ

り千本造作り出せる卒都婆ありてはさかたの思ひ有けぬ陸軍方ふ知れぬと都を傳りけ  
 る不思議さよ古漢王胡國を攻らむし時大將軍李少卿を以て討しける二十万騎の大軍を帥たれ  
 共戦まけ李將軍胡を擒し故再び蘇武は五十萬騎を以て討しけるも胡の生捕とありしかば胡  
 降參を勸れ共更も肯すよつて六千餘人の生捕を片にす別て退放れしは多く地を死せし  
 が蘇武一人の死せず木の實落種を拾て十九年の艱難を経たれ共雁の足へ文を附て放せしが漢朝  
 一達し竟も節を全ふして故郷へ皈りしと云り是は二筆の末さみ是は二首のよみ歌彼の土代是の  
 末代胡國鬼境界を隔て、世々こそ替れ風情の同じ有難かりし次第也

丹波少將成經平判官康頼法師赦免中宮御産皇子御降誕

治承二年正月院の御所拜禮朝觀の行幸恒例の如しといへ共去年の夏新大納言成親卿以下近習の  
 人々多く流され失れしと御法皇憤を止す世の政萬事物變思召御快ぬとのみへ太政入道も  
 多田藏人行綱が告知せし後の君を護影とよ思奉り上への事なく下心の用心専一苦笑しての  
 み居られたる同七日の夜より紫光氣(彗星あり)東方より出十八日より芒光甚だ廣大なり時中  
 宮御惱み依て諸社の奉幣諸寺の御讀經大法秘法殘所なく修行せしむされ共官醫の診御懐妊と盤  
 定す主上の十八中宮の二十二にて未皇子誕生宮もよまじせさす若皇子御降誕あらばいかよ目出  
 度からんと平家の人々悦むべり他家みては平氏繁昌の振を得て入道相國外祖なすは威光法皇の



上お出んとやける彌御尊延定しかば入道殿有驗の高僧貴僧よ令て變成男子の御祈禱を修せし  
 六月一日御着帯あり仁和寺の御室守覺法親王參内孔雀經の法を以て加持を給へば天台の座  
 主覺快法親王寺の長東圓覺法親王を參り給ひ御祈禱をさし給ふ扱を中宮の月の重るよ從て御身  
 苦しう覺させ梨花一枝のあめを帶女郎花の露重けある御形勢にかゝる折節よの性も御物氣共餘  
 多取入奉る神筮が明王の縛り纏て靈顯れぬ殊よの讚岐院の尊靈宇治惡左府の御憶念新大納言成  
 親卿の死靈西光法師が惡靈鬼界が島流人共の生靈なんど、やける是よ依て生靈死靈共宥らるべ  
 して先讚岐院の御遺號有て崇徳天皇と尊号し宇治の惡左府へ正一位大政大臣を贈らる勅使の  
 少内記維基之件の墓所の和州添上郡河上村般若野の五三味なり保元の秋繁發捐られし後の死骸  
 道邊の土と成て年々唯夏草の滋るのみ今勅使尋來て宣命を讀ければ亡魂尊靈いかゞ嬉しく覺すら  
 んされば花山法皇十善の帝位をすべらせ給ひしは基方民部卿が靈之又三條院の御目を御覽せら  
 れざりし寛算供奉が靈どかや門脇宰相かやうの事共傳へ給ひて小松殿よすさるゝ今度中宮  
 御産御祈りさまととみ得共何とすも非常の赦よ過たるいひまじ中よを鬼界が島の流人共を召  
 返されんいひかばかりの功德善根よかひべきと頓て小松殿禪門の御前よ參丹波少將がとを門脇  
 宰相餘りよ歎すさるゝい便さうい殊よ中宮御惱よを成親が死靈もと聞へてい是を宥んよい生て  
 ある少將を召返さるゝよしくべからず覺へい人の思を休めさせ給ひい思召とも叶ひ人の願ひを

叶させ給ひい御願ひを成就すべき道よていされば中宮御平産皇子御誕生有て家門の榮を彌々盛  
 よいべしあやすされければ相國禪門日來を殊よ和きてさるよでも俊寛康順法師がといいかよと  
 宣ふそれを同じう召返されいへかし若一人も殘されなば中々罪業たるべしとすされける入道殿  
 康順がといさもあらめ俊寛の隨分入道が口入を以て人よ成たる者ぞかしぞれよ所を多きよ鹿谷  
 己が山庄よ寄合て奇恠を振舞自業自得哀じよ所なし俊寛よ於てい思を寄すと宣切給ふ大臣歸  
 て伯父宰相よ少將の既よ赦免あるべくい御心易かるべしと有ければ宰相の今更泣々手を合せて  
 舞み悦れける下いひし時を是程のとあや請ざらんと思ひたり氣よて教盛を見い度毎泪を流  
 ししが不便いいとぞやされける小松殿職よ左こそいめ子い誰とても悲しければ猶能々や上い  
 いんとして別れ玉ふされば鬼界の流人兩人召返さるゝ事定り入道相國の教文玉りて御使都を立  
 宰相悦の餘りい使よ私の使を副て下され夜を晝よして急け共海路心よ任せ浪風を凌ゆく程よ  
 都の七月下旬よ出たれ共長月廿日比鬼界が嶋よ着よけるい使の丹左衛門尉基康也急ぎ陸よ上り  
 みるよ事問ん人を見當されば姓名を高らかよ呼聲くよ尋ねける二人の例の熊野詣して居す俊  
 寛の淳直からぬ質氣ゆる熊野あどの事い思ひもかけず此時を一人にけるが人呼聲を聞餘りよ思  
 へば夢やらん又い天魔波旬の我心を誑よやと周章ふためぎ走るとをかく倒る共なくい使の前よ  
 行向ひ是ぞ流れし俊寛よと名乗ける處へ兩人を歸來ぬ雜色が頸よ掛させし教文を取て渡しける

を披見し、重科の恩流も免ず、早歸洛の思を成可、今度中宮の産の祈願に依非常の赦行の然間、鬼界が島の流人丹波成經康頼法師二人赦免と計りて、俊寛が名なし、俊寛取て若墨紙もど有とみれ、其無徳興より端へ讀端を興へ讀て、繰返みれ、共二人と斗書れ、三人との書れ、俊寛のいをいかにあると云やと、使を尋ふ某へも二人とは沙汰はと、中兩人の全く熊野三社の靈驗と各々手を合を禮拜する、俊寛の夢こそかゝるといわれ、夢と思ひなさんとす、バ幻也現と思へ、バ又夢の如し、其上兩人の許への都より言傳たる文いくらをも有、俊寛僧都の誦への事問文一をさし、され、バ我所、織共都の内への跡を留すありけるよと思ひやるさへ、覺束なし、抑三人同じ罪配所を又同じいかなれ、バ赦免の二人召返して一人を殘すべき平家の思ひ忘れかや、執筆の筆の誤か、このいかみと天よ仰ぎ地、伏で泣悲め共か、ひとなき僧都少將の袂に、追俊寛がかよ、えあるも、傍邊の父大納言殿由なき謀叛のゆゑ、赤れ、バ餘所の事と思ひ給ふ、赤れ、巴都までこそ吐すとも、攻て同じ船よ、九州の地迄着て給各、これよ坐つる程こそ、春の燕秋の田面の、丁の音信様よ、自ら故郷のよ傳へ聞つれ、今より後の何としてか聞へさとして、悶焦れ給ひ、けり、少將誠み、左こそ思されん、我等が召返さる、バ嬉さのさるとよ、いへ共御形勢を見て、い更へ行べき空を覺す、い同船よ、て上り度へ存れ、共都の、使いかよを叶ふまじと、やし、か、も、無、二、人、ひ、と、し、く、島、と、出、た、り、と、聞、へ、ハ、中、を、懸、う、い、へ、し、成、經、先、上、て、人、々、よ、を、合、せ、入、道、禪、門、の、氣、色、を、も、伺、ひ、迎、の、人、進、り、せ、ん、れ、海、の、白、來、の、様、よ、思、ひ、成、て、待、給

へ、此度赦免も、御給ふと、佛終よ、の、音、を、か、敷、な、く、い、へ、さ、さ、ま、ま、と、思、ひ、お、し、さ、れ、け、れ、共、地、忍、ぶ、べ、く、を、み、へ、ら、れ、す、去、程、は、舟、出、さ、ん、と、し、け、れ、バ、僧、都、船、よ、乘、て、の、降、つ、下、り、の、事、も、ま、し、事、を、を、せ、ら、れ、け、る、多、將、の、信、よ、夜、初、夜、康、頼、入、道、の、紀、念、よ、一、部、の、法、華、經、を、受、し、け、る、既、に、觀、を、解、船、推、出、せ、バ、僧、都、綱、よ、取、付、候、成、候、は、ま、り、長、の、立、ま、で、の、引、れ、て、出、候、を、及、す、成、け、れ、バ、僧、都、船、よ、取、付、さ、て、各、々、か、よ、俊、寛、を、バ、終、に、捨、り、て、給、ふ、か、日、來、の、情、を、今、は、何、さ、ら、敷、れ、あ、け、れ、巴、都、ま、で、と、吐、す、と、せ、め、て、此、船、よ、乘、九州の地迄と口説け、れ、共都め、使いかよを叶ひ、まじとして、取付給ふ手を引、餘船を、遠く漕出、す、僧、都、せ、ん、方、あ、く、踏、上、り、劍、伏、幼、者、の、母、や、乳、母、あ、き、悲、ふ、や、う、は、足、指、し、て、是、乘、て、行、具、し、て、行、よ、と、云、て、喚、叫、へ、と、も、漕、行、船、の、習、よ、て、跡、ハ、白、波、斗、な、ま、だ、遠、か、ら、の、船、あ、れ、共、涙、よ、く、れ、て、み、へ、さ、り、け、れ、バ、僧、都、高、み、よ、走、上、り、沖、の、方、を、招、か、る、バ、彼、松、節、狭、夜、姫、が、夫、狭、手、彦、の、唐、士、ハ、乘、出、す、船、を、慕、ひ、つ、い、領、巾、振、け、ん、を、か、く、や、と、み、へ、し、船、も、遙、く、漕、經、さ、自、を、暮、れ、共、僧、都、登、の、臥、所、へ、を、歸、ら、ず、波、よ、足、を、打、洗、せ、露、よ、絞、れ、て、其、夜、ハ、其、よ、を、明、し、け、る、さ、り、と、を、少、將、の、情、深、さ、人、な、れ、バ、能、様、よ、サ、給、る、と、を、や、と、願、ふ、か、け、其、瀬、よ、身、を、も、投、ご、り、し、心、の、中、こ、そ、い、か、な、け、れ、扱、も、兩、人、ハ、鬼、界、を、由、で、肥、前、國、鹿、瀬、庄、よ、着、給、ふ、等、和、京、よ、り、使、を、下、し、年、の、内、ハ、波、風、も、な、ま、く、道、の、間、を、覺、束、さ、さ、ま、く、春、よ、成、て、上、ら、れ、い、へ、と、あ、る、ゆ、ゑ、少、將、ハ、此、處、ま、年、を、暮、さ、る、去、程、ハ、同、年、一、月、廿、二、日、寅、刻、よ、り、中、宮、の、産、の、祈、願、と、て、京、中、六、波、羅、毘、羅、す、は、産、所、ハ、六、波、羅、池、邊、ま、て、在、り、れ、バ、法、皇、の、御、幸、ま、て、關、白、殿、ハ、し、め、太、政、大、臣、以、下、卿、相、雲、客、世、よ、人

ど敷られ官加階の望をかけ所帯所職ある程の人の一人を漏す相詰る小松大臣の善悪は付て曝給  
 の人ゆゑ遙く運刻し鏡子権亮少將惟盛以下の公達迄車共遺續させ色々の衣四十領銀劔七ツ  
 廣蓋は置せ御馬十二疋牽せ參せける是の寛弘は上東門院御産の時堂殿御馬參らせ給ひし例と  
 又聞へし大臣の中宮の兄よて坐けるうへ取分父子の契なれば理へ五條大納言國綱卿を馬  
 二匹進せらる志の至か徳の餘りかどぞ人すける伊立願の神社の伊勢石清水以下二十餘所佛閣の  
 南都東大寺興福寺を始十六ヶ所仁和寺法親王守覺の孔雀經天台座主法親王覺快の七佛藥師の法  
 寺の長史法親王圓慶の金剛童子の法其外五大虚空藏六觀音一字金輪五壇の法六字加輪八字文珠  
 普賢延命に至まで殘なく修せられたれば護摩の煙御所中は滿鈴の音雲は響く修法の聲身の毛彌  
 堅ていかかる御物氣あり共面を向べくもみへざりけりされ共中宮の隙なく頻せ給ふ斗よて御産  
 も富も成やらす入道相國二位殿胸よ手を置てこわいかいせんともされ給ふ人の物すもたい左を  
 右をよきとやうと斗宣ひける御海軍の陣ならはかく迄願せし物をとぞ後よの宣ひける御驗  
 者よの居覺性雲雨僧正春堯法印蒙禪實專兩僧都各僧伽の句共を奉本寺本山の三寶年來所持の本  
 尊蓮寶伏く揉れければいと尊かりける中よ折節法皇の新熊野御幸あるべきよて御精進の次  
 よりけるが錦帳近く御座有て千手經を打掃く遊されけるよう今二際事替てさしを躍狂ける神  
 へ天子共が縛も書く打靜けり法皇仰あるの穢ひいかある物性あり共此老法師かくていはんよ争

か近付べし就中今より來る怨靈と云の昔我朝恩を以て人どあしたる者ぞかし報謝の心をこそ存  
 せずとも豈附碍をあし得べきとて水晶の御珠數推揉せ給へば御産平安は皇子降誕ましくけり  
 本三位中將兼衛卿其時はまだ中宮亮ありしが御籠の中よりつと出て御産平安皇子御誕生いぞと  
 高らかよやされければ法皇を始參らせ關白松殿太政大臣以下の卿相雲客各の助修陰陽頭典藥頭  
 數輩の御驗者堂下迄一同よやつと悅合聲の門外迄よみて聞へたり入道相國嬉しさ餘り聲を  
 揚てど泣れける悦び泣とい是をやすべき小松大臣の急ぎ中宮の御方よ參金錢九十九文と皇子の  
 御枕は置て天を以ての父とし地を以ての母と定め給ふべし命の方士東方朔が齡を保御心よ  
 の天照大神入替せ給へとて桑の弓蓬の矢を以て天地四方を射させらる御乳よの前右大將宗盛卿  
 の北の方と定られしが去る七月難産よて失給ひしかば平大納言時忠卿の北の方御乳よ參られけ  
 り後よ御典侍殿と呼ば給ふ法皇願て還御あるべしと門前よ御車立られしかば入道殿嬉しさの餘  
 り金一千兩富士の綿二千兩法皇へ進上せらる是又然べからずとぞ人すける今度の御産笑止餘多  
 り先法皇の御驗者次よ后御産の御時殿の棟より飯を轉すこと有けり皇子御誕生よの南へ落し  
 邊女御誕生よの北へ落すを是の北へ落されしかばいと噪ぎ取揚落し直されたりければ猶あ  
 りし事と人すける可咲かりし入道相國のあされさまりでたかりし小松殿の奉勅本意あかり  
 しい宗盛卿最愛の北の方よ後れ給ひて大納言大將を辭して籠居せられし事兄弟共よ出仕あらば

いかは目出度、あはれは七人の陰陽師參て千度の御被仕る其中、掃部頭時時と云老者あり所従  
 志ども乏少ありけるが餘は人多く參渡稻麻竹葦の如し役人開れいへとして大勢の中を推分く  
 參る程はいかやのしたりけん右の沓を踏被れそこまて些徘徊が、刺冠を突落されてさばかり  
 の砌、東希匡と老者が警放して練出されば若き公卿殿上人の堪して咄と笑れける陰陽師杯云の  
 反倍とて足をも仇と踏とこり承れ其外不思議共の有しも其時何共覺ざりけれ其後より思ひ  
 合する事共多かりけり御達も依て六波羅へ參る、人々關白松殿(基房公御事)太政大臣妙音院殿  
 左大臣大炊御門殿右大臣月輪殿内大臣小松殿左大臣實定房卿三條大納言實房卿五  
 條大納言國綱卿、大納言實國卿按察使資方卿中御門中納言宗家卿花山院中納言兼雅卿源中納言  
 雅賴卿權中納言實綱卿藤中納言資長卿池田中納言頼盛卿左衛門督時忠別當忠親左宰相中將實家右  
 宰相中將實宗新宰相中將通親平宰相教盛六角宰相家通堀川宰相頼定左大辨宰相長方右大辨三位  
 俊經左兵衛督重孝右兵衛督光能皇太后宮大夫朝方左京大夫長教太宰大貳勅宣漸三位實清以上三  
 十三人右大辨の外直衣と不參の人々の花山院前太政大臣忠政公大宮中納言隆季卿以下十餘人  
 後日布衣直し入道相國西八條の亭よりまゐられける此度産み付諸社諸寺へ勸賞行れ日數經  
 て中宮内裏へ歸らせ給ふ十二月十五日(流布の本より八日とあり)皇子を東宮お立られ傳より小  
 松殿大夫小の池田中納言頼盛卿と定めらる入道殿の像て皇子降誕を願れしが別して嚴島へ月

隨て始祈りされし所此度望むかなければ別して崇徽殿増ける抑平家も此淨神を信じ給たる  
 清盛公未安藝守たりし時安藝國を以て高野の大塔修理せられける渡邊遠藤六郎頼方を雜掌  
 附られ六年ふて成就す清盛公高野へ上り大塔を拜み興院へ參られけるよ白髮の老僧眉は霜と  
 たれ頼も波を疊かせ杖の兩傍あるよ把て出來り何となく物語るのこれ此山の昔より密宗をひか  
 へて退轉せし大塔既も修理終たりをれよ就ての越前の氣比の宮と安藝の嚴島は兩界の垂跡とて  
 しが氣比の榮へたれ共嚴島の蕪如も蕪果いあられ此序も奏聞して修理せさせ給へかしさもい  
 い宮階肩を比る人天下も又もあるまじをいをとて立れけり此老僧の居られしわたり異香薫じて  
 芬々たり人を附て見せらるよ三町がほとひみへ給ひて其後いづくへか失給ひぬ是唯人よあ  
 らず全く大師よて坐けりと彌尊く覺婆婆世界の思ひ出まると高野の金堂も曼陀羅と書れけるが  
 西曼陀羅の常明法印と云繪師よ書せ東曼陀羅の自筆よ書れ八葉の中尊の寶冠をいかに思れ  
 けん我首の血を出して書れけるとぞ聞へし其後都へ上り院參して此由奏聞ありけれ御感あり  
 猶其任を宣られ(任國の年數定りあるものなし給る也)嚴島を修理せらる花表を立替社々造  
 於百八十間の回廊を作られける修理落慶の後清盛公嚴島へ通夜せられしが夢も寶殿の御戸推  
 開き天童顯れ汝此劍を以て朝家の御壁をたれとて銀の燈籠なる小長刀を賜ふもみて覺て後  
 現も橋上よぞ立たりける汝思給りや或書を以て請せしとはいかは但懸行あるは子孫造は叶ふま

七ききと告給へば小長刀の顯然と有て被立しは影をさし全く大明神の詔宣と難有いよく備  
 肝と銘七是より生涯信心せられし也扱を當正月下旬成經福康入道肥前國を立て都へ急けれ共  
 餘寒烈く海を荒多きゆる浦づたひ島つたひして二月十日備前の兒島小着給へば父大納言の渡  
 ありし有木の別所を尋入て見給へば竹の柱は歴たる障子いふせきさまあるが爰かしこ書置給  
 ひし筆の遊を見られ哀人の信ふり手跡は過たるものすあき書置給ずいかで今見るべきとて康  
 賴入道と二人讀て泣泣ていよひ安元三年七月廿日出家同廿六日信俊下向共書れたり扱こそ  
 源左衛門尉信俊が參たるを知れけり夫より墓と尋給め壇築とをかく少しく土の小高き所よ  
 開伽を渡ぎ合拿して生る人よ向ふ如く播口説泣々拜を還られ是迄こそ急つれ此後の急づくも思  
 ずと一向に敷き其夜の兩人墓を廻て終夜念佛行道し明れば新しう壇を築釘貫せさせ前假屋を作  
 り七日七夜念佛し經書て結願は大ひある卒都婆を建過參聖靈出離生死證大菩提と書て年号月日  
 の下孝子成經と書れければ賤山がつの心あきと子よ過たる實なしとて袖を濡さぬいあかりけ  
 り草葉の蔭よも盤わらら賑や嬉しく覺すらん兩人の三月鳥羽小着ぬ大納言殿の山庄此處あり  
 洲濱殿と号立入て見給へば住荒年経たれば築地のわれを蓋もかく門のわれ共扉をあし庭より  
 人跡絶て苔厚く池より淪起て白鷗道盡す此處は興せし人の形をきければ尽せぬもの涙之彌  
 生の中なれば花の未だ名残あり楊梅桃李の梢こそ折知顔は色くなれ昔の主のあけれ共春を忘

れの花おれや少將木の下よ立寄て桃李不言春幾暮の煙霞無跡昔離栖

ふるさとの花のものをいふ世ありせばいかよひかしのとを問まし

かくふるさ詩歌を口号給へば康賴入道も庭樹不知人去盡春來還發舊時花と云唐人の句を吟  
 慨し畢染の袂を濡しつゝ都へ上られける人々の心の内さこそ嬉うを又哀よをありけめ康賴  
 迎の乗物有けれ共名殘惜とて少將の迎の車の尻に乗七條河原迄の伴れ夫より行別れけるが猶行  
 もやらざりけり花の下の半日の容月の前の友旅人が一村雨の過行一樹の蔭よ立寄て別るゝ名  
 殘を惜かし是の憂うりし島の栖居船の中瀬の上一業所感の身おれば先世の芳縁を淺からずや思  
 れけん少將の母君靈山よいせしが昨日より宰相の宿所よ來て待れけり少將立入給ふ姿を只一  
 目見給ひて命あればとばかりよて跡の言葉を出かね引被てを臥給ふ北の方いさしを美しう花や  
 かよわいせしかども尽せぬ襟よ瘦黒て其人とを見へ給はず六條が細かりし髪を白くありぬ少將  
 流されし時三歳よて別給ひし稚人も今の長う成て髮結ほど其傍よ三ばかりある少人の坐けよ  
 と少將おれいにかよと宣へば六條是こそと斗うて涙を流しけるさて我流れし時心くるしげあ  
 る有さま共を見置しが故あう育けるよと思ひても悲しかりけり少將の本の如く院へ參らせ給ひ  
 て宰相の中將まで上がり給ふ康賴入道の東山雙林寺よ我山庄の有しかばそれよ落着先かくと思  
 ひ續ける

故卿の軒の板間も苦茂て思ひしほどのをらぬ月かき  
やがて其所に籠居し愛かりし昔を想像寶物集と云物語を傳られたり

有王俊寛が専途を見る小松大臣病名醫を拒同逝去

去程は俊寛僧都一人の島の嶋護と方見も存命しが幼より不便を加へ仕れし童有王といへるわ  
り鬼界の流人入都へ入と聞鳥羽遊行向みるも我主人の見へ給はずいかよと問は其の猶罪深しとて  
一人島に殘されぬと聞て限なく心愛思ひ常の六波羅邊よりて聞ければをいつ赦免有べきとも  
聞出さざりし程は僧都の息女忍び座する所へ參此瀬も洩玉ひ浮上りをなす今いかよを  
彼島へ渡りし行衛を尋參らせんと存いぬ文玉ひて參りしべしと申ければ姫御前深く悦びやが  
て書て渡されける暇を乞とも許さじと思ひ父母へもしらせず唐船の瀬の卯月五月は解なれ  
ば夏衣立を遅く思ひぬ三月の末は京を立多くの波路を凌越陸路へぞ下りける此より彼島へ渡  
る船津まで有王を怪と着たる物おど剝取あとしければ其聊を悔ひ姫御前の文ばかりの人見  
せじと警の中は隠し商船に乗て件の島へ渡りみるも洛は幽は傳へ聞しは屑あらず田をあく畑  
をあく里もあく村もなし自ら人のわれ共云との聞ぞれ先の詞の猶分らず人と見かけては都よ  
り流されし法勝寺の執行俊寛僧都と中人の修行衛を知らぬかと尋れば返辭いせず只頭を掉て行  
進けるがたまに少し物心得たると覺しきが出来り左様の人三人あかしが二人の都は歸られ一

人の殘てこゝかしと呻吟歩行しが其後の見かけざりしといへりさらば山の方を尋みんと遙分  
又嶺は巖谷も下れ共白雲迹を埋て往來の道さへ安定あらず晴嵐夢を破て其面影をへざれば  
山よりの尋逢ず海の邊は着て尋るも沙頭は印を刻鴨渚の白洲は集濱衛の外跡をなし或朝磯  
の方より螻蛄などのおとく瘦衰たる者弱ひ出来り本の法師まで有けりと覺て髪は虚さま  
ま生上り萬の蕪屑取付て荆を頂るがおとし身も着けるも絹巾の分ちもみへず片手は荒海布  
を持片手は魚を囉て持歩やういしければ其果敢ゆかず都まで多くの乞乞人に見れ共かゝる者い  
まだみず諸阿修羅等故自大海邊とて修羅の三惡四纏故深山大海の邊ありて佛の説置給ひたれ  
ば我を餓鬼道とへ迷來かと覺たる漸く近くわゆみ來るを見てをしやかやふの者も我主の  
行衛か知たると物やさうといへば何ごとぞと答ふ是より流されたる俊寛僧都と中人やか  
すと問れ童こそ見忘たれ共僧都いかでか忘れ給ふべき是こそをれよとて手も持し物を投捨沙の  
上も倒伏さてこそ我主のあり行給ふ果とい知てける僧都願て消入給ふを有王膝の上は揺乗多く  
の波路を凌つゝ遙々と是迄尋ね參たるかひもあくいかよかくいと掻口説ければ僧都少し人心地  
出來扶起され賊は汝かゝる日本の果迄參たるぞ神妙く唯明暮は都のとのみ思ひ居たれば戀しき  
者共の係を夢も見る折もあり幻は立時をあり甚う疲弱りて后の夢も現を思ひ別たす汝が來しを  
も唯夢とこそ覺ゆれもし此事夢あらば覺て後いかせん有王の幻はてし此御形勢まで今迄

御命延してこそ不思議されと申せばいざとよ是の去年の少將や判官が迎の時其瀬も身を投べかりしを少將の詞を憑よ今一度都の音信をやと待存んとせしか共此島よ人の食物絶て無所戒バ身力の有程の山ふ上り硫黄を取九州より通ふ商人あひ食物代たりしを今の左様の業をせずか様よ日の長閑ある時の磯も出て網人釣人も手を摺膝を曲て魚を貰ひ干沙の時貝を拾ひ荒海布を取磯の苦み露の命を掛て愛さから今日までの存命し先我家へと申さるゝ有王のあの傍有様よて家の有の不思議さよと思ひつゝ僧都を肩よかけ敷も隨ひ行はども松の一むらある中よ竹と柱とし芦を結桁梁よ渡し上よも下よも松の葉をひしと取掛たれば雨風とも忍べくもみへ亦有王穴淺増元の法勝寺の事務職よて八十餘箇所の庄務を司り棟門平門の内よ四五百人の所從眷屬よ圍繞せられておのせし人の親り斯る愛めよ合せ給ふ不思議さよとて掻口説き敷さける情考ふれば僧都一期が間用る所皆伽藍の佛物寺物あらずといふとあしされば彼信施無慚の罪よ依て今生よ早く其業を感ぜられしと覺たり俊寛申さるゝ少將等が迎の時彼族よの故郷の人の文共多かりしが我が方へとい一寸の書付も越されば今の皆死絶けるやと覺束あかりし故郷の者共のいかも有り行しやと申さるゝ有王涙ながらされば君の西八條へ出給ひし跡へ官入參て資財雜具を運捕し御内の者共の擄捕れ御謀叛の次第を尋問れ皆失ひひて、北の方の少き人を隠し難給ひて鞍馬の奥よ忍て御渡いひしよも此遣がかり時々参りてみや仕へいゝ稚き人の餘りよ懸

給ひ參度いいかも有王よ我鬼界が島とやらへ參べきよ具しくれと宣ひしが二月よ痘痘行れし時此病よ失給へば北の方の御物思積りし上よも又の浮敷よて打臥給ひしが三月二日よ空しく成給ぬ今の姫御前のみ奈良の姨御前の許よ忍びておのしめそれよりの文こゝよとて取出し奉り外の方よ御迎の参りし時の他への沙汰さへあけられ更よ知ざりしが方々都入の前方始て承鳥羽迄參たれ共君よの洩玉ひ扱こそ此度行衛訊奉らんと有王是迄参りしと語ける僧都頓て文を披讀るゝ有王が申す書きて與よは一人のみ殘され今迄参上りなきいいかゞや高きを卑さを女の身程云がひあさひの男の身もいひづくの鳥迄をいかで尋参らでやいん此有王を伴伴の急さ上せおのせかしと有是見よ有王よ此子が文の書様の墓あさ汝を伴ひ急ぎ上れと書たる振しよ俊寛が心よ任する身よあらんいかに此島よ三とせの春秋を送るべき今年十二よあると覺のが是はよいかあうて何ぞや人よを見へ宮仕ををして身を扶くべきやとて泣れける此島よ流されての層もなければ月日の立をも辨が花の咲葉の落るを見ての春秋と知り蟬の聲を秋を送るば夏と思ひ霜雪の野山よ敷ば冬と知白月黒月の替行よて三十日を辨へ指を屈て數れば今年六よあると覺る稚者よ早先立しよ西八條へ出し時此子が行んと暮しを頼て歸ると慰置し唯今の様よ覺るぞやそれを限と思ひ知らば今暫くを見へかりしを親となり子とあり夫婦の縁を結も一方からの契がかり今この姫がとばかり必苦しけれ共それの生身なれば歎かからも過

して今今の淨世に在て何かせんとしてみづから食事止め偏彌陀の名号を唱へられしが有王渡りて廿三日とや僧都庵の内にて臨終を果さる歳三十七有王空に姿は取付いたくも歎けるが頼て後世の供もやせんと思へども此世に姫御前をおはすされば成行を見届たく僧都の菩提を度と案じゆけかひしく其願所を改す庵を切かけ松の枯枝と芦のかれ葉を積て蕪鹽の煙とあり茶毘をわりて其白骨をひろて頸に掛又を商船にたよりて九州の地に入それより姫御前の方へ上りて見参し始終こましく物語かの島より硯も紙もなければ返事も及ばず此上の偏彌追福専一といふとやけれは際なく歎給ひしが直に其年尼より奈良の法華寺へ行ひ澄し二親兄弟の後世を吊給ふを哀なる有王の僧都の遺骨を頸に懸高野へ上り奥院に納蓮華谷にて法師より諸國と修行して主人の後世を吊ひけるかやう人々の思ひ歎の積りぬる平家の行先怖しき既七十一代の帝白河院在位の時京極の大殿の女后に立給ふと有り賢子の中宮として後最愛限なく主上此後皇子誕生あらまほしく思召けるが三井寺に聞ゆる有驗の阿闍梨有頼豪とやけり主上是を召さば所を命ぜられ朕が願成就せば所望の乞へ依べしと仰下さるゝゆゑ頼豪畏て三井寺に歸り肝膽を摧て祈ければ中宮願ては懐妊有承保元年十二月十六日産皇子誕生依て主上御感深く頼豪を内裏に召汝が所望いかよと論言あり頼豪三井寺に戒壇の建立を願奉れり一僧僧正あとのとをもすめと願慮の外望故皇子誕生有て祚を繼めんも海内の無事あらん爲

也今汝が所望を達せば山門憤て世上を靜あるべからず兩門共合戦せば天台の佛法亡さんとて此願の取上りし頼豪の口惜とて急ぎ三井寺に走歸り死よせんとす主上愕せ給ひ大江美作守匡房を召て汝の頼豪に師禮の契われは行て拵て見よと論言あり畏て阿闍梨が宿坊に至勅諭の趣達し計んとすれば以の外薫りし持佛堂に楯籠怖氣ある聲して天子は戯の詞を論言汗の如しと承ると是程の所望叶さるゝ於て我祈出し奉る皇子成ば取て魔道へこそ行めとて對面もせず匡房立歸此由奏聞ありしかば主上の嘆限あし頼豪の終に于死寂滅す皇子淨腦つかせ玉ひしかば扱々として種々の祈共も有けれ共叶玉承暦元年八月六日四歳にて薨玉ひぬ致文親王是也主上は愁や斗をさし其比又山門に西京の座主良信大僧正其時いまだ圓融坊僧都ありしを内裏へ召てこいいかよと勅わりければいつもかやうの願の吾山の力にて成就する事よみ九條右丞相輔公を慈惠大僧正に契りされてこそ冷泉院の皇子御誕生まじりげれ安程の事よみとて山門に歸り百日肝膽を摧て祈られしかば中宮願ては妊娠有承暦三年七月九日皇子誕生有堀河院とやしは是之は母賢子は攝政師實公の養女實の右大臣顯房公の女)かゝる例もありしは非常の赦行に俊寛一人于死しけるを方見けれ當治承三年五月十二日午の刻ばかりも中御門京極より大なる騰起り坤の方へ吹行し棟門平門吹抜四五町十町を飛せ或は行桁柱をとは虚空に舞散檜皮茸板の類冬の木葉の風を乱る如し鳴とよむ音冷しく人家を顛倒し屋舎を傾



伏し人間牛馬の汚傷勝し是只事よわらずて神祇館よしては古あり今日の中は祿を重する大臣の謹慎別して天下の御大事王法傾ら兵革相續べしと神祇官陰陽寮をも占相同じかりしその比小松殿の加様の事共々萬心細くや思ひけり熊野參誠あり本宮證誠殿の廣前にて静法施有て終夜敬白せられける親父入道相國の然をみる惡逆無道として動をすは君を懼せ奉る其振舞をみるよ一期の榮花猶危し重盛衰子として頻々諫其身不肖の問服膺せられ枝葉運續して親を現し名を揚んと難し此時又當て重盛荷を思ひ怒り怒り列てし世は淨沈せんと故て良臣孝子の法は非や如し名を遁身を退て今生の名望を投捨來世の菩提を求んよ但し凡夫薄地是非も惑るが故よ志を猶志よせず南無權現金剛童子願くは子孫繁榮絶すして仕て朝廷又交るべくんば入道の惡心を和けて天下安全を得せしめ給へ榮耀又一期を限よして後昆恥よ及べく重盛が運命を縮て來世の苦輪を助給へ兩箇の求願偏々冥助を仰と肝膽を摧て祈念せられければ燈籠の火のおとさるの大臣の身より出てはつと消るが如くして失よけり人餘多見けた共恐てすものなし大臣下向の時岩田河を渡られけるよ楠子權亮少將維盛以下の公淨淨衣の下は薄色の絹を着て夏のとされば何となら水は戯れ給ふ程よ淨衣の濡て絹も移たるが偏よ色のごとくよみへけるを筑後守貞能是を見答て何とやらんわの淨衣の世よ思しげよ見させし召替さるべくもやとすよ大臣殿さては我所願すでは成就せりあへて改よあかれとて岩田河より熊野へ別して悅の奉幣

を立られける人恠と思へども猶其心の解ざりけり然るよ此公達ほどなく誠の色を若玉へることを不思議され其後大臣幾度となく病よ臥玉よ權現すでは淨納受乃ゆゑと覺され療治を祈禱をし玉のす其比宋より勝れたる名醫渡て本朝よ徘徊と有けり入道殿の折節福原の別業よ坐しけるが越中前司感俊を使者よて小松殿へ遣さるよ所勢いよく大事あるよしは聞ゆ又宋より良醫渡れり幸以彼を召請し醫療を加玉へと有大臣殿扶起され感俊を召對面あり仰下さるよ旨忝畏ていとすべし但し汝能承れ延喜の帝の賢王と稱すれ共異國の相人を都の中へ入られたりし末代治賢王の誤本朝の罪を見たり况や重盛如き凡人が異國の醫師を王城へ入んと全く國の前からすや漢の高祖の三尺の劍を提て天下を治しよ淮南の黥布を討し時流矢よ疵を蒙る后の呂氏良醫迎て見せしむるよ醫が曰此非治するよ難からず但し五十斤の金を與られば療せんよ高祖のいわく我守強かりし程の多くの闘は逢て數疵を蒙けれ共其痛を運既よ盡ぬ命の天よあり扁鵲在とる何の益あらん然ば又金を吝よ似たりとて五十斤の金を醫師よ與あがら遂よ治をせざりき先言耳よあり今以て甘心す重盛荷を卿よ列し三台よ昇其運命天心よあり何ぞ愚き醫療を勞しうせんや所勞若定業たらば醫療も益あからん又非業たらば療治を加す共助るとぞ得べし者婆が醫術を醫して大醫世尊滅度を跋提河の邊よ唱是則定業の愈ざるとを示さんが爲に治するの佛跡を療するの者婆に定業を醫療よ拘らざる豈釋尊此時入滅あらん定業療治するよ堪ざる旨

明けし重盛が身佛鉢あからず名醫又者婆及べからず縦ひ四部の書を鑿て百療は長すと云共争か有侍の穢身を救療せん五經の説を詳よして衆病を愈すと云共豈先世の業病を治せんや若彼醫術に依て存命せば本朝の醫道さきよ似たり醫術効驗あくば面場するよ詮あし就中本朝鼎臣の外相を以て異朝富有の來客よ見んと且の國の恥且の道の陵遲之重盛命の亡ずといふともいかなぞ國の耻を思ひざるべき此由汝よりせと宣ひける盛俊泣々福原へ馳下りしかくくとすければ入道相國國の耻を命よ替て思ふ大臣上古すら聞ずまして末代よ有べくも思はず日本よ相應せぬ大臣おればいかさま今度失られんとて急ぎ都へ登られけり七月廿八日小松殿出家し法名淨運と稱し八月一日臨終正念よ逝し給ふ年四十三いまだ世盛よ見へつるを哀ある次第へ入道相國さしを横紙を破られしも此人座て種々有宣ひつるゆる世の今日迄を穩しかりつ此後天下いか斗のとか出來んと上下歎き惜けり宗盛卿の方様今の世よ參りさんと勇悦合れたり人の親の子を思ふ習の愚あるが先立すら悲きみかしの當家の棟梁當世の賢人心よ忠を存じ詞よ徳あり才藝勝れ文筆麗く士民服し懷き希代の俊傑たれば恩愛の別れ家の衰微悲とも猶餘ありされば世よ良臣を失るを歎き家よ武略の廢んを愁ふ

蘭山按するよ此所熊野詣の downward 公達淨衣ぬれて下の薄色ようつれるが偏よ色のごとくみへて思しさと有此二度めの色の字の黒白の色よわらず素輝よ似たる也喪衣練衣共書和

訓ふぢみろを (世よはや布と云類也) 喪服の 鹿敷細升(世よ誤てさいみと呼)のごとくさ布を裁縫冬の表よ若し夏の熱さよの肌よ是一ツ着するゆる肌身織目よ透うす赤くみゆ是よ似たるを云也又醫道のとを云處よ四部の書とい醫經方家房中家神仙家の書を方伎四家の書と云是也五經の説とい案問禮樞難經金匱要略甲乙經此書共よ説處をいふ(醫家の五經也) 婦女よ解し難からんと思ふまゝ一言を贅す

此大臣の未來のとも悟り給ふよや四月七日の夜の夢よ或瀆路遙と歩行給ふはさよ傍よ大ある花表あり夢の中よ問るよ春日大明神の御鶏栖ごとや人群集の中より太刀の鋒よ法師の首を貫き高く差擧たると見給ひて何者の頸すと問給へば平家太政入道殿の悪行超過し給へるゆる當社大明神の召取せられいとやて覺て夢消ぬ當家の保元平治以降度々朝政を平げ勸賞身よ餘り帝祖太政大臣よ至り一族の昇進六十餘人廿余年が問官加階天下よ肩を比よを無りしよ扱ひ入道殿の悪行増長せらるゆる當家運命の末よ成よこそと思食涙を流さるよ折節妻戸をほどくと敲く者あり大臣何者ぞわれ聞と宣へば瀬尾太郎兼康が今夜余り不思議のとも見ゆてや上ん爲夜の明が暁う覺て參と御前の人を遙よ除られいへとゆる人を除て對面あり大臣御覽ありし夢よ聊差ざる夢語具よやしたりしかば扱ころ兼康の神よ通じたる者かゝとて大臣を深く感じ給ひける其朝嫡子維盛少將院へ參らんとて出立れしを呼止め人の親のかやうやの嗚呼がましけれ共

相國入道  
 積善究く  
 重盛公感夢  
 の圖



世邊の他は勝てみへ給へりあれ少將は酒を過よと宣へ、筑後守貞能の酌を參る直も參らすべき  
 が親より先よいたうべ給ひとて大臣殿三度酌で後少將へ獻れける少將も三度受給ふ時少將も  
 引出ものせよと宣ふ畏て赤地の錦の袋に入たるは太刀を持て参りふり是の當家も傳る小鳥と云  
 太刀やらんと嬉しげに見給ふよ左のさく大臣葬の時用る無文の太刀也其時少將以の外氣色變て  
 みへ給へり大臣涙をのらくと流しそのの貞能傳事からず大臣葬も帶て俸する無文と云太刀也  
 日來の入道殿いかよも成給ひ、重盛佩て供せんと存ひひしが今の重盛入道も先立奉らんとあ  
 らめとは邊へ給也と宣ひける少將左右の唯諾も及で栖居も立入其日の出仕をし給はず引被で  
 居られけり其後大臣熊野へ参下向より日を経ず病付て失給へり實もと思ひ知られけり大臣の豫  
 を滅罪生善の志深う坐れば當來の淨土を歎き六八弘誓の願も推へ東山の麓も四十八間の精舎を  
 建一間も一ツつゝ四十八の燈籠を掛られたれば九品の臺目前も輝き鏡を琢て淨土の砌も臨る  
 如し毎月十四五の兩日大念佛有しかば當家他家の人々の許より眉目よく若く壯きりし女房を請  
 せて一間ふ六人づゝ二百八十人の尼衆と定て彼兩日が間の一心不亂唱名の聲息らす誠も來迎引  
 接の悲願を此所も影向を垂舞取不捨の光を此大臣を照し給ふかと覺たる十五日の月中を結願  
 として大念佛あり大臣殿行道の中も交て西方も向ひ合掌し南無安養世界の教主彌陀善逝三界  
 六道の衆生を普く濟度し給へと回向發願し給へり見る人慈悲心を興し聞者感涙を催しける

れより燈籠の大臣を稱する人多かり其王か微もして後世を弔れりや其徳のれけり吾朝の  
 いかなる大善根を爲置と臣子孫相續重盛の機世を承り弟んと有がた他國にも後世と弔れり  
 て安元の春鏡西より妙典と云船頭を召上せ人を退て對面あり金庄千五百兩召寄て故の聞ゆる大  
 正直の者さればとて五百兩を賜はせ三千兩を抹朝へ渡り一千兩は青王山沙僧は引三千兩は南宋  
 第二世孝宗皇帝へ進らせ田代を青王山へ寄重盛が後世を弔すべしと宣ひける妙典是を賜て萬  
 里の煙派を凌大珠園へ渡り青王山の方丈仰照禪師徳光も逢奉つて此由斯とゆければ隨善感歎し  
 てやかて千兩の青王山の僧は引二千兩の帝へ進せし松殿の存意其具も奏聞せられし帝も感七  
 思され五百兩の田代を青王山へ寄られけるされば日本の大臣平朝臣重盛公後生善所と祈ると今  
 も有とぞ承る入道殿の大臣殿も後れ萬心細くや思れけん福原へ馳下り閉門して坐ける時法皇  
 入幡の御幸あり公卿殿上人もとあり、帝供仰付られ御遊御盃酒おせあつて深更もよび還御な  
 る同さ十一月七日戌の刻ばかりは大地震長久し陰陽頭安部泰親急ぎ内裏へ馳参り今度の地震由  
 文の指所其慎輕からずい當道三經の中も坤儀經の説を考ひ處を得と日を出す以の外火急ま  
 いとして涙を流しければ傳奏の人も色を失ひ君を慮慮を愕し坐し若き公卿殿上人の性からぬ泰親  
 が泣懐かき只今何事の有べきかとて一度も咄と笑ひ合れけるされ共此泰親の晴明五代の苗裔天  
 文の淵源を究め推調掌をあすが如く一事も違ひざりければ指神子とぞゆける雷落かゝると

ありしかども狩衣の袖の焼ながも其身の恙をかりけり上古末代有がたかりし達人は同十四日入道相國數千騎の軍兵を發して都へ入給ふよし聞へしかば何と聞分たる事なげ共浴中膝あへり誰人かす出しけん入道殿朝家を恨奉る旨ありと披露す關白殿を内々聞し召れし旨や有けん參内有りて入道偏基房を亡さん結搦其承る終まいかある要目よか逢ひひかんと奏せられしよ主上足下しからば朕とても同じからんと龍顏身り涙を流し玉ふ載は重盛公過去ありていくばくの日數もなく其肉をいまだひやゝかあるまじき入道殿の狂氣もせられしよやなと眉を蹙る人々多かりけり

平家より關白殿を流罪し公卿殿上人多くの官を削法皇を鳥羽殿へ押籠奉る

同十五日淨海禪門朝家と恨奉る旨必定し聞へしかば法皇大皇太子ひ故少納言信西が子息靜憲法印をば使はて禪門の許へ仰下さるゝ近年朝廷靜みならずして人の心を調ては歎き思召處之足下さて在る萬事頼思召てあるは天下を靜る迄こそ無らめ利敵々ある跡よて朝家を怨奉らるゝと聞し召の何事やと此御説を承て西八條の亭へ行向し入道殿の對面さへさく朝より夕よ及べども無言さればさればこそ無益と思ひ源太夫判官季貞を以て勅定の趣云入させ暇やと出けれは其時入道殿法印を呼とて出られけり還返して坊や承られ淨海が所辭言か先内府身罷と管家の運命を計るゝこそと隨分悲涙を押して過ひし坊が必しも推察われ保元以後亂逆運

綿君安き心をはざりしを入道の唯大方を執行うすまひへ内府ころ身を碎き度ゝの逆麟をば静め進らせし其外臨時の大事朝夕の政務内府種功の功臣の有難う望み爰を以て古を案するゝ唐の太宗の魏徵も後れて悲之餘も昔般の高宗の夢の中は長嗣を得今の朕の憂の後賢臣を失うと碑文を自書其廟も立て悲み玉ひ我朝も間近う見し頼頼民部卿か逝したりしを故院殊更に歎有て八幡の幸行有べかりしを後延引の有て重臣の卒去の代ゝの帝王皆嘆きあるとよひそれゝ内府が中陰も八幡の幸有て御遊宴有るは歎き色の色一事を承いらす縦ひ内府が忠をば思召忘れ玉ふともあどか入道の悲をば憐なくしていへき入道が悲をば憐なくとも内府が忠義いあどか思召忘れさせ玉ふべき父子共は歎慮も背さす今も於て面目を失是れ一ツ次は越前國の子孫も迄御變政有まじきよし後約束して下し玉ひり内府も後て後願て召返されし何等の過怠もていやらん是二ツ次は中納言關のいひし時三位中將頼りも所望いひし入道隨分執事しども遠よ承引なくして關白の息をささる入道いかも非據や行ふ共一度のあどか聞し召入玉ひでいへき位階といひ家嫡といひ理運左右よ及ぶることを引違へさせ玉ふの餘りも本意なきは計いと存る是三ツ次は新大納言成親以下近習の人鹿谷も寄合て謀叛を企しとも全く私の計略もいあらす君許許容あるも依て之事新しきや條もいへども此一門を七代迄いいかぞか思召指させ玉ふべきゝ入道七荀よ及び餘命幾ばくあゝぬ一期の中たも動揺すれはばなるべき結縛は是四ツ此四事を以て

其の平條神續で朝家又召仕下すに有がたや皇の凡等子に後る、木の子は異あらず今  
 體の世の心も實ても何よからせ今いふかあうもあらば有さんと思ひあつてこそ  
 へ、御目録でやなる、法印柿屋も又家もを懸汗水より此時のいがある人を一言の返  
 辭は及がたさぞか其上我身も近習の仕度で鹿谷も寄合れたかしく聞れしか、唯今も其人數  
 としてなや節はれんと思へば龍の鬚を撫虎の尾を踏心地から法印をさる懼もさ人にて些は懸手  
 懸は流す乃御奉公様からす心一借恨せ給う旨其語は但し官位をいひ俸祿をいひ身身も取ての悉  
 く満足すされば功も大あると君常は御成行で仰出さるゝとよ、然るも近臣事を乱君御許容  
 有さずやと謀臣君乃明を暗す凶害はいはん凡耳を信じて自を疑うの俗乃常乃罪也小人乃淨言  
 を垂して朝恩乃地も異あるも今更又君を傾け参らせ給んと冥顯もつけて其恐れ少からず凡  
 天心の蒼々として測がたし救慮定て其儀も等しくいれ下として上は進ふとい豈大臣の禮たら  
 ん哉、伊思唯いへし詮する所此趣をこそ披露仕りいれめとて立れたれば其床も並居給へる人  
 も空怖し入道のいれはを怒給ふも聊憶せず返答せしめれば、法印を譽ぬ人をあかりけ  
 り初立歸り入道相國の旨趣逐一や上げるも法皇も道理至極と思召され重て仰下る旨をさし桐  
 牛共日入道相國日家思食る、處され、關白殿をば、太政大臣以下卿相雲客四十人が官職を止  
 めて追籠たる中にも關白殿殿をば、米等前へ遷じ、鐵西へとを擲ししか、らん世の鬼も角て

有るなどて鳥羽の邊故川と云處よて御出家あり三十五歳とを禮義よ達し、墨を削銀す、初日  
 衣をとり世に惜れ給へり、遠流の人の過よて出家したるを、約束の國への遺さぬ事よて初日、向  
 歸と定められ、是の御出家の間備前の國府の邊いはさまと云、麻置れけり、大臣流罪の例に在  
 大臣會我赤兄、大臣豐成、左大臣魚名、右大臣菅原(北野天神)、左大臣高明、公内大臣藤原伊  
 孫、至るまで其例す、み、人され共攝政關白流罪の例に是を始さ承る、故中殿御子二位中將基  
 通り入道の躰よて、いしは、け、大臣關白よかし奉らる非參議二位中將より、大中納言を経すして  
 本殿攝政よする、是初、管賢寺殿の傍事か、上卿宰相、大外記、太夫史、至まで皆あされ、た、  
 躰よていひける、太政大臣師長公の司を停て、東の方へ流され給ふ、去る保元よ、父悪左府殿の縁座  
 向、公、成、弟、咄、人、流、罪、よて、御、兄、右、大、將、兼、長、左、弟、左、中、將、陸、長、範、長、禪、師、三、人、の、配、所、よ、失、ら、れ、師、長、公、の、土  
 邊の畑よて九年を経られ、長寛二年召返され、本位よ復し、仁安よ、權、大、納、言、よ、ま、で、昇、折、節、大、納、言、明  
 かく員の外よ加ら、大、納、言、六、人、よ、成、と、是、初、也、才、藝、管、絃、の、達、人、よ、太、政、大、臣、迄、よ、至、又、い、流、さ、れ、給  
 せ、い、換、か、る、罪、の、報、ひ、そ、や、保、元、よ、土、佐、治、承、の、今、の、尾、張、國、と、か、や、按、察、使、大、納、言、資、方、卿、子、忠、少、將  
 實、持、孫、右、少、將、雅、友、兼、齋、皇、太、后、宮、權、太、夫、藤、光、殿、右、京、太、夫、高、階、康、經、左、少、辨、藤、基、を、官、を、停、ら、れ、此、内、齋  
 友、資、時、雅、友、人、の、期、日、都、追、出、され、云、界、廣、し、とい、へ、と、五、尺、の、身、置、所、な、し、一、生、程、給、し、とい、へ、其  
 一、日、暮、し、候、な、し、夜、中、九、重、乃、都、を、紛、れ、出、入、重、立、雲、乃、外、へ、懸、か、れ、由、る、後、大、江、山、を、生、野、乃、道、都

ふみ見て丹波國村雲より徘徊しが終に尋出され信濃國へ遷されぬ同廿日法皇は御所法住寺殿へ軍兵を向て四面を打圍ひ平治の信賴卿が三條を仕たりし様は御所は火を掛人々を皆焼亡さんよし聞へしかば局乃女房惟乃女童より至る迄物をたゞ折被す我先は逃出ける前右大將宗盛卿御車を寄て疾召れよと申されしかば法皇驚せ玉ひ成親康賴等が様は遠き國へ遷んとよ更な彦谷あるべし共思召す主上渡せ玉へは政務の口入せし斗こと仰ける宗盛卿泪を流しいかよ去らとひべき暫く世を静ん程鳥羽の北殿へ御幸をなし參せよと父禪門より有はればさらば汝は供仕れと仰けれ共父禪門の氣色を恐れ供よの參られずこれ又付ては兄の内府より殊の外劣りしものかあ一とせをかゝるは目又逢とせ玉うべかりしを内府が身又替制し停てこそ今日迄を必安かりつれ今ハ諫る者のあさとして斯むするやらん行末頼なく思召彦泪よくれば車に乗れけり公卿殿上人一人を供奉せられず北面の下臈と金行と云は力者ばかり隨ひは車の尻より一人參られけり是の法皇の乳人紀伊二位之七條を西へ朱雀を南へ御幸なし奉るゝとや法皇流されさせおとすやとて惟光殿乃心なき迄袖を濡しける去る七日乃夜の大地震も斯る前表と思ひ知られ泰親が考酌中し皆人舌を巻て恐れしとがやかくて法皇鳥羽殿へ御幸の後も御前より一人を候する人あくい放して紛れ入しや大膳大夫信成唯一人ひびしを召て我の近う失れんと思ふ行水あさせくれよと仰あるさぬだは信成の今朝より肝魂も身は添す忙然果たるさまありしが此仰を承り侍衣

の玉簪わけ釜よ水汲入小柴増置ち大床の短柱破かどしては湯仕出て奉る又静憲法印の西八條の亭より到り法皇鳥羽殿へ御幸成て御前より一人もあしと承る彦敏を裝り參りいよいよ入道殿いかと思れけんは坊の通まじき人を疾々として敷されけり法印悦びて急ぎ鳥羽殿へ参り門前まで車より下内へさし入る折節法皇の御經打上り遊さるゝは聲のとよすがら聞へさせ玉よ法印参りたれば御經へ彦泪をばらりとかけさせ玉よ法印此は形勢を見奉り餘の悲しさよ袖よ顔を推當御前へ盡たるゝ尼前よりさるゝの君よの昨日の朝法住寺殿まで供御聞し召れし後の夕べを今朝を聞しめさす長き夜すからば寝あらずは命も既危うみへさせいへとて同く泣れける法印泪を拭ひ何事も限あるものゝ平家世を取て二十餘年今の悪行法は過ぬ頼て亡びいんと天照太神も正入轡も君をばいかで思召放たせ玉よべき中よを君の頼思し召日吉山王七社一乗守護乃彦誓ひ改玉のすの彼法華八軸より立翔りてを守らせ玉よらめされは政務の君は御代とあり凶徒の氷の泡と消失いんづとすされける法皇此詞よ少しの慰せおのしませす主上の關白流され玉ひ臣下多く亡び損ずるとをよかゝは歎有つるよ今又法皇のの様子を聞し召つやゝ供彦を聞し召すは惱とて常は夜の御殿よれみ入せ玉よ后宮を初奉り女房達いかゝあるべし共思し召す法皇鳥羽殿へ御幸の後内裏より臨時の御神事とて清涼殿の石灰の壇まで主上夜毎は伊勢太神宮を御拜むる是の一向法皇伊勢の爲とぞ聞へし二條院の賢王よて渡せ玉ひしか共天子よ父母あしとて常の

院の仰を返させ御座ければや繼跡の君まで坐すされば御譲を請玉ひし六條院を安元二年七月十四日(即ち)十三年三月終に隠させ玉ひしとて又入道の兼て關白殿を院居て今度遠く遷しすされけるが源大夫判官委定攝津判官盛澄は三百餘騎を添河原坂の宿所と追捕せしめらる前關白松殿の侍は江大夫判官遠成と云者あり平家より快からざりしかば六波羅より翻捕るべしと聞き子息江左衛門尉家成を呼我と此處を明け東國へ落下り流人前右兵衛佐願朝を憑んと思へ共是を當時勅勘の身よて我身一ツすら心よ任せずと聞其外日本國平家の主國あらぬ所あしとて通ざらん身を年來仕馴たる處を人よみせんを耻がまし六波羅の使と待請館より火を掛燒立る其煙の下より取て出存分の働して討死せんいかよとやけれの家成は尤もいと一腹し今やと待所へやがて季貞盛澄押寄來關を作るを相圖は河原坂の館所より火の燃上るを見て兵を扣へ見合ある處は折衝風落し來て火の一面は燃上る渦巻煙の下より江父子切て出たるは煙も隔てみへざれば幾人あらんを見定かね六波羅の兵討るゝと數しれず江父子荒増焼たるを見て大音揚いかよ各六波羅へ眠て此跡をすされよ但し入道殿の惡行積で一門悉く亡んぬ遠かるまじを脇見物すべしよ是のみ残り多しと此段をすされよと父子共は腹掻切焔の内は焼死ぬ抑かやうよ人の損亡るといふよと云ふ前大殿のは子三位中將殿と當時關白も成せ玉ふ二位中將殿(基通公入道相國の母)と中納言の關たるを争ひ玉ひし時入道殿の吹擧を嫌れ三位中將殿あられたる此相論

ゆゑと聞へしさらば關白松殿一所のいかなる御目もも遇らる公卿大勢沈淪よ及ぶいかさ  
 入道殿の心よ天魔入替てもあると皆人慄恐けるこよ又故中山中納言願時卿の長男前  
 左少辨行隆と云ふ二條院の辨官ありしが此十餘年の官を停られ夏冬の衣更も及ばず朝暮の  
 餐を稀よて有か無か塞々しく坐けるを入道殿使者を以て急度立寄玉へ合すべし事ありとや  
 送らる行隆は此年來何事よを交ざりしよ何人の讒言して我を失んどのするやと恐騒れ北乃方  
 女房まで喚叫び給へばかのづから出なやみ給ふよ西八條殿より又も使の來るゆゑ此上へ行て  
 ともかくも成さんどて襟よ沈みながら人よ車を假て出られしが思ふよ似ず入道殿早速よ出わ  
 れ傍邊が父の卿より入道大小の事や合せし人なりけり其子息ゆゑ全く疎よ思ひいはず年來籠居  
 あるを痛しう覺れ共法皇は政務の上の力及ず今の出仕われ官途を沙汰ししべしさらば飯られ  
 よとて立入給ふ行隆夢の心地して歸宿われ上下凄ひて死したる人の生返りしのみか思ひよら  
 ざる御仕合なれば悦び泣の最中へ源太夫判官季貞を以て知行し玉ふべき庄園狀共餘多遣され  
 入道殿別の心付よて百匹百兩よ米を積て送られ出仕の料よとて雑色牛飼牛車迄潔氣よ沙汰し送  
 られたれば行隆の手の舞足の踏處も覺すこゝも夢あらんと驚れける同十七日五位の侍中よ補  
 せられ本の如く左少辨よ復し今年五十一なるが俄よ若やぎ唯片時の榮花を到來しぬ抑百行の中  
 よ孝行を本とす明王の孝を以て天下を治といへり唐堯の老衰たる母を貴び虞舜の頑なる父



と説きしを先規の聖主賢王に遺せ給ひ唯主上の法皇の御上を敷せ給ふ敬慮の程をめでた  
 けれ内裏より潜り身羽殿へは消息有てかゝる世は雲共の跡を留て何ぞおしほべきされば寛平の  
 昔をを訪ひ花山の古とも尋て山林漁漁の行者とも成ぬべきと覺ゆよし遊されしを法皇の御返事  
 よもな思召れいひひをさて渡せ給へばこそ一ツの頼めてもいへ跡なく思召成せ何の頼かひべき  
 唯左も右も潜老が成ん様をば置じ果させいへかしと遊されぬ主上御返事を龍顔に當給ひ涙塞  
 ぬさせ給ひす君の頼む水もく船を浮べ水又よく船を覆し臣よく君を保ち臣又よく君を覆す  
 保元平治の比に入道相國君を保奉るといへ共安元治承の今の又君を問し奉る史書の文も違はず大  
 宮の太相國三條内大臣初室大納言中山中納言を失られて今故人の成頼親範ばかりに此人とをか  
 ける世の朝も任へ身を立大中納言を経て何かのせんといまだ壯の身も家を出世を通れ民部卿  
 入道親範の小原の霜も伴ひ宰相入道成頼の高野の霧も交て後世菩提の外なかりけり昔を商山の  
 雲も隠れ頼川の月も心を澄す人もぬりし是皆博覽清濁にして世を通たるふ非ずや中も成頼入  
 道に此後天下は何様のか出来んは親の雲を分ても入山を隔ても登るべけれと云れしとぞ實も  
 必有人跡を留ひべき世とも覺す同廿一日天台座主覺快法親王頻りに辭退有しかば前の座主明  
 雲大僧正還着し給ふ入道殿かくさんくは仕敷されしかども中宮の御女關白殿を婿に萬心安く  
 申されけん政務の一向主上の御計ひたるべしとて福原へ下られける廿三日は宗盛卿参内して右

の旨奏聞せられたりければ主上の法皇の讓ましくたる世されば唯執柄も云合せ宗盛能儀も相  
 計へとて聞召を入給ひさりける法皇の城南の離宮もいて冬も半過させ給へば射山の嵐の音更も  
 烈くて寒庭の月どさやけさ庭よの雪降積れ共跡踏付る人もなく池も氷柱閉重で族居鳥を見へ  
 さりけり大寺の鐘の聲遺愛寺の聞を駭し西山の雪の色香爐峰の望を催す夜霜も寒けき砧の響  
 幽も御枕も傳ひ曉水を輾る車の跡諸の門前も横り巷を過る行人征馬の忙氣あるけしき浮世  
 を渡る有さまも思召知れて哀之宮門を守る蠻夷の夜盡警衛を勤るも先世のいかなる契もて今縁  
 を結ぶらんと仰ありけるが添さ凡物もつれ事も随て御心を偽まめすと云とあし去儘もい彼折々  
 の御遊覽所々のに參詣は賀のめでたかりし事とも思召ゆいけて懷舊の御涙押給ひ難し月去月來  
 て治承も四年も成よけり

主上を降し春宮を踐祚なし奉る高倉宮御謀叛顯れ御所と開せ給ふ

治承四年正月元日法皇の鳥羽殿への相國入道赦さき故年頭の慶賀も參入する人もあし唯故少納  
 言入道信西の子息櫻町中納言重教卿其弟左京大夫長教斗着されて參られける同廿日春宮は袴着  
 きたりばは御懸那給とて目出度共有しが鳥羽殿への耳の餘所はのか聞召のみ也二月廿一日主  
 上異なる御恙も渡らせ給はぬも御位を押降し奉り春宮踐祚あり皆是大政入道我儘の致所也(主  
 上は八十代高倉院法皇第三の皇子よておしけり扱春宮とやは八十一代の帝安徳天皇の比と也)

三種の神器を渡し奉り上達部陣も集て故事共先例も任せ行れしと左大臣殿陣も出ては讓位の事共仰せしを聞意ある人々の涙を流し情を傷めざるのよし御自分より御位を儲君も譲りましと麻姑射の山の中も開ふあらしかばあせ思召方々だも哀の多き習そかし況や是の御心からずも押下されさせ給へる御心の内中をあかしく思召り傳れる御寶物共品々司々請て新帝の皇居五條内裏へ渡り奉る閑院殿より火の影幽く雜人の聲を留り瀧口の文籍も絶よししかば故き人々のかゝる日出度祀の中も今更哀は覺て涙を流し袂を濡さぬばかりありけり新帝今年三歳ありけり讓位いつしかありと誰が傾けすべき異國より周の城王三歳晋の穆帝二我朝より近衛院三歳六條院二歳皆是襦袢も包れて衣帯を正しうし給ひざりしか共或は攝政負て位も即奉り或は母后抱て朝も臨給へり就中後漢の孝章皇帝の生れて百日も踐祚あり先蹤和漢かくのごとしと申されしかは有職の人々穴飾しものあやされされは其等の能例共がやとつふまき合れける入道殿夫婦の外祖父母へとて准三后の宣旨を蒙り年官年爵を給て上日の者を召仕ひ繪書花つけたる者共出入て偏り院宮のおとく也當三月上旬上皇(高倉院也)安藝の嚴島へ御幸の御催し有帝王位をすべらせ給ひ諸社の御幸始り入幡賀茂春日定例也白河院の熊野今の法皇の日吉玉山たりし此度の上皇は思召有彼神の平家崇敬他も異あれば表も平家御同心法皇何となく押籠られ御座れば入道相

國の心をも初けん為裏より深き御立願も有らんと推量奉らる然るは山門の大衆玉城の地邊を越ては我山へこと御幸なるべき其儀からば神興を振下し奉りて御幸を遮り留んと憤り聞くと入道殿職て種が宜ふゆを漸々大衆静り同十七日御幸御門出よて先相國の北の方二位殿の宿所八條大宮へ御立寄翌日入道の亭より入其日の暮方宗盛卿を召れ此次明日鳥羽殿へ參法皇の御見參も入ばやと思ふ禪門も知せずの懸からんやと仰ければ何條の事かゆべきと奏せらるさらば故今夜參て佛案内中置よとて翌るを待せ給ふは十九日大宮大納言隆季卿まだ夜深きより參て御幸を催さる三月も半過ぬれと霞も曇る在明の月の猶朧くまだ明果やらす鳥羽殿へ入せ給ふは人稀よしで木關く物秋けなる御住居先哀より思召るは春已も暮んど夏木立をわらし梢も殘んの花の色も衰て宮の驚聲恨り去年の正月六日朝觀の爲法住寺殿へ行幸ありしもの樂屋も亂聲を奏し諸卿列よ立て諸御陣を引院司の公卿參向と慢門を開き掃部寮縁道を布匡かりし儀式一事もなし櫻町重敷卿參て御氣色申されければ法皇とや寢殿の橋陰の間へ御幸成て待參せ給ふ上皇の今年二十明方の月の光も榮させ給ひて玉臍もいと美しうみへさせ給ふは母堂故建春門院もいたう似まのらせ給ひたりしかば法皇の先故女院の事より思召出ては涙留がね給ふ兩院の御座近く飾られたは此間の御問答の人承るも及ばず御前より尼前のみよて長久しうは言談おのし日長く暇させ鳥羽の津より御乗船法皇の離宮故亭幽閑寂寞の御栖居御心苦しう御覽じ置せ給へば法皇の上

皇乃旅泊行宮の波の上船の中の伊有さま覺東あく思召やり給ふ誠よ都の宗廟を閉れ遙く安藝國  
迄の御幸をば神明なきか納受のあかるべき御願成就疑なしとみへよける同廿六殿島へ着御入道  
相國最愛の内侍が宿所を皇居よあし中二日御逗留經會舞樂行れ結願の導師よ公顯僧正高座よ上  
れ鐘打鳴し表白の詞よ九重の都を出させ給ひ八重の湖路を分遙くと是迄參らせ給ひたる御志の  
忝さよと高らかよすされしかば君を臣も感涙を催されける諸末社皆は幸なり大宮より五町  
手り山を廻らせ給ひ瀧の宮へ參らせ給ふ公顯僧正一首を拜殿の柱よ貼して

雲井より落くる瀧の白いとよ契りを結ぶとぞうれしき

神供佐伯景廣加階從上の五位國司藤原有綱品上られて從下の四品あらびよ院の殿上を赦さる座  
主尊永法眼よあさる神慮を動さ入道相國の心を和ぎ給ひあんとみへし同廿九日還御のは船飾て  
推出す處よ折節波風烈しけをば漕戻させ殿島の内蟻浦よ留らせ給ふ大明神のは名殘惜よ歌仕れ  
人よと上皇の仰あれは隆房少將

立歸る名殘もありの浦なれば神を恵みをかくるしら波

夜半よ風静りければ船出させ備後國瀬波の泊よ着せ給ふ此處の去る應保の比一院（其比鳥羽  
の法臺を一院崇徳院のは事を新院とよ保元よ新院の談岐へ移され給へり）御幸の時國司藤原爲  
成が造たる御所のありしを入道殿は設よ飾られぬさは共上皇それへ入給はず今日卯月朔日

衣更といふとの有すかしとて各都のを宣ひ出詠やり給う岸よ色深き藤の松枝よ咲かゝりける  
を上皇歡覽ありあの花折せよと仰ければ大宮太納言隆季卿承つて左史生中原康定が梯船よ乗て  
折節は前を漕通しを召て折よ遣す頓て松の枝あがらよ參らせされば心ばせ有と御感此花よて歌  
在れと仰ければ隆季大納言

千とせへん君が船よ藤波の松の枝よるかゝりぬるかあ

二日ハ備前の兒島よ着給ひ五日ハ播磨國山田の浦是よりのは興よ召福原へ入給六日所ハ歴覽  
池中納言頼盛卿の山庄荒田迄は覽せられ七日ハ福原を立せ給ふとて入道の家の賞を行る入道相  
國の養子丹波守清國正下の四位入道の孫越前少將ハ四位の從上とて聞へし其日寺井よ着せ給ひ  
八日ハ比迎の公卿殿上人鳥羽の草津迄參られ還御の鳥羽殿へハ御幸あく直よ相國の西八條の亭  
よ入せ給う同廿二日新帝御即位大極殿よて行るべきよ齋よ炎上の後造り出されざる故太政官の  
應よて行るべきかと公卿僉議ありしよ九條殿の仰よそれハ凡人の家よ取らば公文所跡の所也紫  
宸殿を然るべしとありしゆる紫宸殿よて御即位ある去し康保四年冷泉院紫宸殿よてありしハ主  
上涉邪氣よて大極殿への行幸叶ざりし御故之後三條院延久の佳例よ任せ太政官の應よて行るべ  
き物をと入よ合れけれ共九條殿の計のせ給う上の左右よ及ず春宮踐祚ありしかば中宮の弘徽  
殿より仁壽殿へ遷り給ひやがて高砂座へ參らせ給う平家の人よ曾出仕せられける其中よ小松殿

の公難の去年大臣薨せられ色もて籠居せられけり(此色と云の素禪之)藏人左衛門權佐定長今度の即位は違亂なく目出度儀を厚紙十枚斗よ書て二位殿(相國の北の方)へ參せられ(袋を合て)悦ぶかやうな花やか目出度事共有しかども世間の猶よがくしうぐみへけれ其比一院(後白河法皇の御事)第二の皇子茂仁親王と申しの御母の加賀大納言秀成卿の女之三條高倉よ坐けれ(高倉宮と云稱しける去し永萬元年十一月十五日曉は年十五よて恐びつゝ近衛河原の大宮の御所よて密に御衣服ありの手跡履しう遊し勝才覺も勝て坐しけれ(太子よを立位よも即せ給うべかりし)共故建春門院の御猶よ依て押籠られさせ給ひけり花の下の春の遊よの紫毫を揮て手自作を書月の秋の宴よの玉笛を吹て自ら雅音を操給ふかくして明し暮させ給う程よ治承四年よの三年三十よからせ給う其比近衛河原よ侍のれける源三位頼政入道或夜密に此宮の御所よ參り(やまらるゝの君の天照大神以來相承正統神武天皇より七十八代ふ當せ給う然れば太子よも立位よを即せ給うべかりし)方(の)三十迄宮よて渡らせ給うと(心)憂との思召れい(の)や(早)御謀叛を起させ給ひ(平)家を亡し(法)皇の鳥羽殿よ押籠られせし(ま)す(勝)憤りを(休)め(奉)らん(君)も(御)位よ(即)給ひ(の)は(孝)行(是)よ(過)るとい(の)ん(や)も(し)思(召)立(せ)られ(バ)令(旨)を(下)し(給)ん(悦)び(を)あ(し)て(馳)參(する)源氏(共)國(多)く(い)の(ん)と(才)續(く)先(京)都(よ)の(出)羽(前)司(光)信(が)子(共)伊(賀)守(光)基(出)羽(判)官(光)長(出)羽(藏)人(光)重(出)羽(冠)者(光)能(熊)野(よ)の(故)六(條)判(官)が(末)子(十)郎(義)盛(と)て(隠)れて(は)攝(津)國(よ)の(多)田(藏)人(行)綱(い)得(共)是(の)新(大)納(言)成(親)謀(叛)よ(同)心(し)か(ら)還(忠)した(る)不(當)人(よ)て(い)へ(バ)ヤ(よ)及(ば)ず(去)な(が)ら(多)田(次)郎(朝)實(手)鳥(冠)者(高)頼(太)田(太)郎(頼)基(河)内(國)よ(の)石(川)郡(を)知(行)し(ける)權(頭)入(道)義(基)子(息)石(川)判(官)代(義)兼(大)和(國)よ(の)宇(野)七(郎)親(治)が(子)と(も)太(郎)有(治)次(郎)清(治)三(郎)成(治)四(郎)義(治)近(江)國(よ)の)山(本)柏(木)錦(織)美(濃)尾(張)よ(の)山(田)次(郎)重(廣)河(邊)太(郎)重(直)泉(太)郎)重(光)浦(野)四(郎)重(遠)安(食)次(郎)重(頼)其(子)太(郎)重(資)木(太)三(郎)重(長)開(田)判(官)代(重)國(矢)鳥(先生)重(高)其(子)太(郎)重(行)甲(斐)國(よ)の)逸(見)冠(者)義(清)其(子)太(郎)清(光)武(田)太(郎)信(義)加(美)次(郎)遠(光)同(小)次(郎)長(清)一(條)次(郎)忠(頼)板(垣)三(郎)兼(信)逸(見)兵(衛)有(義)武(田)五(郎)信(光)安(田)三(郎)義(定)信(濃)よ(の)大(内)太(郎)維(義)岡(田)冠(者)親(義)年(賀)冠(者)盛(義)其(子)四(郎)義(信)故(帶)刀(先)生(義)賢(が)次(男)木(曾)冠(者)義(仲)伊(豆)國(よ)の)流(入)前(右)兵(衛)佐(頼)朝(常)陸(國)よ(の)信(太)三(郎)先(生)義(教)佐(竹)冠(者)正(義)其(子)太(郎)忠(義)三(郎)義(宗)四(郎)高(義)五(郎)義(季)陸(奥)國(よ)の)故(左)馬(頭)義(朝)が(末)子(九)郎(義)經(是)皆(六)孫(王)の)苗(裔)多(田)新(發)意(滿)仲(が)後(胤)あり(朝)敵(を)平(げ)宿(望)と(還)ると(の)源(平)勝(劣)か(し)か(ども)今(の)雲(泥)交(り)を(隔)て(主)從(の)禮(よ)も(猶)劣(れ)り(國)の)國(司)よ(隨)ひ(庄)の)預(り)所(よ)召(使)れ(公)事(雜)事(も)駈(立)られ(て)安(心)を(し)い(の)す(情)當(世)の)跡(を)見(い)よ(上)よ(の)隨(ひ)たる)機(を)共(内)々(の)一(向)平(家)を(猜)ぬ(者)の)い(べ)き(君)も(し)思(召)立(せ)給(ひ)て)令(旨)を(給)つ(る)程(あ)ら(バ)國(々)の)源(氏)共(夜)を(日)よ(續)で(も)馳(上)り(平)家(を)亡(さ)ん(よ)時(日)を(廻)ら(ず)べ(か)ら(ず)其(儀)よ(て)い(の)入(道)を(年)寄(て)こ(そ)い(へ)若(し)子(共)餘(多)い(へ)引(具)して(参)り(い)べ(し)と(才)され(ける)宮(の)此(と)い(か)あ(ら)ん(と)思(し)召(煩)の)も(給)ひ(て)暫(く)承(引)も(あ)かり(け



源三位入道  
高倉守平  
御奉圖

刀和



るがこゝも阿古丸大納言宗通卿の孫備後前司季通が子も少納言維長とすの勝れたる相人ゆゑ相  
 少納言と人々やける此宮を見参らせて位も即せ給ふべき事相申します相構て天下の事を思召捨  
 ちとやされける折節三位入道かやう勸められしよと天照太神の御告もやとて薙々と思召立せ  
 給ひ先新宮十郎義盛を召て藏人よきされ行家と改名し令旨の使も東國へ下されける四月廿八  
 日都を立て近江國より始美濃尾張の源氏共も次第も觸下るほど五月十日より伊豆の北條蛭が  
 小島も着て流人前右兵衛佐殿も令旨を取出し渡し夫より信太三郎先生義教の兄され給んとて  
 信太の浮嶋へ下り又木曾冠者義仲の甥され取せんとして山陽道へ趣けるこゝも熊野の別當湛増  
 の平家重恩の身なりしが何としてか聞出しけん新宮十郎義盛も高倉宮の令旨を給て既も謀叛  
 を起すされ那智新宮の者共の定て源氏の方人をぞせん湛増の平家の恩深き身のいかでか背奉  
 るべき矢一筋射かけて後都へ仔細を申さんとて混甲一千餘人新宮の邊へ發向す新宮鳥井法眼高  
 坊法眼侍より宇井鈴木水屋龜甲那智より執行法眼以下都合其勢千五百餘人闘を作り矢合して源  
 氏方より兎こそ射れ平家方より角こそ射れとて互も矢叫の聲退轉もあく鏑の鳴止間をさく三日  
 が程戦ければ覺への法眼湛増の家の子郎等多く手負我身も手負辛き命生泣々本宮へ歸上りける  
 時鳥羽殿もて帥の馳しう走り騷とあり五月十二日午の刻斗より帥時も暨り法皇甚性せ給ひ近  
 江守仲兼其時鶴藏人よていひしをい前も召安倍素親が許へ行吃と勘へさせ勘状を取て参れと仰

ける仲兼急ぎ走到て傳説の旨を傳へければ頼て勘文を奉る仲兼是を取て鳥羽殿へ入んとするよ  
 日もいたう晩じたれば守護の武士共敵さず勝手知り知つ築地を超大床の下を這て湯前の切板より  
 素親が勘状を参らせぬ是を敵覽あるよ今三日が内の事歡あらびも多敷とぞ勘へ申たる法皇此有  
 きまよも悦もあるよや又いかある目よか逢て歎くらんと仰ける同十三日宗盛卿は父入道殿  
 の前よわいして法皇の湯上をいたう哀ふやされければ漸も思ひ直され法皇も鳥羽殿より出し都  
 へ還御なし奉り八條鳥丸美福門院の御所へ入すさる今三日が内の事悦とい是ならんかゝる所も  
 熊野別當湛増が飛脚到着して高倉宮御謀叛のよし都へ注進申も依て右大將宗盛卿大も騷れ其節  
 入道殿の福原もわいしけるよ此よしやされしかば入道殿大も怒て其儀あらば高倉宮を擲捕て土  
 佐の畑へ遷すべしと宣ひたり上卿より三條大納言實房卿職事より頭辨光雅とぞ聞へし武士より  
 源太夫判官兼綱出羽判官光長混甲三百餘騎宮の御所へぞ向ひける此兼綱も三位入道の次男なる  
 を此人數も入たる宮の御謀叛を三位入道勸めやとを平家もいまだ知らざりしゆゑに  
 長谷部信連剛勇の働高倉宮園城寺入御衆徒を頼給ふ

去程も宮の五月十五夜の月を眺め何の御心あくわいせし所三位入道の使者忙しげも来て文を差  
 上る宮の御乳母子六條亮大夫宗信請取て差上るを宮披見給ふも御謀叛顯れ土佐の畑へ遷し参ら  
 すべしとて官人共別當宣を承て御迎も参り急ぎ三井寺へ御披さいべし入道も頼て参り候はん

有宮の此事いかにせんと思し煩せ給ふ處も宮の侍長兵衛尉長谷部信連御身近くいひしが女房の  
 裝束も出立せ給ひ落させ給へど此義尤もして御髪と亂り重ねたる御衣も市女笠を召れ六條宗  
 信傘持て御供仕も鶴丸と云々重袋も物入れて戴たり青侍が女を向へて行儀も出立せ給ひて高倉  
 を北へ落させ給ふも大きな溝の有けるをいと物輕ふ越させ給へば遠行人が立留てとしておの  
 女房の溝の越やうやとて怪け見とめたるゆゑいと足早も過させ給ふ御處の御留守も信連  
 を置れけるが女房達少々坐けるを彼爰へ立忍ばせ見ぐるしさものおど取認んとみるも秘藏の  
 りし小枝と云は笛を枕元も取隠れさせ給へるを穴あさましとて五町程走り進らせければ  
 宮御は悦有て我死ば此笛を棺も納よと仰ける頼ては所へ歸らんとせしは御供仕れと仰ければ信  
 連上るやう官人共は迎へ参らん一人をいひさらん無下も口惜く存ひ其上御所も信連が  
 上下皆知る事いひを大逃たりと云れん口惜く弓矢取身の儀も名こそ惜ういへ一方打  
 破らば頼て参りいひんとて唯一人取てかへす信連其夜の裝束も薄青の狩衣の下に萌黄匂の腹  
 帯を着て衛府の太刀を帯たりける子の刻ばかり三百五十餘騎の官軍宮の御所へ押詰たり源大夫  
 判官の存る旨有と覺へ遙の門外も扣へたり出羽判官光長の乗ながら門の内へ打入庭も扣大音聲  
 も宮の御謀叛露させ給ふも依ては迎へ参りては疾く出いへとすければ信連大床も立て宮の  
 物箱も御所も坐させし何事を子細をすさればと云ければ出羽判官何方へか渡らせ給ふべき

其義さらば下都共参りて搜し奉れとすけるを信連重て物を覺ぬ官人共のや様か赤馬も乗あから  
 門内へ参だも奇怪あるも剩へ下部共搜し奉れとい争かやう長兵衛尉長谷部信連侍を近居て過す  
 るとす申ける應の下部の中も金武と云大力の者打物の鞘を外し信連も目を掛て大床の上へ飛上  
 る是を見て同隸共十四五人ぞ續たる信連これを見て狩衣の帯紐引切て弄衛府の太刀をから身を  
 ひ心得て作らせしを抜合せ徹々取けるが信連も斬立られ嵐も散木の葉の如く庭へ颯と下たりけ  
 る十五夜の月雲間より顯れ清明あるも敵は無業共こゝかしこも追つめく切伏けるをいか小宣  
 旨の使者をバ角のすると云ければ宣旨とい何ぞとて大刀曲めバ踊退て踏直しくよき者十四  
 五人討取其後太刀の鋒三寸餘り打折たり腹を切んと腰を搜せども鞘巻落て有りければ力及ず  
 大手を掲げ高倉表の小門より踊出んとする處ろも大長刀持たる男一人寄達たり信連長刀も乘ん  
 と飛で掛るが乗損じ股を纏て覆れ大勢取籠たるゆゑ空しく生捕とありぬ其後御所中も亂入て搜  
 せども宮の渡せ給はず信連斗擲て六波羅へ引立歸りける次第一々聞給ひて宗盛卿大床も立て  
 信連を引居させ汝宣旨の使者と名乗を宣旨とい何ぞとて切たりけるが其上廳の下部共多く殺害  
 せしよ此者能く糺問して子細具よし其後河原も引て首を刎よと宣ひける信連大鷹の剛の者も  
 て居直りてからくと打笑ひ此程の高倉の御所を夜も物窺ひいを何條とのいへきと思ひ慢て用  
 心を仕ぬ處も夜半ばかり小燈たる者共二三百打入いを何者ぞと尋いへば宣旨の使者とすの當時

諸國の強盜共或が公達の入せたるぞ或の宣旨の使ぞと名乗らずと豫承ては程は宣旨の何ぞとて切以信連物の具をも思様も仕り鍛能大刀をも持てしり、唯守の官人共よも一人安穩よての歸ししに其上宮の御在所の更も存せず縦ひ知りしとて侍のすまじと存切たるとの何様糺尚有とてやべき様おしと其後の物も言ず在ければ並居たる平家の侍共哀れ剛の者や是等こそ一人當千の兵とも云べけれと口よすけるも或人各の知ずや先年大番衆の留難あぐみたりし強盜六人を唯一人追駈二條堀川よて四人切伏二人生捕て引來ぬ其賞もなされたりし左兵衛尉がかし可惜男の斬れんとの無慚さよと惜あへり入道殿いか、思ひけんさらば斬あどて伯耆の日野へ流されける平家滅び源氏の世となりし時東へ下り梶原平三景時よ就て事の根元一とすければ鎌倉殿神妙と御威有て能登國よて恩地を給りける去程よ宮の高倉を北へ近衛を東へ賀茂川を涉り如意嶽よ入給う住者清見原天皇大友皇子よ襲れ吉野山へ入給うは處女の姿を假せ給ひしよ違はず知ぬ山路を遙く分給へば何習しのゆとささま、御足より出る血しは沙を染て紅を殘し夏卿の茂きを踏ひらめ曉方三井寺よ到着かひさき珍命の惜さよ衆徒を頼て入御行しと仰ければ衆徒大は悦び畏て法輪院よ御所を飾ひかたのおとく、痛勞帥やたり翌れ十六日京中より此と隠れかく騷動斜ちり、抑頼政入道年比日比よ似もつかね謀叛を起されしゆもいかある故と尋れ平家の次男宗盛卿不思識の所行せられしよ根させり源三位入道の嫡子伊豆守仲綱名たる長馬を持

て秘藏あり鹿毛よて乗走必ひげ無双の逸物名を水下と呼れける宗盛卿使者を立て聞ゆる名馬を尋て見ゆやと遣さる伊豆守返辭よ仰下さる、馬の此はど餘りよ乗疲しゆへば聊慙せんとして田舎へ遣預じゆと然バ力及ずとて沙汰あかりしが平家の侍共其馬こそ一昨日送ゆひし昨日見かけゆ今朝も庭乗しゆつおと口々よすける宗盛卿さては吝惜よこと悪しとて侍を馳交あとして一時が間よ五六度乞れける父三位是を聞たとひ金を以て丸めたる馬之共それ程人の望んよ高べきかの其馬速よ六波羅へ遣せとすさる、ゆゑ伊豆守力及ず一首の歌を書添て六波羅へ遣ひしける

戀しくの來ても見よかし身よ添る影をばいか、放ちやるべき

宗盛卿歌の返事をバ玄給いで哀れ馬や馬の誠よ好馬よありけるされとも餘りよ吝するが惜さよ主が名乗を鐵燒よせよとて仲綱と云金燒をして馬屋よ立られ客人來て聞へば名馬を見ゆいばやとすければ其仲綱めよ鞍置引出せのれうてとれなど、宣ひける伊豆守此由傳へ聞身よ代て思ふ馬あれ共權威よ付て取るよさへあるよ、剩天下の笑れ種よなるこそ易からねと大は憤ければ父三位も大は怒何條とかあらんと思慢、左様の舉動あると覺ふ其義からバ命生て何かせん便宜を伺ひ事を計んといわれしが私よの思ひを立れず高倉宮を勤めすせしと後々よ聞へける是よ付ても天下の八々小松殿の事を忍びすせし也或時小松殿參内の原中宮の地方へ參せ給ふよ八尺計を



る蛇指貫の左の袖に這廻りけるを重盛騒が女房達も中宮迄も驚せ給へんと左の手は尾と押右の手は頭を取て直衣の袖の内へ引入ついで六位やい〜と呼れける伊豆守仲綱其時はまだ衛府の藏人よて仲綱と名乗て参りたれば此蛇を給ね給て弓場殿を経て殿上の小庭より出御倉の小倉人を招き是給へれと云ければ大は頭を捨て逃去ぬ伊豆守力及我郎等競を召て捨しめけり其朝小松殿より好馬を鞍置て伊豆守の許へ遣すとて昨日の振舞優は艶しくいひつれば是の馬は夕及で陣外より傾城の許へも通れん時用らるべしと申越る伊豆守大臣より賜ふとゆゑ馬悉く弱りいぬさて昨日の伊振舞の還城樂は似ていひしと申答ける小松殿のかやうは優なる例も多かりし其弟よて宗盛卿の人の借む馬を強よ乞取のみならず天下の大事を引出さるゝ方角も同く十六日夜も入て入道頼政嫡子伊豆守仲綱次男源大夫判官兼經六條藏人仲家其子藏人太郎仲光以下三百餘騎隨は火をかけやきあけて三井寺へまゐられける當家年來の侍らひは渡邊源三競漣口と云者馳後れ留たるを六波羅へ召て汝の相傳の主三位入道が供をさせでちど留りしと宣へば競畏て自來の自然のともいひい眞先かけて命を奉らんとよと存せしが今度の如何いひしやかやうとを知らせりつる間留ていと申宗盛卿先途後樂を存じ當家よ就て奉公せんや又頼政頼政法師も同心せんと思ふや有のまゝよ申せと宣ひける競涙をばら〜と流し縦ひ相傳のよしみい共朝敵とある人も同心すべし共存せし願くは殿中よ奉公を遠度いへと申大將さらば

奉公せよ頼政法師が仕けん思ひの些とも劣るまじきぞとて入給ひぬ朝より夕べ迄意なく相詰けるよふたゝ宗盛卿立出給ふ競申の誠や三位入道の三井寺の聞へい定て夜討せんぞをや向られいぬ入道の一類渡邊黨扱ひ三井寺法師よていはいはん必憎くもいえず能向て擇討ををいたし奉公始は覽よ入いこんさる馬持ていひしを此はを親き奴めよ盜てい馬一匹下し預りいゝやと申ければ大將をのつとをさるべしとて白草毛なる煖延とて秘藏ありしよ能鞍置て競よ給ふ宿所よ歸り妻子共をば彼奴よ忍ばせて狂紋の狩衣菊とち大さらかよしたるよ重代の警備緋威の鎧着て星白の甲乃緒を縮い加物作の太刀を帶二十四指たる大中黒の矢と負漣口の骨法忌とや鷹の羽を作たり的矢一手を差添滋藤の弓持て煖延よ打乗々替一騎打具し舎人男も持楯脇せ我家よ火をかけ焼上て三井寺へこそ馳たりけれ六波羅よの競か家より火出たりと聞ければ宗盛卿立出競のあるか侍いすと申奴めを手に延よして竊れぬるい移れ垣壁て討と宣へ共彼の大剛の矢續早の手垂れば二十四指たる矢よ先二十四人の射殺されん音あせそとて進者あかりける三井寺よてハ渡邊黨寄合ていかよをして競漣口をば召具せられんと口々よ申ける三位入道競が心を能知て申るゝの無下よ捕擲られをせし入道よ志深き者あれば今参らんぞと言の下よつゝと参りたり競申の伊豆守殿の木下が代よ六波羅の煖延を取てい参らせいはんとて奉る伊豆守限なく悦びやがて尾籠を切金焼として其夜六波羅へ遣し夜斗半よ門の内へ追入たり願て底よ入て馬共と囁

逃げれば其時舍人櫻煖延が参ていと中宗盛卿急ぎ出見給ふ昔の煖延今の平宗盛入道と云金焼  
 をこそ仕たりけれ大將悪き競め切て捨べかりしを今度三井寺へ寄ん人々いかよして競めを擒  
 よせよ録めて頸を斬んよと既上り怒られしが煖延の尾髪を生ず鐵燒を又失ざりけり去程よ  
 三井寺よ大衆僉議しけるの抑世上の禮を案するよ王法佛法共衰微して緇徒といへ共一日片時  
 安住の思ひあし今宮の入御あること神月の冥助佛陀の加護と覺ふ今相國入道を戒ずんバ殆佛法  
 へ滅却すべし北嶺南都を誦らひ一味同心して平氏を傾くべしと衆議決しければ先比叡山延曆寺  
 へ王子入御の由をすて台宗一圖の好身を以て力を戮されいへと牒狀遣しける山門披見て評定し  
 けるが其文章よ山門よ三井寺の門跡ニツよ分るといへども學處の圓頓一味の教門なれば鳥の  
 左右の翅よ等く車の二輪よ似たり一方闕るとも互の歎くと書るを難じて三井寺の當山の末寺よ  
 有ながら鳥の翅車の輪よ譬押へて書條奇怪ことと返牒よ及す其上相國入道座主明雲僧正よ衆  
 徒を諍られべきよし宣ひ其上相國の謀よ近江米二万石北國の織延絹三千匹を寄是を谷々嶺々へ  
 引けるさて三井寺より南都興福寺への狀よの宮の入は傍頼は付身命と抛て御奉公を遂んと  
 すれば無勢よして一時滅亡せんとす願く内よの佛法の破滅を助け外よの惡逆乃仲類を退治し  
 一身同心の功を成賜れと申遣しける興福寺よの大衆評定して是の互の事よとて多分の承知すれ  
 共大勢のよゆえ決着得明す三井寺よの宮入せ給てより大關小關堀切て堅固よ備へ山門の心替り

しつ南都のいまだ参らず延々よの成がたしいざや今夜六波羅へ夜討せん先老少を二手よ分老僧  
 共の如意が嶺より搦手へ向ふべし白川の在家よ火を掛燒立ば在京人六波羅の武士はや事出来  
 ぬとして馳向ん其時岩坂櫻本の邊よ暫し聞へ防ぎ戰ん間よ大手の松坂より伊豆守大將よて若大衆  
 惡僧共六波羅よ押寄風上よ火を放て一揉よもみ貫んよあどか大政入道燒出して討ざるべきと僉  
 議する處よ平家の所をなす一如坊阿闍梨真海の弟子同宿數十人引具しかくする平家の方人と  
 も思われん一向其儀よわらず衆徒の名をも思ひ當山の名をも惜まこそ言を出すなれ今源氏の  
 運傾き平家よ麻ぬ草木をなきよ小勢を以て取掛んの容易よの叶ひがたし能々籌を巡し勢を催て  
 の上根を固てこそ思ふ儘よを打勝べけれと程を延さん爲長々と演けるよ兼田坊阿闍梨慶秀の衣  
 の下よ萌黄句の腹巻し大太刀を帯白柄の長刀を杖よつき長僉議の無用之證據の外よ引べからず  
 先我寺の本願天武天皇春宮の御時大友皇子よ襲れ芳野の奥を出大和國宇多郡と過玉うよの其勢  
 且づか十七騎され共伊賀伊勢よ打越美濃尾張の軍兵を以大友を亡し終よ位よ即玉う窮鳥懐よ  
 入時の刺翅人もこれを哀む自餘のしらす慶秀が門徒よ於て今夜六波羅へ押寄て討死せよやと  
 云程よ是よ屬され大勢我をく同腹す先搦手よ向ふ老僧の大將軍よ源三位入道頼政乘圓房  
 阿闍梨慶秀律成坊阿闍梨日胤帥法印禪智其弟子義實禪永先として其勢一千餘人手々よ續松を  
 振て如意が峯へ向ひける大手の大將軍よの嫡子伊豆守仲綱次男源太夫判官兼綱六條藏人仲家其

子藏人太郎仲光大衆の圓満院太輔源覺律成坊伊賀公法輪院鬼佐渡成喜院荒土佐是等の法師の  
 弓箭打物の達者飽まで剛力鬼も神も後を見せざる一人當千の面々也平等院の因幡堅者荒  
 大夫角六郎房島阿闍梨筒井法師卿阿闍梨惡少納言北院の金光院六天狗式部太輔能登加賀佐渡  
 備後等也松井備後澄南院筑後加屋筑前大矢俊長五智院但馬慶秀が房人六十人の内加賀光乘刑  
 部春秀法師原の一來法師堂衆の筒井淨妙明秀小藏尊月尊永慈慶樂住鐵琴玄永武士の渡  
 邊省播摩次郎授薩摩兵衛長七唱競漣口右馬允與源太清渡邊勤(以上の渡邊の一黨也)を先として  
 都合其勢一千五百餘三井寺をこぞ打立けれ寺の宮入御の後搔楯かき逆范木引たれば堀は橋渡  
 し逆茂木取除などして時刻推移て關路の鶏鳴あへり伊豆守爰まで鳥鳴て六波羅への白晝は到  
 るべしいかんがせん云時圓満院太輔源覺又進み出昔孟嘗君の客鶏の聲をなして函谷關を欺  
 き通りし例もあり是を敵の謀めて啼すをわらん唯寄よやとひた押は行程は五月の短夜天明々  
 々とありければ伊豆守仲綱夜討とこそ期したるを晝軍よていかで叶ふべきわれ呼返せやと大手  
 の松坂より取てかへし搦手の如意が峯より引返す若大衆惡僧共是の一如房が長僉議よこそ夜の  
 明たれ其坊切とて推寄の坊を散々亂妨す防ぐ處の弟子同宿皆討れ我身も手負遣々六波羅よ  
 奉て此由訴へかけれ共六波羅の軍兵數万馳集て些とも騒ぐ氣色なし去程は宮の南都の未參  
 らず此寺斗よていいかよを叶べからずと評議ある處へ南都より漸返狀來て予越る趣き一

山願承すといへども敵在の者も有て出勢の少く延引すべし近き驪參らんとす來る然れば此方  
 より入御あるべしとして同二十三日曉三井寺と出させ給ふ此時老僧の皆涉暇給て止められ若大衆  
 惡僧を具せられ南都へ落させ給ふ三位入道同一族渡邊黨まで其勢一千五百餘人の乘圓坊慶秀鳩  
 の杖は絶御前は參双眼は涙と浮べ老僧何國までも涉供と存すれ共年既八旬は越行歩を叶がた  
 くいへば腹心の弟子刑部房俊秀を進せしは是の一とせ平治の合戦は故左典麻義朝が手も侍ふて  
 六條河原に討死仕りいひし相摸國の住人山内須藤刑部丞俊通が子よてい聊所縁のいへ懐よ  
 しおはし立弟子よいたしは心は底迄よく知てい何處迄を召具せられいへとて涙をおさへて  
 留りけり宮を哀も思召何の好身よのかく迄申らん志の程こそ忝なけれとて御涙よく給ひける  
 宮の夫より馬よて打せ給へば各隨ひ奉る扱又此宮蟬折小枝とて名笛二管持給へり蟬折の鳥  
 羽院の御時宋の帝を贈り奉りし漢竹よて生たる蟬の如く節の附たる三井寺の大進僧正覺宗よ  
 仰せ壇上よ立七日の加持有て彫せ給ふ或時高松中納言實平卿此笛を吹れ尋常の笛のおとく思ひ  
 忘れ膝より下よ置れしかば笛や尤けん蟬折よけりさてこそ蟬折と召れける此宮堪能のゆゑは相  
 傳ましませり今の限とや思召けん金堂の彌勒は籠裏らせ給ひしかとや此宮宇治と寺との間よて  
 六度迄涉落馬ありしみる涉寝あらざりしゆゑとぞ宇治橋三間引弛し平等院は入れ奉り休  
 息ありし六波羅のすいや宮こそ南都へ落させ給ふあれ追かけて討奉れとて大將軍の左兵

衛督知盛頭中將重衡薩摩守忠度侍大將より上總守忠清其子上總太郎判官忠綱飛騨守景家其子飛  
 彈太郎判官景高高橋判官長綱河内判官秀國武藏三郎左衛門有國越中治郎兵衛盛綱上總五郎兵衛  
 忠光惡七兵衛景清を先として都合其勢二萬八千餘騎木幡山を打越て宇治橋の詰を押し寄たり敵  
 平等院よとみてけれバ闘を作ると三箇度之宮の四方より同じう闘を合せたる先陣が橋を引た  
 るを過すなどよみけれ共後陣是を聞つけず我先よと進むほど先陣二百餘騎身方は推落され  
 水も溺れ矢よけりさるほどは兩方の橋の詰を打立て矢合せす宮の四方より大矢俊長五智院但馬  
 渡邊省授く頼源太が射ける矢を楯も堪ず鎧かけず透りけり源三位入道の今日を最期と思  
 れけん長絹の鎧直垂と科皮威(是古武州品川にて制する所と云)の鎧着て態と胃をバ着給はず嫡  
 子伊豆守仲綱の赤地の錦の直垂も黒糸威の鎧之弓をつよく引ん爲是も兜の着ざりけり爰も五智  
 院但馬大長刀を提唯一人進ける平家よ是を見射取やとてさんぐよ射るを但馬少を騒す揚る矢  
 の潜り降る矢をバ跳り越向て来るの長刀よて切て落す敵跡方ひとしく見物せしが矢切の但馬と  
 のいれけるまた堂衆の中も筒井淨妙明秀の黒草の鎧も五枚甲の緒を詰黒漆の太刀を帶大長刀  
 を提是をひとしくすみ來りしが敵合遠さゆゑ長刀を捨弓よ矢を番へ矢庭も敵十二人を射取十  
 一人も手負せ箠も唯一筋残りける又も長刀取上橋桁をさらりと渡りけるが長刀よて向ふ敵五  
 人獲伏六人の敵も逢長刀中より打折て捨太刀引抜て戦ひけるが敵八人切伏たる内兜の鉢も嚴し

く打當目貫元より折て河へ落ける故頼處の腰刀よて死狂も働さける乘圓房慶秀が召仕ける一來  
 法師と云剛の者後よつくとみへしが橋桁狹淨妙前も在て通り難さま御免いへとて淨妙が兜  
 の鍔よ手を於てひらりと肩を跳越て戦ひけるが多く敵を討取其身を討死し淨妙房を引取平等院  
 の芝の上も物の具脱で休ながら矢目を算れば六十三裏搔矢五所淨妙を手本として三井寺の大衆  
 源三位入道の一類渡邊黨走り續く橋の行桁を渡り火花と散し戦ふたり平家の侍大將上總守忠  
 清大將知盛の前も參られ御覽いへ橋の上の戦火出るばかり手痛くみへい今ハ川を渡すべく存い  
 が折節五月雨の比水益つていへ馬人多く亡びいあん淀一口へや向ふべき河内路へや廻りい  
 んやとやけれバ下野國住人足利又六郎忠綱生年十七歳なるが進み出目よかゝる敵を討すして  
 宮を南都へ入參らせバ吉野戸津川の勢共馳集て彌御大事よてい川を隔たる軍も淵瀬を厭ひいへ  
 きや武藏上野の境なる利根川をさへ新田入道ハ渡しいも此川早さ深さ利根川程も有べからず  
 某こそ先陣を渡しいんとしてまの先も打入つつけや殿原と呼れバ大胡大室深須山上那波太郎佐  
 貫廣綱四郎太夫小野寺禪師邊屋子四郎郎等よハ宇夫方次郎切生六郎田中宗太を始として三百餘  
 騎を續ける足利又太郎大音聲も弱き馬をバ下手も立よ強き馬ハ上手もなせ馬の足の及ぶはどの  
 手綱を呉て歩せよ撥バかい繰泳せよ下う者をバ弓の餌も取付せよ手よ手を取組肩を並て渡すべ  
 し馬の頭沈まバ引上よ痛う引て引被る鞍蓋も能乗定つて鎧を強う踏水溜ハ三頭の上も乗掛れ河

中より引射る共相引す亦常より鏝を傾よ痛う傾天邊射する馬より弱う水より強う中るべし  
 曲尺より渡して推落さるる水よりしなうと渡せやと掟をあし三百餘騎一人を流さず向の岸より颯とぞ  
 打上たる足利の朽葉の綾の直垂より赤草威の鎧着て高角得たる兜の緒を縮金作の太刀を帯切符  
 の矢より滋藤の弓を持並毛なる馬より金覆輪の鞍置てぞ乗たりけるが踏踏張立あがり大音揚昔朝敵  
 將門を亡ぼし勳賞蒙り名を後代より上たりし田原秀郷二十代の後胤下野國住人足利太郎俊綱が一  
 子又太郎田原忠綱生年十七歳無位無官の身よて宮へ矢を放つ天より恐れ共冥加の程に平家の  
 上よこを留りいひめ三位入道の方より我と思ん人々寄合やと平等院の門内へ馳入て戦ひけり大將  
 軍知盛を見給ひ渡せやと下知有る二万八千餘騎皆打入れたればさばかり早き宇治川より馬入  
 めせかれ水は上よど堪ける雜人原の馬の下手より取付く曳々聲よて押渡る伊賀伊勢の官兵ら馬  
 被押破られて六百餘騎流されたり萌齋緋威紫小櫻色の甲冑沈ぬ洶れける神南備山の紅葉  
 下の嵐より誘れて龍田の川の秋の暮堰より掛りて流れを敢ぬ異あらず中より緋威の鎧武者三人  
 綱代よかゝりたるを見て伊豆守

伊勢武者のみを緋威の甲着て宇治の綱代よかゝりぬる哉

三位頼政入道父子自害高倉宮は最期三井寺炎上

平家の軍勢平等院の門内へ攻入戦う其間より宮を南都へ先立せ參らせ渡邊黨三井寺の大衆残り留

り防矢を射けり三位入道の七十餘つて弓手の膝口を射させ痛手あれば心静し自害せんと平等  
 院の内へ引退く處より敵襲ひ境れば次男源太夫判官兼綱父を延さん爲返し合く防ぎ戦う上總太  
 郎判官が射ける矢より源太夫判官内甲を射せ疼處より上總守が郎等次郎丸と云剛の者押さらべ無手  
 と組でせうと落源太夫剛力勝りけん次郎丸を押し頭を搔たる所へ平家の兵共浴合て兼綱を討て  
 けり伊豆守を散々や戦ひ痛手餘多負て平等院の釣殿よて自害せしが其首をば下河邊藤三郎清親  
 取て大床の下へ投入ける六條藏人仲家其子藏人太郎仲光さんよ戦ひ一所で打死しげり此仲  
 家の故帯刀先生義賢が嫡子に父討を孤ありしを三位入道養子として不便せられしかば日來の思  
 議を報んどや一所より死しぞ痛しと三位入道西より向ひ手を合せ高聲よ十念唱へ芝の上より陣扇を置  
 其上より座し

埋木の花咲ともあかりし身のあるはてぞ哀なりける

と詠長七唱のさ介錯せよとて太刀先を腹より突立られしかば唱首打て石を縊つけ宇治川の深き處  
 より沈めけり平家の侍共競瀬口をば生捕よせよと目を配れば競も心得や有けん目覺しき働し敵餘  
 多討取亂軍の中より腹切て失けり圓満院太輔源覺の遙より宮を延させ給ふらんとて宇治川へ飛入物  
 の具一ツも失はず水底を潜り向の岸より上り三井寺へ歸ける飛彈守景家の古き兵よて宮の南都へ  
 落させ玉ふらんと四五百騎鞭鐙を合せ追奉る宮より三十騎斗よて落給ふ處を光明山の鳥居の前より

て馳付奉り雨の如く射かけるゆゑ誰が矢とをしらす宮の左の御側腹に立ければ御馬より落給ひ御頸を取れさせ給ふ鬼佐渡荒土佐荒太夫刑部俊秀今何の爲に命と客んとて散々を戦ひ同じ枕に討死す其中御乳母子六條亮大夫宗信の新野が池へ飛込藻草顔に被覆ひ慄居たるは敵の前を打送りぬ長有て官軍四五百騎さゝめき歸りし途中淨衣若たる死人の頸もなきを藪の本よりかき出せしをみれば宮までおしける死あは棺へ入よと宣ひし小枝と云名笛を御腰に差おしけり宗信の走り出取付奉らばやと思へ共怖しき其を協す敵退て池より這上り濡たる物絞着て凄々都へ上りしを惡ぬ者もなかりける去程は南都の大衆七千餘人宮の御迎へ参ける先陣は木津と進み後陣は興福寺南の大門口に屯りたるは宮のとや討れ給ふと聞て大衆力及ず涙を押して止りたり今五十町ばかり延給ひ今日討れ給ふまじき御運の程を方見ければ平家の人々宮井三位入道の一類渡邊黨三井寺の大衆共五百餘人の首を切太刀長刀の鋒は貫夕方六波羅へ歸り入源三位の首のしれず子共の首の皆尋出されぬ宮のいほ子餘多かへす八條女院は侍れし伊豫守教盛が娘三位局とやける女房の腹は七歳の若君五歳の姫君は座けり入道相國若宮を請取んとやさるゝを女院いろゝと歎き給ふ故宗盛卿達て申請れ仁和寺の御室の弟子とあし給ひ後東寺の一の長者安井宮大僧正道尊とやの是に奈良よを一方座せしが乳母讚岐守重秀が妻重秀より御出家よあし北國へ落下りしを木曾義仲上洛の時主よし進らせんと還俗させ奉りて都より上しは是

之後の嵯峨の邊野依よかひしける普通乗と云し相入宇治殿二條殿を君三代の關白と各後年八十と相せしよ違ふ又聖德太子の崇峻天皇横死の相有とや給ひしが馬子大臣は弒され給ふ相少納言宮を相せし不變の萬葉前代よ及ざるものと評せられぬされば此度宮の謀叛を討討し勸賞実行れ前右大將宗盛卿の子息侍從清宗三位は叙し今年十二歳まで三位侍從と稱し忽ち上達部よ昇給ふ源茂仁并三位入道頼政父子追討の賞と聞書よ有ける正しき太上法皇の王子を射奉るだよわるを剩へ凡人よあし奉るぞ淺ましき源茂仁といひ此高倉宮のほとと仰頼政の攝津守頼光は五代頼綱が孫兵庫頭仲正が子に保元の合戦先を越たりしが共させる賞よを興ず又平治の亂よを親類を捨て参じたりしが恩賞疎かりき大内守護は年久しうありしか共昇殿を許されず年關齡傾て後述懐れ和歌

人しれぬ大内山の山守の木陰てのみ月と見るかあ

是よ依て昇殿を敷され正四位下まで有しが猶三位を心がけつゝ

上るべき便あき身の木の下よしぬと拾ひて世を渡るかあ

推よ四位をそへし也さてこそ三位よ成たりけれ頼て入道して今年ハ七十五之此人高名多き中よ殊よ仁平の比近衛院在位よあたつて夜々却させ給ふとあり大法秘法を修せられけるを驗あくは惱ハ丑の刻ばかりあるが東三條の杜の方より黒雲一叢來り殿の上よ覆へば必隠れさせ

給ひけり公卿會議有寛治の比堀川院は在位よかゝることありしが將軍義家朝臣南殿の大床よ侍ひ三度鳴弦し前陸奥守源義家と名乗たりしよ悩息せ玉ひしとかや此例よ依て武士を召るべしとて源平兩家を撰給ひ此頼政を出されぬ其時の兵庫頭なりし遠勅の族を退治せん武士の勤かれ共變化を靜んとい承り及ざる處されども勅宣さればとて參内郎等遠江國の住人猪早太は母衣の風切作たる矢を負せ其身の二重の狩衣よ山鳥の尾よて作たる尖矢二筋滋藤の弓よ取添南殿の大床よ伺候しめ詰たるよ黒く緩く雲來たりは殿をまけばすの悩と立騒頼政しかとみれば雲中よ怪さるのあり射損せば世よのあらじと觀念し矢を番へ八幡大神を心中よ祈請響て兵ど放て手答して破と中り墮るもの有猪早太走來り取て押短刀を以て柄を擧も遁れよと續さま九刀刺たり變化を仕留ていと呼れば上下手々よ火を燃して見給ふよ頭は猿驅の狸尾は蛇手足の虎鳴聲驚ふ似たりける主上御威の餘り獅子王と云御劍を下さる宇治左大臣殿是を取次奉り頼政よ賜んと階を半下させ給ふ折ふ去卯月十日餘り雲井よ郭公二聲三聲音信通りけるを左大臣殿郭公名とも雲井よわぐるかか」と仰かけられしよ頼政左乃袖を播げ入がての月を少し傍目よかけつゝ、

弓より月のいるよまかせて」とつけて御劍を給りて出頼政の武藝よ限す歌道も又勝れたりと賞斷せられたり又應保の比二條院は在位よ薰と云化鳥禁中よ鳴て屢々宸襟を惱し奉るとわ

り然ハ先例よ任せ頼政を召れける比の五月十日餘未霽よ雨一陣強只一聲音信て二聲とも鳴ざりけり目刺をしらぬ聞かれバ姿形をみへざるゆる矢壹何とも定め難頼政響よ先大鋪矢打番ひ一聲聞へし内裏の上射上たり鶴此音ふ駭き虚空よ暫うひらめいたる次よ小鋪取て番ひいふつと射切て空と並て前よを落したる禁中さよめき渡て頼政よ御衣を被させ給ふ大炊御門右大臣公能公取次奉り頼政よ被させ給ふとて昔の養由の雲の外よ鷹を射き今の頼政の雨の中よ鶴を射たりとや感せらる

「早月聞名をあらとせる今宵かか」と仰かけられければ頼政

たそがれさきもすぎぬとおをふよ」と仕り御衣を肩よ掛能出らる其後伊豆國を賜り子息仲綱受領よあり我身三位して丹波五箇庄若狭の東宮河を知行あしさておとすべかりし人のよしなき謀叛を起し宮を失ひ參らせ其身も子孫を亡び果ぬるぞとかあき日來の山門の大衆猥かましき訴仕るよ今度いいかい思ひけん穩便を存じ音をせす然るを南都三井寺同心して宮の御謀敷よ荷擔せしは是以て朝敵に此上の奈良を寺をも攻らるべしと聞へしが先三井寺をとて同き五月廿七日大將軍よの左兵衛督知盛副將軍よの薩摩守忠度都合其勢一萬餘騎園城寺へ發向す寺よも大衆一千餘人宵の緒を締搔楯かき逆茂木引て待かけたり卯刻より軍擧り一日戰暮し夜よ入ければ大衆以下法師ばらよ至る迄三百餘人討れぬ夜軍よあり聞さの暗し官軍寺中よ攻入て火を

放ち焼る處本覺院成喜院真如院花園院大寶院清瀧院普賢堂教待和尚の本坊本尊八間四面の大講堂鐘樓經藏灌頂堂護法善神社壇新熊野の寶殿都て堂舎塔廟六百三十七宇大津の在家一千八百五十三宇からび智證の渡されし一切經七千餘卷佛像二千餘體忽ち煙とありしこそ淺猿けれ諸天五妙の樂も此時永く尽龍神三熱の苦みを彌盛んあるらんとぞみへしこれ三井寺の近江の義大領が私の寺たりしを天武天皇に寄奉りては願とあす本佛も彼帝の御本尊然るを生前の彌勒と聞へし教待和尚百六十年行ふと大師に附屬し給へり親史多天上摩尼寶殿より天降はるか龍華下生の曉を待せ給ふとこそ聞つるよこのゆかよしつる事共ぞや大師此處を傳法灌頂の靈跡として井花水三ツを結び給ひしゆゑ三井寺とい名付たり(本名園城)かゝる目出たき聖迹あれども其顯密を須臾も亡び伽藍更も礎のみ残り三密道場をきけれハ鈴の聲も聞へず一夏の花をきけれハ閑伽の音もせざりけり宿老碩徳の名師の行學も怠り受法相承の弟子の經教も別れたり寺の長吏圓慶法親王の天王寺の別當をも留られ給ふ其外僧綱十三人閑官せられて皆檢非違使に預けらる堂衆の筒井淨妙明秀に至るまで二十餘人流されけりかゝる天下の亂れ國土の騒ぎ唯事とを覺す平家の世の末と成ぬる先表やらんと人みなやける

高倉宮茂仁親王とい以仁の取違ふや高倉院の皇子守貞親王(持明院宮後太上天皇)の御子  
を茂仁とす八十五代の帝堀河院是之高倉宮又甥のは續よて後大伯父の後諱と同じく附

給ひんやうあるべくも思はず平家物語のまゝをしるして愚案をこゝよ述  
都を福原へ遷す頼朝卿東國へ旅を揚る文覺上人荒行

治承四年六月三日福原へ行幸あるべしと聞ゆ此日來都遷有べしと聞へしかども忽今明の程との思ひざりしものとして京中の上下騒わへり三日と定られしが今日縮て二日とありぬ幼帝今年三歳何のほ心をなく多興よ召れ御同興も母后參り給ふべきよ其義あくる乳母帥亮殿ばかり添給ふ中宮一院上皇を御幸攝政殿太政大臣以下卿相雲客我をくんと供奉せらる平家より太政入道清盛公始一門の人々皆參らる三日は福原へ入御之入道殿の弟池中納言頼盛卿の山莊皇居もある同日頼盛家の賞として正二位に叙せらる九條殿のほ息右大將良通加階超られさせ給ひけり法皇の先比鳥羽の北殿より都へ還御奉りしが高倉宮の謀叛も依て入道殿大に怒り福原も於て四面端板して口一方のみ明たる三問の板屋を作り押籠奉り守護の武士より原田太夫種直許を候ける容易人の參り通ふ様もあさましく童あどの籠のほ所と稱す聞を忌々敷淺猿かりしと共法皇今の世の政や知し召べやとの露を思召よらず只山々寺々修行しては心のまゝ慰ばやと仰ける平家の惡行も於ては悉く極ぬ去る安元以來多くの大臣公卿或は流しあるひは失ひ關白を流して我聲を關白よあし法皇を押籠奉り第二の皇子高倉の宮を討奉り其若宮の或は出家或は北國に落下り影さへ潜させ給ふ儲又都遷のとい先蹤あさましく非ず神武天皇の天神地神十二代のは跡も受百玉の



帝祖は坐すが辛酉歳日向國宮崎郡よて皇王の寶祚を繼五十九年己未十月東征して豐葦原中津國より留り此比大和國と名付たる畝傍の山よ帝都を建榎原の地と切拂て宮室を造り玉ふ是を榎原の宮と名付たり夫より代々の帝王都を他國他所へ遷さるゝと四十度近し景行天皇迄十二代の都は遷されて和州の内ありし成務天皇元年近江國志賀郡よ都を建仲哀天皇の長門國豐浦郡神功皇后女帝あがも鬼界高麗契丹迄攻從へ此女帝の後大和國よ遷仁德天皇の攝津國難波よ遷高津の宮(當時のかうづと訓)履中天皇の又大和國反正天皇河内國允恭天皇の又大和國かく代々都を遷され元明天皇より光仁天皇迄七代の奈良の都に桓武天皇延暦三年十月三日奈良の京春日里より山城國長岡よ遷て同十年同國葛野郡宇多村の左青龍右白虎前朱雀後玄武の四神よ相應すれば帝都よ最上の地とて同十三年十一月廿一日長岡の京より此京よ遷し玉ひ帝王の三十二代星霜の三百八十餘歳往古以來かゝる帝都の地あしとして土よて八尺の人形を作り鐵の甲冑を着せ同弓矢を持せ末代迄此京を他國へ移すとあらば勳すまじき守護神とあらんと誓ひ東山の峯よ西向よ立て埋られけるされば天下よ事出來とき此塚必ず鳴動す將軍塚とて今もあり既よ治承二年六月廿三日鳴動すると良久し其年安徳天皇御誕生是清盛入道外祖として大悪とあすを告ものよや扱帝城を平安城と名付るのたいらかよやすきみやこと云義之尤平家よの崇むべき都ぞかし其故に桓武天皇の平家の彙祖よて伊豫先祖の君さまで執し思召つる都をさせる事もあく他處へ

遷されしの本心の所爲よあらず一とせ嵯峨帝の御時平城の先帝の内侍の勸よ依て既よ都を他國よ遷さんと有しか共大臣公卿諸國の人民背きやしかば移されず止よき一天萬乘の主さへ遷し得給ぬぬ都を入道相國人臣れ身として遷されけるが淺猿き書都の守護の鎮守四方よ光を和らげ鹽麩殊勝の寺々へ上下よ薨をあらべたり百姓の煩ひあく五畿七道を使ありされども今ハ辻々堀切て車の行通ひを容易からず逆逆車を用るも小車よて道を経て通路す軒を争ひし人の住居日を経つゝ荒行家々の加茂川桂川よ毀入筏小組浮べ資財雜具船よ積福原へ運び下す唯成よ花の洛夷中よあるを悲しき何者の所爲よや有けん舊き都の内裏の柱よ二首の歌をぞ書付ける

百とせよ四回までよ過來よし愛宕の里の荒やはてあん  
咲出る花の都を振すて、風ふく原の末ぞあやうき

同六月九日新都の事始有べしとて上卿の徳大寺左大將實定卿土御門宰相中將通親卿奉行の辨よハ前左少將行隆多くの官人共召具し常國和多の松原西の野を點じて九城の地を割られけるよ一條より下五條までハ其所有て其より下ハなかりけり行事官歸り參此由を奏聞すさらば播磨の印南野か猶攝津國の昆陽野かあんど、公卿詮議有しか共事行べしとをみへざりけり舊都の既ようかれぬ新都のいまだこと行ず人々身を浮雲の思ひをあし本此所よ住者の地を失て愁今遷る人々の土木の煩ひを歎きあへり總て唯夢の機ありしと共ハ通親卿よされけるハ異朝よハ三條の廣路

を開きて十二の洞門を立とみへたり況や五條迄あらん都もあどか内裡の立ざるべき且内裡を造らるべしと僉議有て五條大納言國綱卿臨時又周防國を給りて造進せらるべきよし入道殿計ひやされけり此卿の大福長者よておはすれば内裏造り出さんと左右よ及べぬをいかなが國の費民の煩あかるべき誠まはさし當つたる天下の大事大常會をどの行るべきを聞てかゝる世の亂遷都造内裏少を相應せず古の賢き後代より内裏も茨を背軒をたよも調べき煙の乏を見給ふ時限り有貢物をを許されきこれ則民を惠み國を扶け給ふも依て之楚章花臺を建て黎民索け秦阿房殿を超て天下亂るといへり茅茨剪す采椽削す舟車飾す衣服文無しし世を有しと聞唐の太宗驪山宮を作り民の費を憚られしやつひも臨幸なく瓦は松生垣は蔦茂て止し是らの事との表裏の所行かると人いへり六月九日新都の事肇八月十日棟上十一月十三日遷幸淺猿と思ふ夏もくれ秋を漸半は成行ば福原新都の人々名所の月みんとて或は源氏の大将の昔の跡を忍び須摩より明石の浦つたひ淡路の洋を押渡り繪島が磯の月を眺めるひは白浦吹上和歌の浦住吉難波高砂尾上の月の曙を詠て歸る人もあり舊都も残る人々の伏見廣澤の月をみる中も徳大寺實定卿の舊き都の月を戀つゝ八月十日餘り福原より予上り給ふ何事もみな替り果稀も残る家の門前草深く庭上露滋し蓬が柳淺茅が原鳥の臥所と蕪荒蟲の聲々怨つゝ黃菊紫蘭の野邊とぞ成よける今故郷の名残とて近衛河原の大宮ばかりを坐ける大将其御所へ参り先隨身を以て總門を敲せらるれば内より

女の聲よて誰や蓬生の露打拂ふ人もなき所よと咎ければ是は福原より大将殿の傍上りいとやす左侍の總門の鑰鎖さへれて東乃小門を入せ給へとて爰より参られける大宮の徒然も昔をや思ひ出されけん南面の傍格子開て琵琶を遊されける處へ大将つと参られしかば琵琶聞せ給ひ夢か現か是へくと仰ける源氏宇治の巻よの優婆塞宮の娘秋の名残を惜つゝ琵琶を調て終宵心を澄し給ひしは在明の月の出けるを猶堪ずや覺しけん撥みて招き給ひけんを今こそ思し召しられけれ侍宵の小侍従とや女房も此御所よぞ侍れける此女房を侍宵と召るゝとある時侍宵歸る朝いづれか哀れ増れると仰ければ彼女房侍宵のふけ行鐘の聲聞ひ歸るわしたの鳥のをのかい」とやたりしより侍宵と召れし大將此女房を呼出て昔今の物語し小夜もや深行は舊都の荒行を今様よこそ歌れけれ舊き都を來てみれば淺茅が原ぞと荒よける月の光の隈あくて秋風のみ身よ入と推返く三返歌ひ澄されけれバ大宮を御奉り御所中の女房達皆袖を濡されけるさるはせよ夜を漸明行バ大将を暇すて福原へ歸らるゝ供よい藏人を召て侍従が餘り名殘惜げよみへつるよ汝歸つて左も右も謂て來よと宣ふよ予藏人走り歸り是は大将殿のやせといとて物かと君がいひけん鳥の音の今朝しをまどか悲しかるらん

女房取あへず

待てこそ深く鐘もつらからめ歸る朝の鳥の音ぞうき

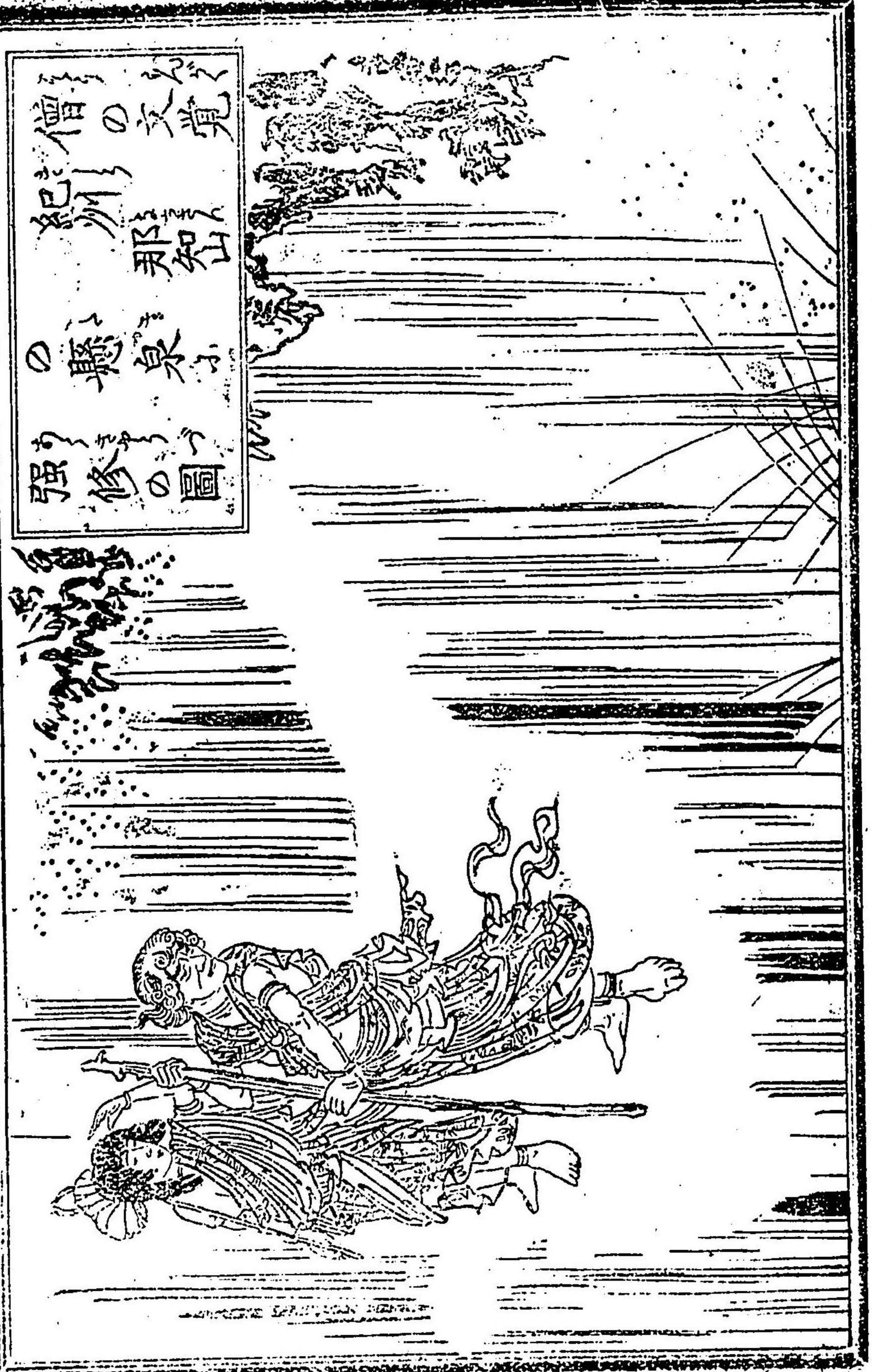
藏人走り付て此由たりけれバ扱こそ汝を遺したれとて大將大さ感せられけりそれより物  
かの藏人との召れけるさても平家都を福原へ移されて後何となく常は心噪し夜々夢見悪く  
異柱共多かりける或夜入道の臥給ひける處一間は蟠る程の面出来て覗ける入道些とを騒す礎と  
睨て坐ければ唯消失ぬ岡の御所とすの新しう造出されたりけれバ然るべき大木おどりかかりし  
或夜大木の倒るゝ音して人あらば二三千人が聲して虚空は咄と笑へりいかさまを是の天狗  
の所為もやとて晝五十八夜百人の番衆を揃へ蓋目の番と名付曇目を射させられけるは天狗の  
在方へ向て射たると覺しき時の音もせずさき方へ射たる時の咄と笑ふ或朝入道殿帳臺より出て  
妻戸を押開壺の内を見給へバ枯鬚共が幾等と云敷をしらす壺の内は充滿上あるは下より下  
あるの上より中あるは端へ轉び出端あるの中へ覆入轉合覆除がら先さあへり入道相國人や  
在と召るゝは折節人を參らす斯して多くの鬮共が一ツは固塊合壺の内は幅る程は成高は四五  
丈をあらんと覺ゆる山のごとくは成ふけり頓て一ツの大頭と變じ生たる人の眼の様は大の眼が  
千萬出来て入道相國を急度白眼暫し瞬もせず入道少を騒す睨て立れけれバ露霜を日乾か  
るゝ如くおのづから消て跡もなし又入道殿一の庇を立合人数多附朝夕撫飼れける馬の尾は一夜  
び中は鼠巢をくひ子を産たり是只事あらす御占あるべしとて神祇館よして御占あり重き御儀

と占ひや此馬の相換國の住人大庭三郎景親が東八箇國一の馬とて入道殿へ參らせし黒と馬の額  
少し白かりしかバ望月とぞいれける陰陽頭安倍泰親賜つてけり昔天智天皇の御宇寮の馬の  
尾は鼠一夜の中は鼠を結子を生たりけるは異國の凶賊蜂起したりと云日本紀よみへし之又  
源中納言雅頼卿の青侍が夢の殿島明神此日來平家の預り奉る節刀を召返し給へバ八幡太神伊  
豆國の流人前右兵衛佐頼朝を召て彼節刀を渡し給ふと醒て後此を語る程は入道殿復聞れ雅頼  
卿へ使者を立夢見たる青侍を暫し給りけり直に委しう尋はんとす來る青侍悲かりきんと  
や思ひけん忽ち逐電す其後雅頼卿入道の許に至て全くさるをいひや國屋の浮言よみへんと陳じ  
ゆさおしかバ其後い沙汰をさかりけりそれよ又何より不思議なるは入道殿いまだ安藝守たりし  
時殿島大明神靈夢の告有て幻を隠りし銀の蛭巻したるは長刀常は枕を放す立置をしが或位俄  
は失ふける平家日來の朝家の邸壁よて天下を守護せしか共今の天下涉幼主といひ勅命と云をの  
ひ皆入道殿乃心より出れバ只權門は媚諂ふ族こそ尊信すれ其佗は眞實は服せざるものも多  
成行ける爰は又前右兵衛佐頼朝卿伊豆の蛭が小島に流さる伊東入道祐親の預りたりしが其後北  
條四郎時政の方よ移て月日を過さるゝ内時政の女政子と密に語はれしを時政のえらす顔よ透  
けるが此節の源家譜代の者共爰彼所志を通じけるよど終に謀叛を起されしは三浦大助平義明  
が子と三百餘騎よて源氏方とあるゆゑ平家は従ひし面々追々加り増忽ち白旗を東國に立られ

たりすの大事よとて平家は従ふ大庭島山梶原の面々福原へ注進し頼朝卿を討んとて湯井小坪の浦よて戦ふ程に島山敗軍して武藏國へ引退ししが不日一族を催し河越稻毛小山田葛西荏戸惣とて七黨乃兵共悉く起り其勢二千餘騎三浦衣笠城を押し寄一日一夜攻しほと大助竟に討れけり時よ一百六歳ありし子共の皆九里濱の浦より船よて安房上總へ落行たり平家の人々の都遷の事今更興醒める處東國乃注進し愕入斗也若き殿上人の此度の我討手よ向ふ杯いふぞはかき島山庄司重能小山田別當有重宇都宮左衛門朝綱など大番役は當りて在京したるが島山アけるの親しう成ていければ北條のまりいはず自餘の輩いよも朝敵の方人の仕味の唯今聞し召直さんずる物をとすければ寶をとり人もありいや、唯今大事よ及いんと叫く族も有しあり入道殿怒罵て抑此頼朝の去る平治元年十二月父義朝が謀叛に依て既誅せらるべきを故池禪尼の強ちよ歎き宣ふ間流罪よの宥られたるよ其思を忘れ當家よ向て弓箭よ及ぶ様やある其儀あらば神明三寶を争赦し給ふべき今よ天の責を蒙る頼朝かちと宣ひける抑我朝は朝敵の始りの昔日本磯余尊の御宇四年紀州名草郡高雄村よ一ツの蜘蛛あり身短く手脚長く力人は勝れ百姓多く損害せられしかば官軍馳向ひ宣旨を讀掛葛の網を結で是を掩ひ殺すそれより以來野心を挿で朝威を滅さんとする輩大石山丸大山王子山田石河守望大臣曾我入鹿大友真鳥文屋宮田丸桶逸成永上河次伊與親王太宰少貳藤原廣嗣惠美押勝早良太子井上廣公藤原仲成平將門藤原純友安倍貞任宗

任兄弟前對馬守義親惡左府惡右衛門督よ至迄其例既よ廿余人され共一人として素懷を遂る者なし皆鬣を山野よ曝し首を獄門よ掛らる此世こそ王位も無下よ輕けれ昔の宣旨を向て讀ければ枯たる草木を忽ち花咲實生飛鳥を隨ひき近比のどろかし延喜の帝神泉苑へ行幸有池の汀に鷺の居たりけるを六位を召わの鷺捕て參れと勅有ければいかんがとらるべきとの思へ共繪言されば歩み向ふ鷺羽繕して立んとす宣旨がと仰すれば平んで飛去す即取て進せたりければ汝が宣旨も隨ひて參りたるぞ神妙なる五位よ成とて鷺を五位よあされ今日より後鷺の中の王たるべしと云ゆ札を自遊し頼よ付て了放たせ給ふ全くこれの鷺の餌料よあらず唯王威の程を知し召んが爲ありとかや扱も頼朝卿生年十四歳の時永曆元年三月廿日よ伊豆へ流され二十餘年の春秋を送り向うる身の今年何とて謀叛を起されしと云よ高雄の文覺上人の勸よ依て文覺の渡邊遠藤左近將監茂遠が子よ遠藤武者盛遠とて上西門院の衆よ十九の年道心を發し修行よ出んとしけるが先機てみんと六月の照日草も搖ぬよ或片山里の藪の中へ入裸躰よあり仰よ臥たるよ蚊此蟻蟻あどひと身よ取付て刺喰するを些とも身を勸す七日迄起も揚らず八日目よ起上り修行と云ひ此位のとよをあらんと覺悟し夫より熊野の那智籠せんものと先行の試よ聞ゆる瀧よ打れみんとて瀧本へ參たるよ十二月十日餘のと故雪積り永柱閉谷の小川よ音もせず峯の嵐吹凍瀧の白糸垂氷と成て墮下れり文覺瀧壺よ下混り頸際迄漬て慈悲の咒を唱つ、兩三日有しが四五日よも成しか

僧の文覚  
 紀州那知山  
 の懸泉  
 強修の圖



文覺堪すして浮上りぬ數十丈張り落る瀧され何かい堪へきや颯と推落され刀の刃の如く緊  
 き岩角の中を浮ぬ沈ぬ五六町流れける時何者か来て引上げたり其外人々奇特の思ひとなし火を  
 焚焙ちとして介抱する定業をらぬ命文覺程なく息出ける大の眼を見怒し大音上我此瀧は三  
 七日打れ慈救の三浴叉を瀧んと思ふ大願有今日催五日よてまた七日をも經ざりしを何者か是ま  
 で把てい來りしすと云ければ聞人身の毛鬚豎て言いぬ又瀧壺は立歸てを打れける第二日め  
 八人の童子來り文覺が左右の手を把て引上んとする散る拵合て揚す第三日めは墓なく成ぬ瀧  
 壺と穢さじとや天童二人瀧の上より下り文覺を引上順より手足の瓜端迄撫摩れば文覺夢の心地  
 息出ぬ世は不動の脇士金迦羅制多伽二童子明王の命依て救うと云傳う夫より又瀧壺は入て  
 打れけるが此度の吹來る風身入らず落來瀧湯の如く覺へ三七日の願を果し那智は千日籠り大峰  
 は三度葛城へ二度高野粉川金峯山白山立山富士嶽伊豆箱根常の筑波信の戸隠出羽の三山山羽黒  
 りを牽日本國名たる神佛を行ひ廻り古郷の都へ歸り上たれば飛鳥も祈落すべき驗者と聞へぬ  
 其後高雄山は行澄し居たりしが神護寺と云古寺有和氣清磨が建たりし伽藍久しく修造おかり  
 しかは春の霞は立籠秋の霧は交り扉の風は倒れ落葉の下は朽葉の雨露は侵されて佛壇さらは露  
 の住持の僧もなければ稀はさし入をのどて唯月日の光斗は文覺いかよとして此寺を修造  
 せん大願を起し勸進帳を捧げ十方壇那を勸め歩行はども或時院の御所法住寺殿へぞ參ける御奉

加願ひ奉るよし上るの處御遊の折節よて聞し召を入られざりしかは文覺元來不敵の荒聖おれ  
 ば御前の様いしらす唯取次の中入ぬと心得い瓶の内へ破り入大音聲は慈悲大悲の君是程のと  
 ちとか聞し召入ざるべきとて勸進帳を引ひろげ高らかは讀たり此時御前より妙音院太政大臣殿  
 琵琶を遊し朗詠めでたうおしおし按察使大納言資方卿和琴子息右馬頭資時風俗催馬樂歌はる  
 四位の侍從定盛拍子取て今やう取く歌院中ざいめき渡り顔は面白かりしかは法皇も附歌は  
 とバし座其所へ文覺の大音交り聞へ調子も拍子も皆乱れ御遊の折節何者の氣遣はすや外頭突  
 と仰出さる程は院中早雄の者共進み出る中資行判官と云者只今御遊の折なる疾々能出よ  
 とア時文覺高雄の神護寺へ一所の庄を寄られざらん限の全く盡まじと坐して動す捕て引出さん  
 とすれば勸進帳取直し判官が烏帽子を礎と打落し拳を握固て胸を突は後へのつけは突倒判官  
 恐れおめくど大床の上へぞ遊上る其後文覺懐より馬の尾よて柄をさたる刀の水の標あるを抜  
 持寄らば突んと待掛たり俄の事ゆる公卿も殿上人もこいいかよと騒れて御遊の半は荒よけり信  
 濃國住人安藤武者右宗其時當願の武者所なりしが太刀抜て走り出たり文覺慌で飛でかゝる安藤  
 武者切ていあしかりなんと太刀の室よて文覺が刀持たる右の肘を健よ撲打れて疼痛をつと寄て  
 引組たり文覺も刀を取落し組合揉合上よかり下よかり争ひしが右宗飽迄強力おれは組締て人を  
 呼文覺が両手を拷し其後門外へ引出し願の下部は渡しけるは文覺立おがら御遊の方をよらんで

大音揚縦ひ奉加をこそし給ひざらめ刺へ是程迄よからき目を見せ給ひつれば今も思ひ知せず  
 んぞ三界皆火宅之王官ともいかに其難を遁るべき十善の帝位を誇給ふ共黄泉の旅も出給ひ  
 牛頭馬頭の責を免れ給ひを踊上りくやける此法師奇怪なり禁獄せよとて縲紲も繋れける  
 實行判官耻がましきと暫く出仕をせざりけり安藤武者の勸賞は一臈を経ずして右馬允よあされ  
 ける其節美福門院崩御ましくける大赦ありて文覺程なく免されしが暫く何國へも行べきよ  
 又勸進帳を捧げ十方檀那を勤め歩行あれ此世の中い唯今亂れて君も臣も共亡び笑んぐやど  
 怖しきことのみ歩行間此法師都置て叶ふまじとて伊豆國へ流されける源三位入道の嫡子  
 伊豆守仲綱其時の當職よある間其沙汰として東海道舟船を以て伊豆國へ將下りけるよ法便  
 兩三人を付られぬ是ちが舟の傍房の知人の持給ぬか遠國へ流され給ふよ土産糧料のおとさ物  
 をも乞給へかしと云けれ文覺の左様の要事いふべき得意のよし去ながら東山の邊よこそ得意  
 の有いでさらば文と遣ふと云けれ紙を待させたり文覺大に怒てかやうの紙も物書や  
 うあしとて投返すさらばとて厚紙を尋て待させたり文覺笑て此法師の物を待書ぬぞ已等書とて  
 書するやう文覺こそ高雄の神護神造立供養の爲勸進帳を捧て十方檀那を勤めりさけるが加ふる  
 君の世も逢て奉加をこそしたまひざらめ刺へ遠流せられて伊豆國へ罷い遠路の間よていへば土  
 産糧料如きものも大切よ此使またべと云其言まよ書て扱離殿へと書いべきやらん清水觀音

坊へと書と云それい應の下部を欺よこそと云ければ一向欺よはわらず去とてり文覺清水の觀音  
 を深う頼奉りぬさらでい誰よか用事よもいふべきとぞやける去程よ伊勢國阿對津より船よて下  
 りけるが遠江國天龍灘よて俄よ大風吹大波立てすでは比船を打かへさんとす水手楫取共いかよ  
 もして助らんとしけれ共叶ふべし共みへざりけれ或い觀音の名號を唱へ又い最期の十念よ及  
 ぶされども文覺の少を懸す船底よ高射かいて臥たりけるが既よかうとみへし時岸波と起上り船  
 よ立沖の方を睨て大音わけ龍王やあるくと呼何とてかく大願興したる聖が乘し船をば過たふ  
 どのするぞ唯今天の責を蒙らんずる龍神共かなとぞ叫びける其故よや波區段々静りて伊豆國へ  
 着よける文覺京を出ける日よりして心の中よ祈誓すると語りけり我都も歸て神護寺造立供養す  
 べくんば死べからず此願空しからば道よて死すべしとて京より伊豆までの間折節願風あかりけ  
 れば浦つたひ島のたひして三十一日が間一向斷食よてぞ有けるされ共氣力少を劣す船底よ行  
 ひ打伏てぞ居たり賊よ凡人共覺ぬ事共多かりけり其後當國の住人近藤四郎國高よ仰せ奈古屋が  
 奥よを栖せけるよ右兵衛佐殿の居給ふ蛭が小島も程近し文覺常の參御物語共やける或時文覺佐  
 殿よややう平家よの小松大臣殿ころ心も剛よ策を勝れて座せしが平家の運命の末よやあるら  
 ん去年の八月薨れ給ふ今源平の中よ御邊はを天下武將の相持たる人のあし早く謀叛を起さ  
 せ給ひ日本國を隨へ給へかしとすければ佐殿それの思ひもよらず我の故池禪尼よ助られ奉りた

れ其恩を報せん爲毎日法華經一部轉讀するより外又他事あしと文覺重ねて天の與るを取され  
 ば却て其咎を受時の至るを行ひされば却て其殆を受とぬへりかやうやせは邊の心を引見ん  
 との事共思されん先は邊の爲よ志の深し様を見給へとして懐より白布よて裏たる襦袢を一ツ取出  
 す佐殿のいれいかよとやさるゝ是こそは邊の父故左馬頭殿の頭よ平治の後獄舎の前の苦の下よ  
 埋れて後世を吊う人もなかりしと文覺存る旨有て獄守よ乞願よ掛て山々寺々修行し此二十餘年  
 が間吊ひゆたれば今定て一却を浮び給ひぬらんされば故頭殿の爲よのさしを奉公の者よて  
 いとや佐殿一定との覺されねと父の頭と聞懐し先涙を催さる良有て抑頼朝勅勘を赦され  
 すい争か謀叛をば起べきとやさるゝを文覺それの安さほとへ願て上京とげや宥奉らんと佐殿笑  
 て貴僧も勅勘の身ながら佐のとなすさうといいかよを真しからすと有しと文覺怒て吾身の咎を赦  
 さうとやさるば僻とあらめ和殿のとなすさうよ何かの僻とならん是より今の新都へ上んよ三日よ過  
 まじ院宣伺らよ一日逗留し都合七日か八日よ過すまじとついで立て文覺の名古屋よ歸り弟子共  
 よい人よ忍びて伊豆の御山よ七日參籠の志ありとて出よけり

佐殿院宣を頂戴平家よりの討手の將士七万餘騎富士川より逃上る

文覺上人實よ三日よして福原の新都よ上着し前右兵衛督光能卿の許よ聊所縁有ければそれ  
 よ尋行伊豆國の流人前右兵衛佐頼朝勅勘を赦され院宣をたよ蒙りいひば八箇國の家人共を催し

集平家を亡し天下を謚んごごやいへ光能卿いざよと我身も當時の三官共よ停られ心苦き折節  
 之法皇も押籠られ渡せたまへいはいあらんすらん去きがら伺うて見めとて此よし密よ奏聞せ  
 られたりければ法皇大さよ御感有て願て院宣を下されける文覺悦て頸よかけ又三日經て伊豆  
 國へ下り着佐殿の聖の彦房怒あるとや出し頼朝又いかかる憂目よをや逢すらんなど思ひつ  
 け居られける處へ八日午の刻よつと入来てこの院宣よとて奉る佐殿院宣と添聞さよ新しき  
 淨衣鳥帽子着て手水漱として院宣を三度押戴さよ披き讀給らよ

頃年以降平氏萬三如王化無憚政道欲下破滅佛法亂王法上夫我國神國也  
 宗廟相並神德推新故朝廷開基後數千餘歲間欲下傾二帝位危國家上者皆  
 無レ不レ以敗北然則且任三神道之冥助且守勅宣之旨趣早亡平氏一類退  
 朝家怨敵繼譜代相傳兵略一抽累祖奉公忠勤可立身興家者院宣如レ此  
 仍執達如件治承四年七月十四日前右兵衛督光能奉謹上前右兵衛  
 佐殿とぞ奮れたり此院宣を錦の袋よ入て石山合戦の時も佐殿願よ懸られしとかや去程よ  
 東國の沙汰追々告来て三浦大助も佐殿よ一身既よ討死し其外爰彼所よて小迫台毎度平家方敗軍  
 し今の頼朝の勢強大よ及よし明白たるよ依て福原の都よ評定有一日も勢の属ぬ先よ討手を向  
 らるべしと大將軍よ小松權亮少將維盛(重盛公の息之)副將軍よ薩摩守忠度侍大將よの上



總守忠清を先として其勢三万餘騎九月十八日、新都を立て十九日、舊都に著同廿日、直東國へと進發ある大將維盛の生年二十三容、躰儀表畫、書と筆をも及び難き人物、重代の若背唐皮と云、鎧を唐柎に納て昇せ路中、赤地の錦の直垂、萌黃句の鎧着て、蓮錢芦毛の馬、金襴輪の鞍を置、乘給へり、副將軍忠度の紺地の錦の直垂、黒糸威の鎧、黒馬の太逞、漆地の鞍を置、乘給へり、其外、武具馬具、弓箭太刀刀、至迄光耀、ばかりの出立、あれば珍しき見物、副將軍忠度の或宮領の女房の許へ通れけるが、或夜參られし、此女房の扇、止如、あき女房客人來て、小夜も漸深、白まで歸られず、忠度軒下、佇立て扇を荒く使、れければ、彼女野狹、集く蟲の音、よと口占給へ、バ扇をやがてつかひ止て歸られしが、其後、おはしたる夜、いつぞや河とて扇をばつかひやと給ひし、ぞやと問、ければいざ、森を聞へ侍りし程、おぼいそ扇をつかひやみてはしが、とでやされける、其後、此女房忠度の許へ小袖と一かさね遺すとて、千里の名殘惜さよ一首の歌を書添て送られける、

東路の草葉をわけん袖よりもたぬ袂の露どこぼる、  
藤原守の返し

別路を何か歎ん越て行關もむかしの跡と思へ、  
關も昔の跡と詠るとい、先祖平將軍貞盛、俵藤太秀郷將門追討の將として、吾妻へ下向たりしとを、今思ひ出て詠たるよ、やいと優ぞ聞へし、昔の朝敵を平げ、外土へ向ふ將軍の先參内して、節刀を賜る

儀備南殿、又出御して、近衛階下、陣を引内辨外辨の公卿列參、忠義の節會を行、大將軍副將軍各禮義を正しうして、これを給ひる、承平天慶の蹤跡、年久しう成て、准へかたしとて、今成の讃岐守平正盛が、前對馬守源義親追討の役、又出雲國へ下向せし例とて、鈴ばかり給ひりて、皮の袋、又入雜色が頸、又掛させ被下ける、(此鈴の宿驛、よも音を聞て、上の淨用、よて往來する人と知る、驛路の鈴と云は是こ)古へ朝敵を平けん、とて都を出る將軍の三ツの存知あり、節刀を給る日家、を忘れ家を出るとして、妻子を忘れ、戰場として、敵の闘時身を忘る、今平氏の兩將を定て、左様の軍共存じ有べければ、今九重の都を出千里、東海へ趣る、或の野原の露、昔の昔、或の高嶺の苔、旅獲し川を越山を登、十月十六日、駿河國清見が關、よ着れけるが、平か、又歸り上んとを、誠、よ先の知られぬ旅心、哀ありしと、共、され共都を、三萬餘騎、よて出給ふが、路次の兵、屬副て七萬餘騎、と聞へける、前陣、蒲原富士川、よ進み、後陣、よまだ手越宇津屋、よ支たり、大將維盛、侍大將上總守忠清を、召足柄山、を打越、廣みへ出軍せんと思ふと、早り切て、やさる、よ忠清答て、福原を、立立、ひし時、入道殿、仰、よハ軍を、バ忠清、よ任、よと仰せ、よ伊豆駿河の勢、參、よきだ、よ未だ一騎、よみへ、よい、よ身方の、勢、七萬餘騎、と、やせ、共國々、の、駈武者、馬人、皆、疲れ、果て、よ東國、の、草、よ木、を、皆、石、兵衛、住、隨、ひ、屬、て、よ、あ、れば、何、十、萬、の、兵、あ、らん、を、測、が、た、く、い、へ、バ、富、士、川、を、前、よ、當、御、方、の、勢、を、待、せ、給、へ、と、や、ゆ、ゑ、力、及、バ、で、留、ら、れ、け、る、去、程、よ、石、兵、衛、佐、賴、朝、卿、の、鎌、倉、を、立、て、足、柄、山、を、打、越、木、瀬、川、よ、着、給、へ、バ、甲、斐、信、濃、の、源、氏、共、馳、來、て、ひ、と、つ、よ、なる、駿

河國浮島原よて勢揃あり都合其勢二十万騎と注したり常陸源氏佐竹四郎が雑色の文持て京へ上りけるを平家の侍大將上總守忠清此文を奪取みる女房の許への文之苦かるまじとて取せてけり叔源氏が勢いいか程有ぞと問ければ下郎の四五百千まで物の敷をば知ていへそれより上をば知れば多ひやら少ひやら凡七日八日が間のはたと續て野を山を海を川を皆武者よて昨日木瀬川よて人のやつるの源氏の勢二千萬騎とこそやいづれと申ければ上總守あな心憂や大將軍の浮心の延させ給ひたる程口惜しかりしといなし今日を先討手を下させ給ひたらば大庭兄弟島山が一族七黨とか參らでいべき是等參らば伊豆駿河の勢の皆隨ひ附べかりしをと後悔すれ共かひつゝあき大將軍維盛東國の案内者として長井齋藤別當實盛を召て汝等の強弓精兵八箇國よいか程有ぞと問ければ實盛嘲笑て左にへ君の實盛を大箭と思召れいよころ備十三策をこそ仕りいへ實盛程射し者八箇國よの幾等もい大箭と申の十五策よ劣て挽いれと申の強さを健なる者五六人して張いかやらの精兵共が射いへば鎧の二箇三箇の容易かけず射透しは大名の身分よかゝる大箭五百騎よ劣て持いはず馬よ乗て落るとかく惡所を馳れ其馬を倒さず軍の又親も討れよ子を討れよ死すれば乗越く戦ふ西國の軍と申の総て其殘いはず親討るれば引退き佛事孝養し思明て寄子討るれば其愁歎とて寄いはず兵糧米盡ぬれば春の田作秋の刈收て寄夏の熱しとて厭ひ冬の寒しと嫌ひは東國の軍よの炎天を犯し氷を碎き戦いへば右等の事総ていはず

其上甲斐信濃の源氏等案内の知たり富士川の下より搦手よや廻りいづらんかやうよ申せば大將の決心を隠させ參するも似たれ共左よいとす軍の勢の多少よよりいとす大將の策よ依いと申ければ是を聞兵共皆振ひ慄あへり去程よ同廿四日卯刻よ富士川よて源平矢合と定ける廿三日夜よ入て平家の兵共源氏の陣よ見渡せば伊豆駿河の人民軍よ恐れ或の野よ入山よ隠れ或の船よ取乗て海河よ浮びたるが營の火のみへけるをあな夥しと源氏の陣の遠火の多さよ實を野を山も海も河も皆武者でありけりいかいせんとぞ忙然ける其夜半ばかり富士の沼よ幾らも有ける水鳥共が何よか驚きたりけん一度よつと立ける羽音の雷大風よどの様聞へければ平家の兵共あいや源氏の大勢の向ふたるい昨日齊藤別當が申せし様よ甲信の源氏ら富士の下より搦手へ廻りいらん敵河十萬騎の程をしれず取籠られての叶がたしこゝを落て尾張河洲侯を防やとて取物も取あへず我先よくぞろ落行ける餘りよ周章狼狽弓取もの矢をしらす箭を取て弓を遺し我馬よ他騎人の馬よ我乗繋る馬よ飛乗て策をく紅刀槍器械算を亂して狼藉たり其邊近き宿より遊君遊女召集め酒宴ける族を多かりし頭を蹴破られ腹を踏折れ喚叫と限あし翌朝源氏の二十万騎富士川よ押寄て天も震地を震ばかりよ鯨波を作と三度平家方よの静り返で音もなきゆゑ人を入て見するよ皆落ていどやあるい敵の忙れ置し鎧弓矢を取て參るをあり大幕抱て歸るをあり凡平家の陣よの蠅の一疋翔もいはずと左殿急き馬より飛降手水激して王城の方よ伏拜み是の全

く頼朝が私乃高名よわらす一向八幡宮のひ言ひごとを仰ける頼朝で打取所あればとて駿河國をバ一條次郎忠頼遠江國をば安田三郎義定預けられ猶を續て賞べかりまか共後をさすが覺東あしとて駿河國より鎌倉へ歸られける海道宿の遊君遊女共あを思ふしの討手の大將軍や軍よ見遊をだよ淺ましきとよするを此人の聞逃し給へりとぞ笑ひけるさるほどは落書共多かりけり都の大將軍をバ宗盛といひ討手の大將を權亮という間平家をひらやかよ讀あして

平らやゑるむねもりいかよ噪らん柱とたのむすけを落して

富士川の瀬の岩こす水よりも早くも落る伊勢平氏かあ

又上總守忠清が富士川に鎧捨てたりけるを詠り

富士川に鎧のすてつ墨染の衣たゞさよ後の世のたゞ

忠清の二毛の馬よや乗てける上總鞍かけてかひあし

上總鞍の其比の名物よて武藏鎧ゆるひの科皮威(武州品川よて製す)と云如し

都を平安城よ還す中將重衡薩摩守忠度を將として奈良を攻新院崩御

同十一月八日大將權亮少將維盛福原へ歸り上らるゝの處入道殿甚怒て維盛の鬼界が島へ流すべ

し上總守忠清の首を刎よとさるゝ翌九日平家の侍老少數百人參會し忠清死罪の事を宥んと評

定す主馬判官盛國の此忠清日來不覺人よわらす渠の十八歳の時すら鳥羽殿の寶藏よ五畿内一

と聞へし懸登兩人遊籠しと有寄て擲んと云もの一人もあかりしを渠唯一人白晝に築地を越て跳

入一人打取一人擲捕て名を揚たる者ぞかし其が此度の不覺の只事共覺す是よ付ても能々兵亂の

浮憤有度と也いかよも運器を以てや宥いんものをも皆此儀よ同じ諸侍總躰の願よ付事故あく

舞ける同十日除目行れ維盛を右近衛中將よあさる今度坂東へ討手よ向ひしとゆせども何の仕

出したる事もあくしからば何の勸賞をや遙々の處早く遊上りし故もやあど人々私語あへり昔平

將軍貞盛藤原秀郷將門追討よ東へ下向せしが朝敵容易亡し難かりしかば重ねて討手を下さるべ

しと公卿會議有て宇治忠文清原重藤は軍監と云司を給りて下る程よ駿州清見が關よ宿しける夜

かの重藤漫々たる海上を遠見して漁舟火影寒燒浪驛路鈴聲夜過山を高らかよ詩を口遊け

れば忠文優よ覺て感涙を流されける然る處將門をバ貞盛秀郷終よ討捕其首を齎し上る程よ駿河

國清見が關よて行遇たりそれより前後の大將打違て上洛す貞盛秀郷勸賞行いれける時忠文重藤

も勸賞わらんかと公卿會議わりしよ九條右丞相師輔公今度坂東へ討手を向らるゝといへども朝

敵容易亡び難かりし處此人々勸誑を奉て關の東へ趣し時朝敵既よ亡びたりされば跡の兩人

よもあどか勸賞あかるべきとや給へども其時の執柄小野宮殿疑しらの成とあかれと禮記の文い

へバとて終よ其沙汰あかりし忠文口惜さとよ思ひ小野宮殿の末をば奴よ見あさん九條殿の御裔

は何の世迄も守護神と成んと誓ひつゝ終よ千死よ死せりそれ一夫怨を合バ三年雨ふらすといふ

も賀よさるとよや九條殿の末の日出度榮へ小野宮殿の末の然るべき方を出たまので今の絶果けるよこそ同十一日入道殿の四男頭中將重衡左近衛權中將より昇らる同十三日福原の内裏造出されて主上遷幸ありけり大嘗會行るべかりしは是の十月の末東河を行幸して御啓あり大内の北の野の祝廳所を作て神服脚具を調ふ大極殿の前龍尾堂の壇下廻龍殿を建て湯を召同壇の並に太政宮を作て神膳を備ふ宸宴あり大極殿まで大禮あり清暑堂まで神樂あり豐樂院まで宴會あり然るを此福原の新都は極殿をきけれは大禮行るべきやうをあく清暑堂なけれは御神樂奏すべき處をよし豐樂院をきけれは宴會を行れず今年唯新嘗會五節許あるべしとて猶新嘗會を八寶都の神祇館まで遷りけれは五節は是清見原の(天武天皇御時)當時吉野の宮にして月白く互嵐烈しかりし夜は心を澄して琴を彈給ひしかば神女あま降て五度袖を翻すこれを五節の起原ある今度新都遷るべき君を臣も心ならずまします上山(比叡の)奈良を始て諸寺社までも然るべからざるよし訴追々々さしも横紙破太政入道さらは都還有べしと同十一月二日幸急は都還有けり新都の北は山々聳て高く南の海近よして下れり波の音常は喧く汐風烈き所なされの新院(高倉院)何となく御惱のみ滋かりけれは急き福原を出させ座す中宮一院上皇(後白河上皇)を御幸なる攝政殿をのじめ太政大臣以下卿相雲客我をく供奉せらる平家より太政入道ならびよ一門の人々皆上られけりさしも心憂かりし新都は誰か片時を殘るべき我先よくとが

上られける去る六月より屋を少々壊下し形の如く取立られしかども今又物狂のしう俄は都還りありけれは何の沙汰も及ばず皆打捨く上られけり兩院の六波羅の池殿へ御幸なる主上の五條内裏へ行幸各宿所もきけれは八幡賀茂嵯峨太秦西山東山の片邊は着て或の御堂の回廊或の社の寶殿きとよ然るべき人も立宿てれしける抑々此度新都福原へ移たりし本意いかよと云ふ舊都の山と奈良と近うして聊のともも日吉の神興を振下し春日の神木を昇入て法師原の訴へ機かひ敷と毎度之新都の山隔り江重つて程を遠けれは左やうの事を容易かるまじとて入道相國計ひやされけるとかや同廿三日近江源氏の背しを攻んとて大將軍より左兵衛督知盛薩摩守忠度都合其勢三万餘騎近江國へ發向し山本柏木錦織などいふ源氏共攻落し其よりやがて美濃尾張へす越られける都まで南都三井寺は合跡し宮の移謀叛を扶たる朝敵きれば奈良をを攻らるべしと聞へしかば大衆起立たり關白殿より存る旨わらば幾回を奏聞し及んとて右官の別當忠成を下されけるは大衆起て乗落より取て引落せ誓切など聞くゆゑ忠成色を失て逃上る次は右衛門將親雅を下されけるは是をを誓剪と噪ぐゆへ道々都へ上られける其時の勸學院の雑色二人の誓切られけり其上南都より大ひなる鞠丁の玉を作り是こそ入道相國の頭と名付て討の踏のとすける詞の洩易の殃を招く媒詞の愼ざるの破を取の道まで可畏を此入道相國の當今の外祖は御座其とかやうすける南都の大衆凡の天魔の所為とみねし入道殿先南都の狼藉を靜んとて瀬尾

太郎兼康を大和國の檢非所ニ補せられ兼康五百餘騎にて馳向ふ衆徒ハ狼藉いたすと汝ハ相搆  
て致べからず物の具をせざれ弓矢も帶まじとて遣さる南都の大衆斯る内儀をバ知すして兼康が  
勢勢六十八ばかり擲捕一々首を斬て猿澤の池の端ニ掛双たり入道相國大ニ怒てさらバ南都を責  
よやとて大將軍ハ頭中將重衡中宮亮通盛四方餘騎を引卒し南都を攻しむ南都も老少雄す七  
千餘人周の緒を締奈良坂般若寺二ヶ所の路ヲ堀切て掃榻かき逆茂木引て俟掛たり平家四萬餘騎  
を二手ニ分つて奈良坂般若寺二ヶ所乃皆押寄隅と咄とぞ作りける大衆ハ歩立打物之官軍ハ馬  
よて駆廻しく責けれバ大衆數を竭し討れけり卯の刻ハ矢合せして一日戦ひ暮し夜ハ入けれバ  
奈良坂般若寺二ヶ所の構も討敗られけるが落行衆徒の中ハ坂四郎永覺と云ふ悪僧ハ力  
強き弓箭打物取てハ七大寺十五大寺ヲ續ものちし萌黃威の鎧ハ黒糸威の腹巻を二頭戴若し帽子  
兜ハ五枚綴あるを被り茅の葉のむとく反たる白柄の大長刀黒膝の大太刀左右の手ハ持同宿十餘  
人前後左右よたて手蓋の門より打て出たりしこれを暫く支たる多くの官兵馬の足を難れ討死す  
る者多かりしが官軍ハ大勢ゆゑ入替く攻けれバ永覺防ぐ所の同宿共皆討れ後輩疎まなりしハ  
力及ず唯一人南をさして落行ける夜軍ハ成て大將軍頭中將重衡般若寺の門前ハ打立て暗ハ闇し  
火を出せとやさるハ播磨國の住人福井庄の下司次郎太夫方楯を割續松よして在家ハ火をぶ  
懸たりける比ハ十二月廿八日戌の刻バかりあるが折節寒風とけしく炎の本ハ一ツあれ共吹迷ふ

風ハ多くの伽藍ハ燃着たり凡耻を思ひ名を惜む程乃者ハ奈良坂よて討死し般若寺ハ骸ハ晒しけ  
れバ今ハ行歩叶へる者ハ吉野十津川の方へ落行ける歩も得ぬ老僧や尋常ある修學者兒共女童ハ  
もしや助ると大佛殿の二階の上山階寺の内へ我先よと逃入ける大佛殿の二階の上ハ千餘人上  
り敵の續くをのぼせじとて階を引てけり猛火ハまさしう押掛ぬ喚叫ハ聲焦熱大焦熱無間阿鼻焰  
の底の罪人を是ハ過じとぞみゑし興福寺ハ淡海寺の傍藤原氏累代の寺ハ東金堂ハ坐す佛法最  
初の釋迦の像西金堂ハ坐す自然涌出の觀世音瑠璃を以し四面の廊朱丹を交し二階の樓ハ輪空ハ  
輝し二基の塔忽ハ煙とあるこそ悲しけれ東大寺ハ常日不滅實報寂光の坐身ある御佛と思しめ  
し准て聖武皇帝手づから盤立給ひし金銅十六丈の盧遮那佛鳥瑟高ク顯れて半天の雲ハ隠れ白毫  
新ハ拜れて滿月の尊容を現すかゝる貴き御佛を此頭の燒落て大地ハ轉び身ハ鎔會て山のおと  
し八万四千の相好ハ秋の月早く五重の雲ハ隠れ四十一地の瓔珞ハ夜の星空しく十悲の風ハ漂ひ  
煙ハ中天ハ充滿て炎虚空ハ沖り衝火の子散亂て電の如し親みる者ハ更ハ眼を當ず幽ハ傳聞人  
ハ肝魂を失り法相三論の法門聖教すべて一卷も残らず我朝ハ中及ず天竺靈旦よをこれはど  
の法滅有べしと覺す優曇大王の紫磨金を瑩き毘首羯摩の赤梅檀を刻しを纒ハ等身の佛ハ况  
や是ハ南閻浮提の中ハ唯一ツ無双の佛長く朽損の期あるべし共思ハざりしハ今毒焰の塵ハ  
交て久しく悲を殘し給へり梵釋四王龍神八部冥官冥衆も驚き喚給ふらんとぞとへし法相擁護の

春日大明神いかゝるとをか覺しけんされば春日野の露も色代り三笠山の嵐の音も恨る様も聞へける焔の中へ焼死する人々を算れば大佛殿二階の上より一千七百餘人山階寺より八百餘人此に堂より五百餘人彼佛殿より三百餘人を具に記せば三千五百餘人を聞へける戦場も討るゝ大衆千餘人少々般若寺の門も切掛させ少々願共持て都へ上られける明る廿九日頭中將重衡南都を亡ぼて北の京へ歸入凡入道相國斗もて憤晴て喜れたれ共中宮一院上皇の縦は惡僧をこそ亡さめ多くの伽藍破滅すべきやいとぞ多敷有ける日來の衆徒の首大路を渡して獄門の木も掛らるべしと公卿僉議ありしが東大寺興福寺の亡びぬる淺ましき何の沙汰も及ばず爰や彼所の溝や隄もろ捨て捨置ける聖武皇帝の宸筆の御記文も我寺興福せば天下を興福すべし我寺衰微せば天下も衰微すべしとぞ遊ばされたりされば天下の衰微せんと疑なしと皆人淺ましく沙汰せしが其年を應治承を五年も成りけり

附て云右兵衛佐殿流人の身もて俄に二十萬騎の勢を帥るおとくは兒女見て怪むべし是の平家物語ゆる平家の始末をくわしくせしものあり佐殿の成立の略してあり源家の棟梁たれば譜代の從者も多く時勢もつれて爰彼所も潜て在しは皆出來り藤九郎盛長をせり伊豆の配所もも扈從して居けり其後千葉常胤が計ひもて鎌倉も入給へり頼政の條も云如く日本中の源氏も夥しく平家といへ共入道相國の政道を惡み怨むの多ければ佐殿も隨ひ屬し者いくばく

も夥し秩父三浦和田梶原北條皆平氏に石橋山の合戦伏木隠れ或は眞田與一が討死七騎落等の事他の書も讀て此物語の略せりと知り給へ借又此冊のはじめは舊都のあれたるさまを云て残るゝ近衛河原の大宮とあり舊さと書よを見耳もをどめ代々の形勢を心得たる上は格別さもあつて辨へがたからん是の第一の巻も云二代の后とやせし七十六代近衛院の皇后もて大炊御門存大臣公能公のひ女帝崩給ひて太后宮と稱し近衛河原も御所幽も修理ましますを大宮所共奉りしが七十七代の後白河院七十八代二條院強て后も立給ひしが此帝も崩給ふゆゑ又御幽栖ましくける入道殿を諸事御心まかせもさし置奉るもぞ都遷も其儘近衛河原の御所もかへせしん又云四卷目も頼政卿も自害の時の辭世平家物語の下の句を身のなるはて悲しかりけるとあを他書も依てこゝも哀なりけるとせり此哀の哀憐悲哀の義もあらず天晴と同じ埋木ゆゑ花を咲ざりしが今最期も及でいさしく軍をとげ忠義の爲も命を捨るゝあつばれぞと云心も左なれば花咲とをあかりしよと云下したる上の句も相應せず上下の句を心も味ひて知らるゝ又此冊のいじの朝敵といわれし人々の名の處人鹿の次も大友眞鳥あり是もいさうべき説あれどもくなくしければ暫く平家物語の本文もまかす

治承五年正月元日内裏東國の兵革南都の火災も依て朝拜を留られ主上出御をさし物の音も吹鳴

ばず舞樂を奏せず吉野の國柄も参らず藤氏の公卿一人を参せられずこれハ氏寺焼失によつて  
 二日殿上の宴醉もなく男女打潜めて禁中忌布ぞみえしならびも佛法王法とも盡ぬると淺  
 ましき法皇仰ありけるハ四代の帝王思へば子孫のいかなれば萬機の政務を停られて空しう年  
 月を送るらんとぞ歎き有ける同五日南都の僧綱等關官せられて公誦を停止し所職を沒收せら  
 るるれば形の様までと御齋會の有べきを僧名の沙汰ありしハ南都の僧綱等の皆關官せら  
 れぬ北京の僧綱を以て行るべきかど公卿僉議ありしか共さればとて今更南都を捨けてせ給  
 うべきならねハ三論宗の學匠成法已諱が忍びつゝ勸修寺に隠居たりけるを召出て御齋會形の如  
 く遂行る衆徒の皆老たるを若きもあるハ射殺され或ハ斬殺されて煙の中を出ず炎ハ咽んで亡  
 しかハ橋よ變ハ輩ハ山林に交つて跡を留る者一人を参し中よを興福寺の別當花林院僧正永圓ハ  
 佛像經卷の煙と立昇るを見て穴淺ましとて心打噪がれけるより病付て終り失られぬ此永圓ハ優  
 又艶じき人よておのしけり或時郭公の鴨を聞て  
 聞たびよめづらしけれハ時鳥いつも初昔のこゝろこそすれ  
 と云歌を詠てこそ初昔僧正といハれ給ひけれ上皇ハ去々年法皇の鳥羽殿に押籠られ渡らせ給  
 ひし御事去年高倉宮附れさせ給ひし御有さまさしも容易からぬ天下の大事都邊など御事ハ憫惱  
 付せ給ひてしかくぞ渡らせ給ひさりしが今又東大寺興福寺の亡びぬるよし聞召てハ惱最重ら

せ給うゆへ法皇との外御心を痛給うは療治後祈禱殘る方おしとせせども同十四日六渡羅の池畔  
 まで新院終り崩御あり御宇十二年徳政千萬端詩書仁義の廢るを興し理世安樂の絶たる跡と繼給  
 う三明六通の羅漢を免れ給す幻術變化の權者を遁れぬ道おれば有爲無常の習ひと云ながら理  
 過てぞ覺けるやがて其夜東山の麓清閑寺へ遷し奉り夕の煙またぐへつゝ春の霞と立のぼらせ給  
 ぬ禮憲法印送參會んとて急ぎ山より下られけるがハや道まで煙と立上らせ給うを見進せ  
 て泣々かくぞ詠じ給ひける  
 つゆよみし君が御幸を今日とへハ歸らぬ旅と聞ぞかおしき  
 又或女房帝隠れさせ給ひぬどうけ給ひり泣々思ひつゝげけり  
 雲の上ハ行末遠くみし月の光消ぬと聞ぞかおしき

御年二十一内ハ十戒を保て慈悲を先とし外ハ五常を濫らせ給す禮義を正しう守給ふ末代の  
 賢王よておのしけれハ世の惜奉ると月日の光を失へるが如くかやうハ人の願も叶す民の果報を  
 抽き唯人間の境こそかおしけれ  
 小督殿を捕尼とあす本曾次郎冠者義仲信州小旗を建

新院御諡號を高倉院と稱し奉る高倉宮ハ御舍弟ハ新院ハ嘗ては幼少より柔和のハ生質ありし  
 が御成人まじくても殊更御憐惠深く近世の聖天子とやあへりされハ人ハ順附奉るとハ恐ら

延喜天曆の帝は劣り給ひ賢王の名を揚仁徳の行を施し給ふも飛濁を別たせ給ふ上の事あるを此君承安の比に十歳ばかりを渡らせ給ひん殊の外紅葉を愛させ給ひ北の陣は小山を築かせ楯楓葉は色うるいしう染たるを植せ終日戯覧ありしが或後暴風としたなう吹て紅葉皆吹散し庭上頗る狼藉あり殿守の伴の宮奴朝浄すとて是を悉く掃拾けり殘る枝散る木の葉をい掻聚て風をさましかりし朝をれば終殿の陣は寄酒煖て賜ける請はしてげり奉行の藏人行幸より先と急ぎ行てみるも跡方さしいかよと問はまかしく答う藏人狼狽をさしつる言交執し給ふ紅葉を跡形さへさうせしむ故等禁獄流罪をせられぬが身もいかかる御時か預と案じ續る處も主上夜の殿出給給ひす彼へ行幸成て戲覧あるも無りければこいにかよと尋ある藏人俄のとゆゑ奏まへる旨をさく有の儘は奏聞す天氣殊も快氣打笑ひせ給ひ林間煖酒焼紅葉一と云詩の意をば其等離か散て優しうも仕つる氣特さよと却て戲覧ありし上の何の沙汰もさかりけり又安元の比は方違の行幸ありしよさらでだも雞鳴曉唱聲明玉の眼を驚す程よもしかばいづも御時がちよてつやく御時成れざりけりいなや西る霜夜の烈さよ延喜の聲主國土の民共がいかある程よか寒からんとて夜の殿はして御衣を脱せ給ひけると迄思し召出て吾帝徳乃望らぬとぞは歎有ける良深更よ及んで程遠く人の叫聲しけり供奉の人々の聞付られず主上ハ早く聞し召て何者ぞ見て參れと仰ければ上臥したる殿上人の者よ仰せて尋すれば或十字街

は帷の女の重れ長持の蓋提たるが泣いいかよと問はまの女房院の御所は侍ふが此程漸よ裁たる衣を持て參るも唯令男二三人來て奪取去ぬ今の装束があらばこそ院の御所は侍ひせ給とめ又とかくしく立宿せ給ふべき親方方もないさす是と思ひ續る悲しさとして泣けり彼女童を具して参りて此よし奏聞したりければ主上聞し召ぬ無惣何者の云爲よかあちらんと龍顔より涙を流させ給ふが忝なき堯の代の民の堯の心の直なるをもつて心とす故は皆直之今の代の民の朕が心と以て心とす故は奸者朝も在て罪を犯す是朕が愧はあらずやとぞ仰けるさるよてを取れつる衣の何の色すと仰下されければ然くの色と奏す建禮門院いまだ其時の中宮よて渡せ給ふよを襟の色したる浴衣やゆと詔ありければ先のより遙色の殿しう参りたるを女の童は給ひける未夜深し又さる目も違ふまじきよあらずと上日の者餘多添て主の女房の局まで送せ給ひしこされば賤の男賤の女あべて比君の千秋萬歳の寶祚を祈しとかや何よりを又哀ありしの中宮の御方は候はれければ女房の召仕ける上童思さる龍顔も咫尺するも有けり唯尋常白地もななく眞成よは志深かりければ主の女房を召仕す却て主の如くいつき款待ける當時詠詠云へるとあり生男勿ニ喜歡生女勿ニ悲酸男是不對侯女爲妃立后これの揚太真が立宗皇帝の妃と冊れ楊貴妃とていやされ其一族悉く出世しける時の假諾之幸ひある哉此人女御后共持成れ國母仙院とを仰られもやせんとして其名を葵前とすければ内々葵女御とて叫あへり主上



風説を聞し君其後の召さるるは是の志の竭ぬるもあらず唯世の勝を憚せ給ふゆゑ之されば  
眺がらよつや〜供御も聞しめさす浮惱とて常の夜の殿よのみ入ては座其時の關白松殿此よし  
を承つて主上は心の盡ぬるところ坐されし慰進らせんとて急ぎ参内有て左様は慮慮は掛らせ  
坐さんよおひて何條とかいべき件の女房召れ進らすべしと覺ひ科尋らるゝ及ばず基房頼て  
猶子よ仕りいさんと奏し給へば主上仰まいざとよ位をすべつて後のまゝさる例をあるに正しう  
在位の時左様のとの末代の誹なるべしと聞し召入されば關白殿も力及ばず涙を押さから罷出  
給ふ其後主上縁の薄儀の句とよ深かりけるも古き言あれ共思召出てかくどわをばされける

忍ぶれを色よ出まけり我戀のものを思ふと人の問まで

冷泉少將隆房是を給り續て件の葵の前よ給せられたれば是を取て懷入顔打救め例あらぬ心地出来  
たりとて里へ歸り打臥と五六日して終に空く成まけり君が一日乃思の爲よ妾が百年の身を誤と  
とかやうの事をややべき昔唐の太宗鄭仁基が女を元觀殿よ入んとし給ひけるを魏徳彼娘の既よ  
陸氏よ約せりと諫すければ殿よ入らるゝとを止られたりしよ少も違ぬ今の君の心操かあ和人  
やける主上の戀慕の涙思し召沈せ給ひたるを慰め給ひんとて中の宮方より小督殿とや女  
房を遣らせらるゝも此女房とすの櫻町中納言重教卿の娘よ禁中第一の美人双あき琴の上手  
の冷泉大納言隆房卿少將なりし時見初たりし女房よて始に歌を詠文を盡されけれ共玉章の歌

のみ積り靡くけしきあかりしが流石情は弱る心よや竟の靡給ひけりされども今君へ召れ爲  
方なく悲しくも飽ぬ別の涙は袖しはたれて干あへず少將いかよとして小督殿を今一目見奉ると  
やあゝ其事とあく常の参内せられけり小督殿の座ける局の邊彼方此方へ佇立歩き給ひけれど  
を吾君へ召れ進らす上り少將いかよとを詞をも通すべからずとて傳の情をだよも掛られず  
少將をしやと歌一首小督殿の局の御簾の中へ投入らる

思ひかね心の空は陸奥のちかの摺籠近きかひなし

小督殿やがて返事をせまはしく思れけれ共君の作爲は謔影とや思れけん手よ取てを見給ひすや  
がて上童小押せ壺の内へぞ投出さる少將情あう怨しうのれ誤さすが人をこころ見と空怖しく取て  
懷よ引入出られけるが猶立歸り

玉章を今の手よだまらじとやさこそ心よ思ひすつとを

今此世よて相みんとを離れれば生て居て左よ右よ人を戀しと思ひんより唯死んとのみぞ願れ  
ける入道相國此よし風は聞給ひ中宮とやを冷泉少將を又聲也小督殿よも二人の聲を取れて  
ハ世の中好まじいかよとして小督殿を呼出し失んとぞ宣ひける小督殿をいつしか此沙汰を傳へ  
聞給ひ我身乃上の何どもなざば成ん君の爲心苦しと思れければ或夜内裏を紛れ出行術を知ず  
失られける主上のお歎き斜ならず晝の夜の殿よのみ入せ給ひは涙よ沈ませられ夜の南殿よ出御



仲國秋夜馬を  
馳せ嵯峨野  
小督殿を執る圖

あつて月の光を傍覽じ慰せ坐ける入道殿扱ひ君小督ゆる思し召沈せらるゝと思ふ其からばど  
 ては介錯の女房達とをとりめて参らせず参内ある人々をを猜みの目よ稜立ちらるゝより入道殿の  
 權威を恐れ参り通ふ臣下もかし男女打潜て禁中忌々しうすみへよける比の八月十日餘りのとき  
 ればさしを隈なき空なれ共主上の涙は曇らせ給て月の光を際よを傍覽せらる夜も深更も及ん  
 で人や在くと召れしは唯諾奉る者もなし良有て彈正大弼仲國其夜も直宿も参り遙く遠う侍  
 ひけるが仲國侍ふと上れば汝近う参れ仰下さるべき旨ありと宣ふ何事やらんとは前近う参じ  
 たるよ汝若小督が行衛や知たると仰らる争か存すべきと少誠や嵯峨の邊片織置したる内よ在と  
 ず者もあむるぞ主が名をばしらすとも尋参せよんやと仰ければ仲國主の名を知りしのでいかで  
 か尋ね逢れいべきと上るゆる主上賢をもとて御涙壅取させ給ひす仲國熟々物を案すよ小督殿  
 の琴彈給ふと高名ありし此月の明さよ君の御事思ひ出さるらせ琴彈給ひぬといよをあらじ内裏  
 よて彈給ひし時吾笛の役も召れたれば其琴の音の何國よても聞知んずるものを嵯峨野の在家い  
 くはとかあらん打廻つて尋んよなか聞出さでぬるべきと思ひ左いひ主の名のしらすいとも  
 尋見いべし縦ひ尋ねわひい其御書あといひすが浮雲とや思されいひめ御書を賜て参りいひんと  
 申上るよ主上理ありとて頼て宸筆を染給ひ下され寮の傍馬よ乘て参れと仰よ依て仲國馬出さ  
 せ明月よ策を揚西よとして歩せける小鹿鳴此山里と詠じけん嵯峨野の邊の秋の比さこそ哀よ

を覺けめ片折戸せし屋を見付ての此内よもや坐すらんと扣を聞ければを琴彈處のなかりけり御  
 堂あどへを参り給へるともやと釋迦堂はじめ諸堂を見廻れ共小督殿も似たる女房たよもなかり  
 けり空しう歸り参りさらんい参らざらんより中くわしかるべし是より何地へを迷ひ行ばやと  
 の思へ共何國か王地ならぬ身を藏すべき宿もあしいかいせんと案じ煩ふ誠や法輪の程近ければ  
 月の光よ誘ひれて参り給へるともやと其方へ向て予浮岩ける龜山の傍近く松の一村ある方よ幽  
 よ琴を聞へける峯の嵐か松風か尋ん人の琴の音かと覺束あくの思へ共駒を早めて行程よ片折戸  
 したる内よ琴を彈澄されたり控て聞ば少を紛なき小督殿の爪音よて樂の何ぞと耳を澄せば夫を  
 想ひ戀と訓想夫戀と云樂ありけり仲國さればこそ君の御事思ひ出参らせて樂も多きよ此曲を彈  
 じ給ふとこそ優しけれと問はどく打敲ハ頼て琴の彈止給ひぬ是の内裏より仲國が御使よ参り  
 てい開させ給へとて敲けを答る者もあかりけりやあつて内より人の出る音しけり嬉しう思  
 ひ待處よ鎖を廻し門細めよ開幼氣したる小女房の顔斗指出てこれの内裏より御使など給るべき  
 所よ侍す若門違よてを侍いんと云げる仲國返事せば門闔鎖指れんと是非なく押開て入よける妻  
 戸の際ある縁よ居て何をやかやうよ御渡りいやらん君の御故よ思し召沈ませ給ひ御命を已よ危  
 うみへさせいどかくやさば浮の空とや思すらめ御書給り参いどて取出し奉る已前の女房取次て  
 小督殿へ進せしを披き見給へば君の御消息よ有けるやがて御返事書引結び女房の装束一重添

中書省は様たる仲國伊返事の上の左右すよ及ゆねど別ゆ使よをいひてこと直の伊返事承  
 ちでいひかて歸りゆべきとすよ小督殿實もやと思れけん自ら返事し給ひけり足下を聞給ひ  
 づらん様よ入道殿餘り怖しき事のみぞ聞しかば淺猿さ。或夜密忍びつゝ内裏を紛れ出今  
 へ菟る處の栖居されば琴彈ともあかりしが明日より大原の奥へ思ひ立こといへば主の女房今夜  
 ばかりの名殘を吞み今の夜も深ゆ立聽人もあらじと勸る間昔の名殘を流石床しく手馴し爪  
 琴かさならせし易うを聞出されけりちとて涙せき敢給ひねば仲國も坐よ袂をぬらしける良  
 おつて仲國涙をおさへやけるの明日より大原の奥へ思召立こといひ定て姿なども髪給ひんと  
 のは事もや然るべくもいひて君を何とかし給ふべき夢く叶ひゆまじ相かまへて此女房  
 出し參らすなとて供よ具せし面部吉仕丁など置留其屋を守護せしめ寮の馬を飛せ内裏へ參り  
 たれば夜の朝明けけるやがて馬繫せ女房の装束隠し持ながら今の定て御寝なりつらんよ誰を  
 してかやべきと思ひながら南殿へ參りたるよ主上の未夜邊の座坐け南翔北嚮。難付寒温  
 於秋雁の東出西流。只寄三鷹望於曉月。と心細げ打詠じさせ給ふ處よ仲國つと參て小督殿の伊返  
 事進らせられたれば主上斜めらすは威有てさらば夜去具して參れと仰ける仲國の入道殿の還出給  
 ばん處を怖しけれ共勅誑され人よ車借て嗟峨へ行たるよ小督殿參るまじと宣ふを種々賺し  
 撥て車よ兼内裏へ伴ひ參りければ幽ある處よ忍ばせ夜く召れける程よ姫宮は一所出來させ

給ひけり坊門女院は此宮の作事なり入道相國小督が失たりと云し跡方もなき遺音のいかに  
 もして失いんと有しがつひは謀出し小督殿を捕へ尼よあし追放たる年二十三出家の元來望され  
 共かく心あらず尼よなされ濃墨染よ寝果嗟峨の契よ栖れし無下よ方見と共主上のかやうの  
 事共を御惱つかせ給ふ品々の内は襟きりし一ツと聞へける法皇よ連續伊敷のみ滋かりける  
 去る永万よの第一の皇子二條院崩御あり安元二年七月よ孫六條院隱させ給ひ天よ栖ば比翼の  
 鳥地よ在り連理の枝とならんと銀漢の星を指てさしを契淺からざりし建春門院秋の露よ立が  
 くれ朝の露と消させ給ひぬ年月の隔れ共昨日今日の別の様よ思し召ては涙も盛給ひぬよ治承  
 四年五月よ第二の皇子高倉の宮討ひ給れ現世後生戀思し召れつる新院さへ先立せ給ひぬれは  
 角よ託かたき涙を滋かりき悲の至て悲の老て後子よおくれたるより悲きいをし恨  
 の至て恨しき若うして親よ先だつより恨めしきいなしと朝綱相公の子息澄明は後れて書れし  
 い今こそ思し召知られけれ彼一乗妙典の誦誦も怠せ給はず三密行法の修持を功積せ伊座天  
 下諒闇となりしかば大宮人も推並て花の袂を窺しける入道相國斯迄いたく情を當り奉られた  
 る事を流石空恐しくや思れけん法皇を慰め進らせんとて安藝殿島の内侍が腹の姫君十八も成給  
 ふを法皇へ進らせらる當家他門の公卿多く見送りして偏よ女御參りのおとくよぞ有ける上皇隱  
 れさせ給ひ備よ二七日も過さるよ然るべからずとぞ人々私語合れける去程は其比信濃國よ木曾

次郎義仲と云源氏ありと聞へけり故帯刀先生義賢の次男之然るも父義賢の去ぬる久壽二年八月十二日鎌倉源太義平(左馬頭義朝の惣領)は討れ其時義仲二歳之母抱て泣々信濃へ下り岐蘇の中三兼遠が許(權頭中原の兼遠の三男ありしゆゑ中三といふ云々)行ていかよをして人とあし給ひれと云を是がまよしく八幡太郎義家の曾孫清和源氏の胤として兼遠かひくしう請合て養育し漸長大及び空儀賦佩人勝れ心を剛力も強く弓箭打物取との都て上古の田村利仁於期將軍知頼保昌先祖頼光義家朝臣と云どもいかで是より増るべきと人々の思ひ付大方ちらず十三よて元服も先八幡へ参り通夜して我四代の祖父義家朝臣の此神の孫子と成て名を八幡太郎義家と号し且其跡を追ふべしとて寶前を警を出土木曾次郎冠者義仲と云し之常乳母の仲三よ具せられ都へ上り平家の舉動形勢共をも能々見窺ひけり木曾或時兼遠を呼て抑前右兵衛佐頼朝の東八ヶ國と打從へて東海道より攻上り平家を追落さんとするよし吾を東山北陸兩道を隨へ一日も先平家を亡し縦日本國も兩人の將軍と仰れんと思ふいかよと宣へば兼遠大も畏まり悦で其料よこそ君をば此二十餘年養育し奉りていかやう仰らるゝこそさすが八幡殿の御齋共覺へし逆順て謀叛を企先廻文あるべしとて東山北陸へ觸たりける信濃國より補井小淵太滋野行親一番は屬隨ふ是を始て信州一國の兵皆來れり上野國田胡郡の兵共父義賢の好も倣て出來れり其外平家の末よありぬる節を得て源氏年來の素懐と還んとて木曾は屬する者日々

よ多かりける

他書より義平義賢を殺し秩父の畠山よ命と孤をも害すべしと有しかば尋出せしが義賢こそ鎌倉ある義朝の所領を掠んとする故殺さるれ孤の何をしらん扶けたしとて思案する處齋藤實盛は行遇是を頼けるよ孤實盛を見て笑ひかゝるゆゑ不便彌増請取しが乳母ともは信州へ行て入魂せし中三兼遠を頼實盛の源氏の武士あれども時勢は依て平宗盛公よ仕へ兼遠も又然り當時朋輩といひ格別親めり兼て義仲時節を待て旗を揚んとし兼遠共語り合れしが此節は兼遠京師に在其留主よて俄よ此義よ及べり宗盛兼遠を呼出し義仲が首を討て出すべしとやさるゝ兼遠の義仲と不便さ養ひ得共謀叛と企る器量の者よあら殊よ山家よ在て譜代家子一人をあし父を悪源太よ殺され然れは怨の頼朝よこそあらめ意恨もあく眼前某が主人と頼ひ平家へ何を以てか弓と挽ひん全く閭巷の浮言よいんとや平家の侍大將共の兼遠を擲置勢の屬ぬ内よ義仲討手を向らるべしと勸けれ共宗盛公半信半疑よて更よ決せず兼遠辨舌を振て陳議するゆゑとも人心を靜ん爲早く歸國し義仲を討て出せとて暇を賜ふ兼遠虎の尾を踏危さを通れ歸國す侍大將共兼遠を遣すまじと諍へ共宗盛公吾苟くも當家の大將軍あり何ぞ汝等が智慮を借んとて大よ怒給ふゆゑせひあく皆退て知盛卿あらはかくあらじ今よ臍を噛給ひんと私語あへり又義仲北國の軍よ齋藤別當を討ことあかれと

觸られしゆる實盛が手先より軍する者あし是昔の恩義を思ふて也されバ實盛討死の覺悟を  
究鬚髮の白を染かくし若やきて敵よあひしとあり平家物語といひさゝか差ふゆる此事を述  
傳也

四國西國平家又背太政入道熱病又薨去城 資永永茂が軍事

信州岐蘇といふ所の國の南の端美濃境なれば都も程近し平家の人々東國の背だまあるは北國迄  
こゝいかよとて大に恐れ騒れけり入道殿宣ひけるは縦ひ信濃一國の者共こそ木曾に隨ひ附と云  
共越後の國よの於期將軍の末葉城太郎資永同四郎資茂是等の兄弟共は多勢の者也仰下さらば易  
く討て進らせんとぞ宣へば實ると中人もありのや、唯今御大事及んと叫く人々もありし也  
二月朔日除目行れ越後國の住人城太郎資永越後守に任ず是の本木曾追討あるべき謀と聞へける  
同七日大臣公卿家々として尊勝陀羅尼ならびに不動明王書供養せらるこれの兵亂慎の爲とぞ  
聞へし同九日河内國石川郡に居住しける權守入道義基子息石川判官代義兼是も平家を背頼朝に  
心を通ひし東國へ落んと聞へしかば平家討手を遣ひしける大將より源太夫判官季貞攝津判官盛  
澄三千餘騎を引具し河内へ發向す城の内より義基法師を始わづか百騎斗より過ざりけり卯刻よ  
り矢合せし一日戰暮し夜よ入ければ義基法師討死す子息判官代義兼は痛手負て生捕とある同十  
二日義基法師が首都へ入て大路を渡さる諒闇は賊首を渡さるゝと堀川院崩御の時前對馬守源義

親が首を渡されし其例と聞へし明る十三日鎮西より飛脚到來む宇座の大宮司公通すせいとく鎮  
西の者共緒方三郎維義を筆白杵戸次松浦等よ至る迄一向平家を背て源氏よ同心のよしやたりけ  
れば平家の人々東國北國の背西國迄かくあるいいかよと眼を見合せて驚き危めり同十六日伊  
豫國の飛脚來り去年の冬より伊豫國の住人河野四郎通清源氏よ同心するは依て備後國の住人頼  
入道西寂の平家よ志し深かりしより三千餘騎伊豫國に押渡り道前道後の境ある高直の城に推寄  
さんごよ攻ければ河野通清討死す子息通信の安藝國住人奴田次郎と云者母方の伯父ありしへ  
趣て在合す父を討せて安からず思ひいかよをして西寂を討んと頼ひける頼入道西寂の四國の狼  
藉を鎮て今正月十五日備後の頼入道押渡り遊君共を集めて遊び戯れ酒宴ある所へ河野父の名を繼四  
郎通信思ひ切たる者共百餘人相語てはつと押寄西寂が方よも三百餘人有けれ共俄のこゆる思  
ひ儲す周章ふためきけるが立逢ふもの射伏切伏先西寂を虜て伊豫國へ押渡り父が討れし高直  
の城まで提持行歸りて首を切たり共又磔は掛たり共いへり其後四國の者共河野四郎に隨ひ  
附ぬ又紀伊國の住人熊野の別當湛増は平家重恩の身ありしが忽ち心變りて源氏よ同心のよし聞  
べしかば平家の人々東國北國南海西海かくの如し夷狄の蜂起耳を駭し逆亂の先表頻々奏は四夷  
既よ起れり世既よ失ひあんとするといふ平家の一門よあらねを心ある人々歎き悲ぬの無りけり  
同廿三日院の殿上よて俄よ公卿會議あり前右大將宗盛卿よさるゝ今度坂東へ討手に向ふたり

といへ共させる仕出したるとを亦し今度の宗盛大將を承つて東國北國の凶徒等追討すべきよし  
 する、諸卿色代して卿の才狀勇々しくいとすされける法皇も御感ありけり公卿殿上人も武官  
 備り少を弓箭も携らんほどの人々の宗盛を大將軍として東北の凶徒等を追討すべきよし仰下  
 され廿七日軍の首途して既討立んとせられしは夜半ばかり入道殿違例の心地とて止り給ひぬ  
 廿八日よ入道殿重病と聞へしかば京中六波羅闕あへりいかい思れけん疾附より湯水も咽へ入  
 られず身の中熱と火を焼が如し臥し給ふ處四五間が内へ寄者の熱さ堪がたし唯宣ふとの宛々と  
 手へ鹹も凡事ともみへられず餘り堪難さや比叡山より千手井の水を汲下し石の船に湛置それ  
 ん下りて寒給へば水夥しう湧上て程なく湯もどなりみけるをしやと筒の水をまかすれば石や鐵  
 の焼たる様も水進て寄付す自ら中水の焰と成て燃ければ黒煙殿中も充滿炎濁卷てぞ揚りけるこ  
 れや昔法藏僧都と云し人閻王の詩も趣く母の生所と尋し又閻王憐給ひ獄卒を副て焦地獄へ  
 遣さる鉄の門の内へ指入てみれば流星あとのとくは炎空も打身多由句も及けんを是の過じ  
 と覺ける又入道殿の北の方八條二位殿の夢見給ふは猛火夥しう燃たる車の王をさきを門の内よ  
 遣入た其前後も立たる者の或の牛の面馬の面のとく車の前も無と云文字斗鐵の札も彫て打たり  
 夢の中も其車の何國より何地へと問給へば平家太政入道悪行超過よつて閻魔王宮より伊迎の  
 車也とすあの札のと問玉へば南閻浮提金剛十六丈の毘盧遮那佛を焼亡せ罪も依て無間の處も沈

せしは閻魔の廳まで沙汰有しが其印もいと守ける二位殿夢覺れば冷汁肌服を徹せり此夢を駭給  
 へば聞人曾身の毛壁けり靈佛靈社へ金銀七寶を擲馬鞍鎧兜弓箭太刀刀に至る迄取出運出して祈  
 すされけれ共叶まべくもみへ給はす唯男女の君達跡枕も招湊ひ歎き悲ひ給ひけり閏二月二日二  
 位殿熱堪難けれ共入道殿の枕も靠ては形勢を見奉るに日は副て濶少くみへさせし物の少も覺  
 させ給ふ時思召とあらば仰置れよとありし入道殿日來いさしも勇々敷おはせしかども命期よ  
 るあらしかば世も苦げは息の下よて宣ふよう當家の保元平治より以降度々朝敵を平げ勳賞身  
 ま餘り忝くも一天の君の御外戚として丞相の位に至り榮花旣も子孫も暨ぶ今生の望の一事も思  
 ひ置とあし唯思ひ置事とて右兵衛佐頼朝が首を見ざりつるの何よりを本意あし吾いかも成  
 ん後佛事孝養すべからず堂塔をを建べからず急ぎ討手を下し頼朝が首を刎て我墓の前も掛べ  
 し其ぞ今生後世の孝養もあらんとぞ宣ひぬもしや助るを板も水も置て臥轉ひ給へ共助る地も  
 なく同四日悶絶覺地して遂よのがき死よぞし給ひける馬車の馳違ふ音の天も響地を揺ぐ斗一天  
 萬乘の主いかるは事存とを是よの争か勝るべき今年六十四老死と云べきもわらず宿願忽  
 尽ぬれば大法秘法効験をなく神明佛陀の威光を消諸大も擁護も給はず況や凡慮も於てをや身も  
 替り命も代んも忠を存せし數萬の軍旅の堂上堂下も並居たれ共是の目もみへず力も抱ぬ無  
 常の殺鬼をば暫しも戰返すべしと号す又歸り來ぬ四手の山三塗川黃泉中有の旅の空の唯一所ぞ

趣か非けるされ共日來造り置れし罪業ばかりこそ獄卒と成て迎も來りけめ哀ありし次第同  
 七日愛宕ふて煙と赤心骨をば圓實法眼首よかけ攝津國へ下り經島は納けりさしを六十餘州威  
 を振ひし人なれ共身の一片の煙とありて都の空よ立昇り暫時徘徊て濱の眞砂は戯れつゝ  
 空さ土とぞ成玉ふ葬送の夜不思議のとありけり玉を延金銀を鑊て作られし西八條殿其夜俄も焼  
 よけり人の家の焼るの常の習ひあれ共何者の所爲よや有けん放火とぞ聞へし又六波羅の南も當  
 て人ならば二三十人ばかりが聲して嬉しや水鳴の滝の水と云拍子とりと舞躍り咄と笑ふ聲し  
 けり去る正月より上皇隠れさせ玉ひ天下諒闇ありぬ一兩月を隔て入道相國薨せられぬ心  
 さ性の者もいかゞ憂さるべきいかさま懸れ天狗の所爲とぞ抄汰わり平家の早雄の兵百餘人  
 笑ふ聲を知邊も尋けるの院の御所法住寺殿より此三年の院も渡せ玉はず御所預り備前司基  
 宗と云もの有其知たる者共酒を費て來集飲けるか菟る折節も音あせうとて飲けるか次第も醉  
 つのり加藤も舞踊ける六波羅の兵共是と聞付つと押寄酒醉共二三十人擄捕て六波羅へ率て  
 龜壺の内も曳居ければ宗盛卿大床よ立て事の子細を糺聞れ實もさまで飲醉たる者を左右かく斬  
 べき様おしとて皆誦されけり上下人の失ぬる跡の朝夕鐘打鳴し例時懺法すると常の風俗あれ共  
 此禪門薨せられて後の聊供佛施僧の營もなく日夜軍合戦の諍のみ又他事あかりし入道殿の唯人  
 とを覺の事こそ多かりけれ日吉の社へ参り給ひしよも營家他家の公卿多く供奉して攝祿の臣の

春日御參詣氏入など共是よりいかでか勝るべきとぞ人々ける何よりを又瀬原の經が島を築て  
 上下往來の船今の世迄も煩ひあきこそ目出度けれ彼島へ去る應保元年二月上旬は築始られしよ  
 同八月二日俄も大風吹大波立て皆洩失ひけり同三年三月下旬阿波民部重能を奉行よて築れける  
 よ八柱を立らるべきと公卿僉議ありしが共其の中々罪業あるべしと石の面よ一切經を書て築れ  
 たり此ゆる經島といやあり又都遷のとあて便不便いかよをわれすべきとて叶ぬとこけり  
 平家物語は清盛公の天台の慈惠僧正の化身ありと攝津國清澄寺の慈心房尊惠が夢に閻魔王  
 の物語を直に聞又七言四句の頌を授られ外よ一章の頌を是に入道へとて示され白河院の持  
 經上人の化身と云入道の惡業も世の爲人の爲よ自他の利益をあす被提婆と釋尊同衆生の  
 利益も異あらずとの一段の餘り兒戲も等しきゆる削去てこよ載す殊も四句の頌と云をの  
 閻魔の作よもあれいかよも婉拙も覺ゆ  
 同廿日五條大納言國綱卿も失給ひぬ入道相國とさしを契深かりしが同日は病付て同月卒去あり  
 しを不思議ある同廿二日宗盛卿院參して法住寺殿へ去る應保元年四月十五日造出され新日吉新  
 熊野間近う勸請し奉り山水木立思召まゝなりしが種々の事共よよりて此二三年の院も渡せ  
 給い御所を破壊せしを修理して御幸あし参らすべき旨奏聞せられしよ法皇何の機を有べから  
 ず疾々として御幸なる先故建春門院の御座ける方を御覽されば岸の松汀の柳年經て木高くあれり



大掖の芙蓉未央の柳是ま向ひ給ふも争かば涙進まざらん彼南内西宮の昔の跡今こそ思ひしられ  
 けれ三月朔日南都の僧綱等皆赦され本官も復す末寺庄園一所を相違あるべからざるよし被仰下  
 同十日大佛殿事始あつて奉行の前左少弁行隆を参られける同十日美濃の目代早馬を以て都へ  
 中けるの源氏すでも尾張國迄責上り道を塞一向人を通さぬよしを演説す是も依て討手に向らる  
 大將軍の兵衛督御座左中將清經(小松重盛公の四男也)少將有隆(上も同五男)丹後侍忠  
 房侍大將の越中次郎兵衛盛綱上總五郎兵衛忠光忠七兵衛景清と先として其勢都合三萬餘騎尾  
 張國へ發向す入道殿薨れ給ひ五句をだは満さるゝ亂れたる世と云ながら淺嶺さ育さま也源氏  
 方の十郎藏人行家兵衛佐殿の弟卿公義圓其勢六千餘騎を従へ尾張河を隔て源平兩方は陣  
 取しが六日の夜も入て源氏六千餘騎を渡し平家三萬餘騎が勢の中へ懸入寅の刻より夜明まで戦  
 けるが平家の方の少も騷々敵の川を渡したれば馬物具を皆濡たるを其をしるし討よとて源氏  
 を中も取籠て我討取んと進みける卿公義圓深入して討れけり十郎藏人行家故々も戦ひ家子郎等  
 多く射させ力及ばで河より東へ引退く平家頼て川を渡し落行源氏を追物射し射て行もわをこ此  
 よて返し合せ防ぎ戦ふといへ共多勢も無勢も叶ふべくもみへざりけり水驛を後とするとかかれ  
 と云ふ今度源氏の謀の疎也と人々ける十郎藏人行家の引退き三河國は打越矢矧川の橋を引搦  
 精かいて待かけたり平家頼て續き責るゆゑをこも終も攻落されぬ猶を續て責んよ三河遠江の

勢の容易附べかりしを大將知盛勞ありとて三河國より都へ歸り上られたり今度も僅よ一陣をバ  
 破られたれ共殘黨を攻めれば仕出したるを無が知平家の去後年小松大臣殿薨せらぬ今年  
 又入道殿失給ひぬ運命の末もあると顯なりしかば年來恩顧の者の外の屬者もかりけり東國  
 の草を木を皆源氏もぞ靡ける平家此時尾州よて川を前も陣せし地を呼て洲股合戦へ云傳へたり  
 扱又越後國城越後守資永受領せし朝恩を報せん爲木曾を追討すべしとて三萬餘騎を卒し信濃國  
 へ發向す六月十五日は首途して既も四五里行たるも俄も空掻曇り雷も鳴りしう鳴て闇夜の如き  
 數々閃く電眼を打大雨車軸を漂すや、雲とみへけるが虚空も喘洞聲して金銅十六丈の盧遮  
 那佛と焼亡したる大惡の平家も方人する者も、あり召取やと三度叫んで通りける資永を始と  
 してこれを聞兵ども身の毛も愈立覺けり郎從一同も斯恐しき天の宣告を以て唯理を枉て留せ給  
 へと諫ければ弓矢取身のりれは依べからずと又二十餘町行たりけるも黒雲一郡立來り資永が上  
 り覆ふとみへしが忽ち身噤心惚て落馬したり興も昇れ館へ歸り打臥と三時ばかり遂も死せり飛  
 脚を以て此よしやたけければ平家の人々大も恐れ騒れけり同七月十四日改元有て養和と号す其  
 日除目行れ筑後守貞能肥後守も成て筑前肥後兩國を給りて鎮西の謀叛人を平げん爲二千餘騎も  
 て鎮西へ發向す又其日非常の赦を行れ去る治承三年も流され給ひし人々皆都へ召返され前關白  
 入道松殿備前國より上せ給ひ妙音院太政大臣師長公の尾張國より上落せられ接察使大納言資方

卿の信濃國より歸洛とぞ聞へし同廿八日妙音院殿院參去ぬる長寛の歸洛より御前の簀子よて實  
 王恩還城樂を彈給ひしが養和の今の歸京ふの仙洞よして秋風樂を彈給ふ何ぞ風情を思召よ  
 るせ給ひける御心操こそめでたけれ按察使資方卿も其日同じう院參せらる法皇御覽有ていかよ  
 やいかよ此ごろの習ぬ鄙の住居して野曲なを今に定て迹形あらじと思し召と先令様一ツあ  
 れかじと仰ければ資方卿拍子取て信濃有ある木曾路川と云今やうを是に正しう見聞れたりし  
 かバ信濃ありし木曾路川と歌はれけるこそ時取ての高名あれ妙音院殿尾張へ流され給ひし  
 時罪なくして配所の月をみんといひし心ある際の人願ふとあれば大臣敢て事とせし給はず彼  
 唐の太子賓客白樂天潯陽の江の邊に徘徊けん其古を想像鳴海潮澹路遙遠見して常の明月  
 を望浦風は嘘き琵琶を彈じ和歌を詠じて等閑がてら月日を送り給ひし或時當國第三の宮熱田  
 明神へ參詣あり其夜神明法樂の爲に琵琶と彈朗詠し給ふが本より無智の境あれば情を知らる者  
 をなし邑老村女漁人野叟頭を低耳を聳といへ共更に清濁を分ち呂律を知となしされ共胡巴琴を  
 彈せざりしかバ魚鱗踊進虞公歌を發せしかば梁塵動搖物の妙を究る時自然に感催す  
 理されバ諸人身の毛豎て滿座奇異の思ひをさす漸深更及で諸杏調の内よ花芬馥の氣を含  
 み流泉の曲の間よ月清明の光を争ふ願く今生世俗文字の業在言綺語乃謬を以てと云朗詠と  
 して秘曲を彈給ひしかバ神明感應は堪給はず寶殿大震動す平家悪行あかりせば今此瑞相をバ

争か拜ひべきと大臣感涙を流されしとかや扱を八月七日宮聽よして大仁王會行る是に將門追  
 討の例と聞へし九月初日よの純友追討の例として伊勢太神宮へ饗の甲冑を參らせらる勅使の祭主  
 神祇權大副大中臣定高之都を立て江州の甲賀の驛より病着しが同三日伊勢の離宮よして遂に死  
 せり又調伏の爲五壇の法承て行ひける降三世の大阿闍梨大行事の彼岸所よして寐死よ死す神明  
 を三寶も借よ御納受なしと云と掲焉又太元法承て行ひける安祥寺の實支阿闍梨が抄卷數を進  
 せたるを披見せられければ平家調伏のよしを注進せしこいにかよと仰ければ朝敵調伏せよと  
 仰下されゆゑのらく當世の軀を見ゆ平家専ら朝敵と存られぬよつて彼を調伏なし何の  
 答やいずきとやける此法師奇怪也死罪かと流罪かと沙汰ありしかを大小の總劇は打紛れて何  
 事をおく打過られしが平家亡び源氏の世とあり此事鎌倉よ聞へ頼朝卿其器量を賞せられ僧正よ  
 とし下されぬ同十二月廿四日中宮院號を崇らせ給ひ建禮門院とぞやける主上いまだ幼少の時  
 母后の院号の是を始と傳ふさるほどよ今年も暮て養和二年となる節會以下常の如し二月廿一  
 日太白昂星を侵す天文要録いわく太白昂星を犯せば四夷起又將軍勅命を奉つて國の境を出共  
 みへたり其三月十日除自行平家の人々大畧官加階わがられぬ四月十五日前權少僧都顯真日吉  
 社よして如法よ法華經一萬部轉讀致さるゝとありは結縁の爲よとて法皇も御幸あり何者の中出  
 けるやらん一院山門の大衆よ仰て平家追討せらるべしと聞へしか巴軍兵内裏へ參じて四方の陣

頭を鑿固す平氏の十類皆六波羅へ馳集りける本三位中將重衡卿其勢三千餘騎よて日吉社へ參向す山門又又聞へけるの平家山攻せんとて登山はとて太衆東坂本へ降下てこのいかよと僉議す法皇も敵慮を驚かせおのしがす公卿殿上人も色を失ひ北面の輩の内より餘り周章噪て黄水吐るの多かりけり洛中山門の騒動大方ならず去はせよ重衡卿穴太の邊よて法皇を迎取進らせして都へ還御せし奉る一院山門の大衆よ仰て平家を追付あるべしと云とも平家又山攻せんと云事を凡て迹なき虚事あり只天魔の能荒たるよこそと人守ける法皇仰けるいかくのみあらんよ此後には物詣ちと中事を心よの任すまじきとやらんとぞ仰ける同廿日二十二社へ官幣使を立らる是の飢饉疫疾行るよ依て也(こよ一院とあるの法皇の位と之新院移ればこそ一院とやあれ新院崩じ給ふ後の法皇とやてよし却て紛ひしく聞ゆ)

越前國火燧の城軍加賀國砥浪山軍木曾殿妙策

同五月廿二日改元有て壽永と号す其日除目行れて越後國に住人城四郎資茂を越後守よ任す兄資永死去の間不吉と思ひ頻に辭しけれ共勅命なれば力及ばず是よよつて資茂を改て永茂と更名す去程よ九月二日越後守永茂木曾退討の爲越後出羽會津四郡の兵共を引卒し都合其勢四方餘騎信濃國へ發向す國九頭當國横田河原は陣を取木曾義仲の依田の城よ在けるが三千餘騎よて城を出馳向ふ爰は信濃源氏若止丸郎光盛が謀よ三千餘騎を七手よ分俄よ赤旗七流作て手々よさし上

わとこの峯愛の洞より寄ければ越後勢共是をみてわのや此國よも身方の有けるの力付ぬとて勇み悦ぶ處よ次第よ近う成ければ相圖を定て七手がひとつよ成赤旗共切弄させ兼て用意せし白旗と旗と翻し閑を咄と作ければ越後の勢共是を見てこの謀られよけり敵何万騎かあるらん取籠られてハ叶ふまじとて周章狼狽けるが或ハ川へ追入られ又ハ懸所へ捲り墮され助る者の少く討る者多かりける城永茂が宗徒と頼切たる越後の山太郎會津の乗丹房など云一人當千の兵共皆討取れけり永茂も手負てからさ命生河よ附て越後國よ引退き飛脚を以て注進しければ平家の人々これを事共せられず同十六日前右大將宗盛卿大納言よ還着して十月三日内大臣よ成給ふ同七日悦すの有しよ公卿ハ花山院中納言を始奉て十二人扈徒し遺續らる藏人頭親宗以下殿上人十六人前駐す中納言四人三位中將を三人迄坐さ東國北國の源氏等蜂の如くよ起り合唯今都へ亂入よし聞へしか其平家の人々の風の吹やらん波の立やらんをを知り給はずかやうよ花やかなりし事共中よ云かひなくぞみへしさるはとよ今年を暮て壽永も二年よ成よけり節會以下恒例の如し正月五日朝觀の行幸ありけり鳥羽院六歳よて朝觀の行幸ありし其例とぞ聞へける二月廿一日宗盛公從一位よ叙せられ願て其日内大臣をば上表して辭し給ふ是ハ兵亂愼の爲とぞやける南都北嶺の大衆熊野金峯山の僧徒伊勢太神宮の祭主神宮よ至るまで向平家を背て源氏よ心を通しけり四海よ宣旨を成下し諸國へ院宣を遣せども皆是平家の下知と心得たるゆゑ隨附者さらよあか

りけりさて又三月上旬木曾次郎冠者義仲鎌倉右兵衛佐殿と不快の事あり鎌倉殿の木曾を退討せ  
 んとて十萬餘騎を卒し信濃國へ發向し善光寺へ着れし木曾三千餘騎を卒し依田の城を出信濃  
 と美濃の境ある熊坂山に陣を敷乳母子(中三權頭兼遠の次男)今井四郎兼平を使者よて右兵衛  
 佐殿の許へ遣し抑御邊の東八ヶ國を打從へ東海道より攻上り平家を退落さんといしたまふ  
 某も東山北陸兩道を打從へ北陸道より攻上り一日も先平家を亡さんと存る處いかある子細有  
 てか御邊と義仲中を違て平家笑れんや但し叔父の十郎藏人殿こそ御邊を恨ると有とて義仲が  
 許へ坐つるを義仲すげなう應答持成やさんといかいは侍へば是迄の打連中たり義仲は於ての全  
 意趣さらぬはずとやさされける右兵衛佐殿返辭よ今こそ左様アされるれども正しう頼朝を討べき  
 企ありと慥告知する者あり但しそれより依べからずとて土肥梶原を先とし數方の軍兵を指  
 向らるゝよし聞ゆるゝ依て木曾眞實意趣あるを顯さん爲嫡子清水冠者義重とて十一歳ある小海  
 野望月諏訪藤澤と云一人當千の兵を添て右兵衛佐殿の許へ遣しければ鎌倉殿此上の誠意趣  
 なかりけり頼朝いまだ成人の子を持す好く更ば子致さんとて清水冠者を相具して鎌倉へ歸  
 へられぬ去程も木曾の東山北陸兩道を打隨へ既も都へ押寄ると聞へけり平家去年の冬比より明  
 年の馬も秣飼軍有べしと披露ありしかば山陰山陽南海西海の兵ども雲霞の如く馳湊る東山道の  
 近江美濃飛驒の兵の参りたれ共東海に遠江より東の兵の一人を参らず平家の人々先木曾を討て

鎌倉を討べしと評定有北國へ討手を差向らる大將軍より小松三位中將維盛(故重盛公物領)越前  
 三位通盛(門脇殿の物領)副將軍より薩摩守忠度(清盛公の末の弟)皇后宮亮經正(參議經盛の物  
 領敦盛の兄)淡路守清房(清盛公七男)從五位下知教(清盛の八男)侍大將より越中次郎兵衛盛續  
 上総大夫判官忠綱飛驒大夫判官景高河内判官秀國高橋判官長綱三郎左衛門有國を先として以上  
 大將六人然るべき侍三百四十餘人其勢十萬餘騎四月七日辰の一點も都を立て北國へ趣れける片  
 道を給てければ相坂の關より始て路次も持達權門勢家の正税官物をも怖す一々皆奪取志賀唐崎  
 三川尻眞野高島鹽津貝津の道の邊を次第も追捕して通りければ人民堪ずして皆山野に逃散す大  
 將軍の皆進み給へ共副將軍のいまだ江州貝津も扣へたり中も經正の幼少より詩歌管絃の道も  
 長せし人もて坐ければかゝる亂たる世も風流のみも心を澄し或朝湖の端も打出遙澳なる島  
 を見渡し伴もいふ藤兵衛尉有教を召われいかなる島ぞと問給へばわれこそ聞へたる竹生島も  
 ていとやければいざや參んとて有教と安右衛門尉守教以下侍六人具して小船も乗竹生島へ參ら  
 れたる比卯月中の八日のとあれば縁も見ゆる梢も春の情と残すかと疑れ淵谷の鶯舌聲老て  
 勸音床しき子規折知顔も告渡り松も藤浪咲かゝりて誠も面白かりしかば經正いそぎ舟より下岸  
 へ揚て此嶋の氣色を見給ふよ心を言及べれず彼秦皇漢武或は童男草女を遣し或は方士をして  
 不死の藥を求しむ蓬萊をみせんば竟遠と云て徒舟の中もて老天水茫茫々として需得りけん